

図92 土坑401, 321, 310, 315, 313, 342, 526, 268平・断面図および1C トレンチ土坑出土遺物

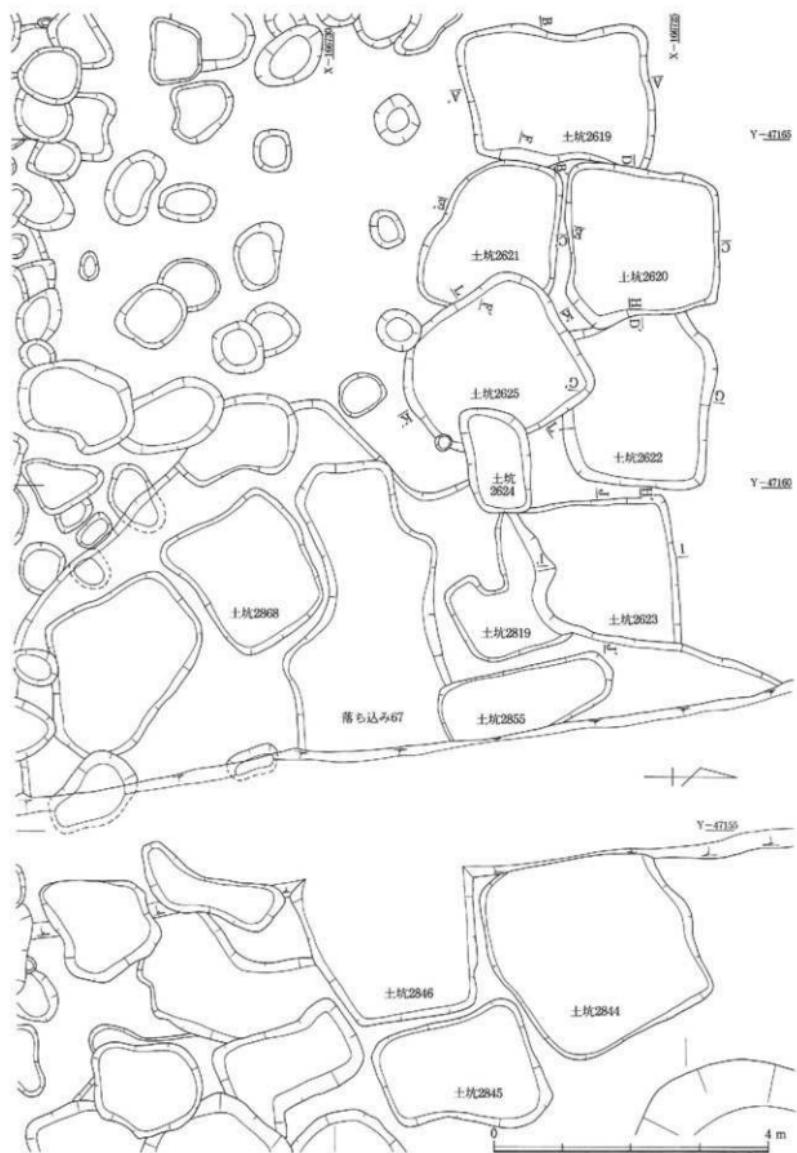


図93 5C トレンチ方形土坑群

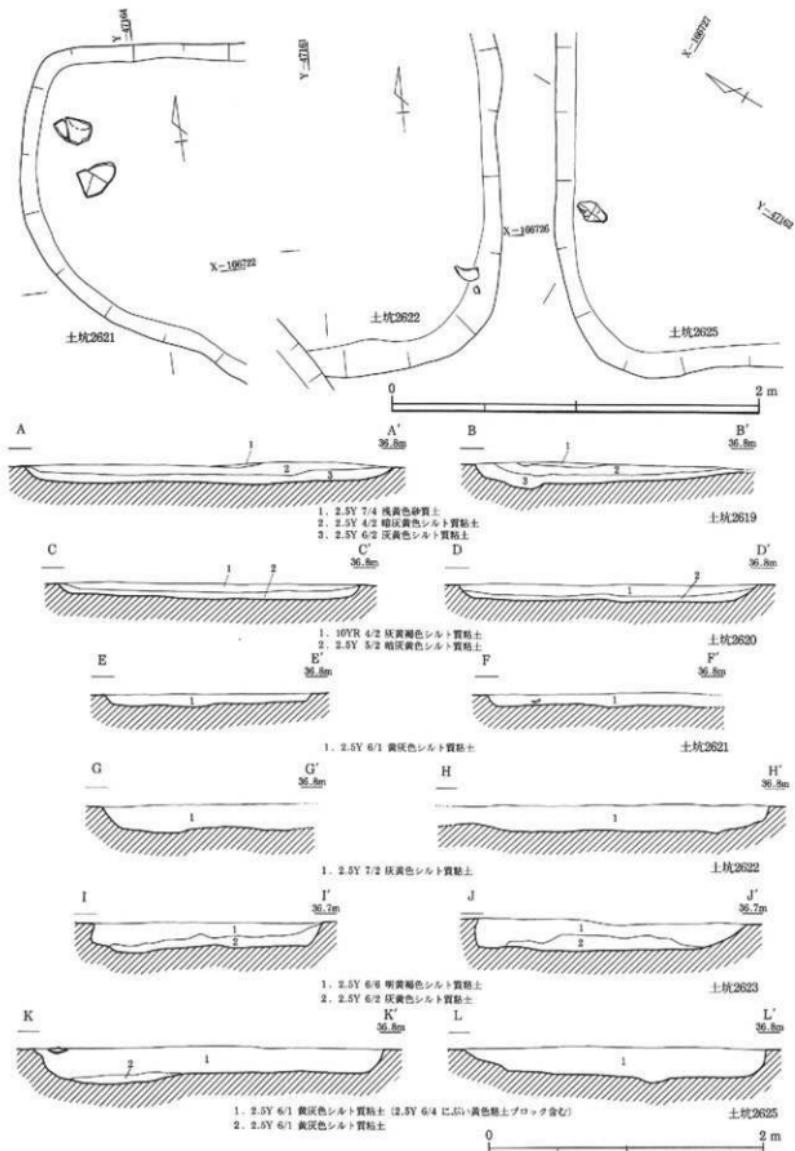


図94 5C トレンチ土坑平・断面図

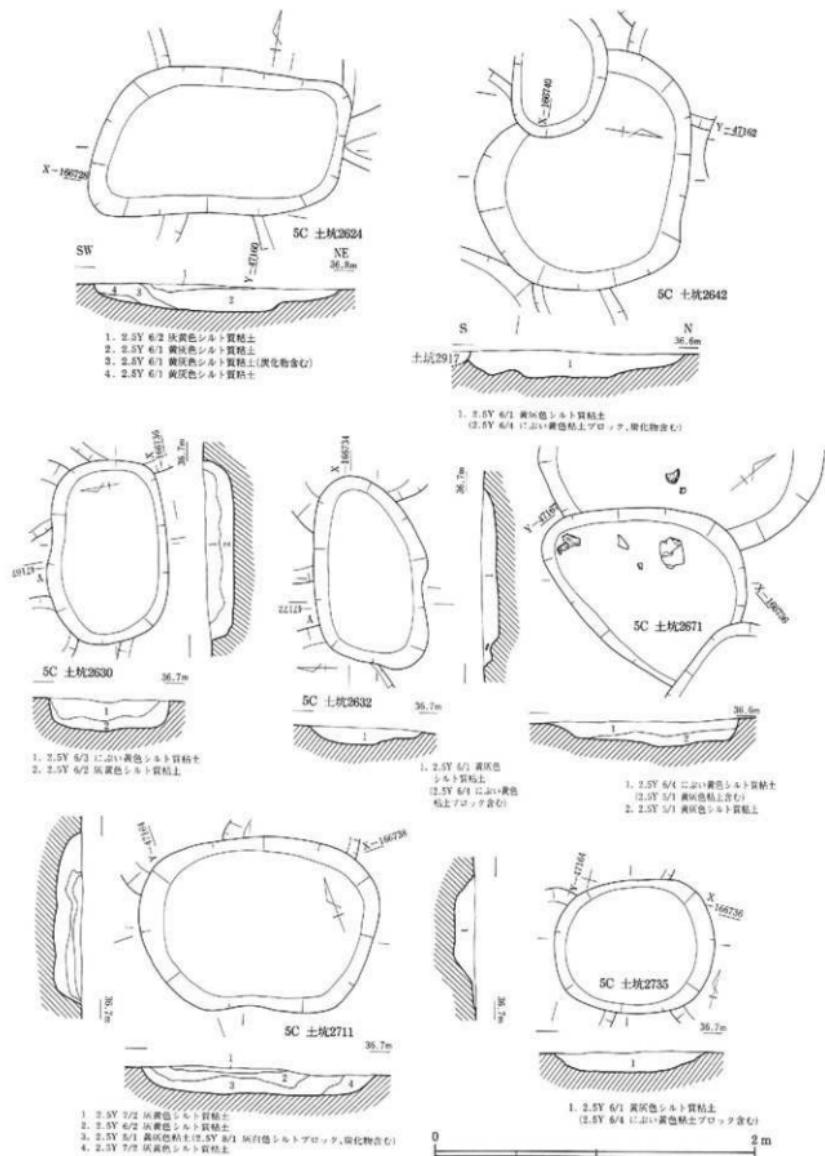


図95 5C トレンチ脂肪酸分析土坑平・断面図

後、外面全体に回転ナデにより暗文状のミガキが施されている。903は肩と体部の境が角張り、底部は平底である。外面調整は底部中央が指揮さえ、ナデ、底部外周から底部直上までが回転ヘラ削り、肩から体部は回転ナデである。外面の頸部から肩部にかけての一部と、体部内面の一部に灰を被っている。なお、平瓶と同一個体の破片は土坑578からも出土し、接合した。902・903はIV-1～2段階のものか。

土坑342（図92・101）は1Cトレンチで検出。長軸長約2.6m、短軸長約1.3m、深さ約22cmを測る。埋土は黄灰色系のシルト質粘土が堆積し、上下2層に分層できる。いずれも流入した状況を示すものと判断される。埋土中より須恵器鉄鉢形鉢の破片が1点出土。遺物（図92-904）は口縁部1/4周が残存する。調整は体部外面を回転ヘラ削りのち回転ナデ、口縁部は回転ナデである。904はIV-1～2段階に属すると思われる。

土坑526（図92・103、写真図版95）は1Cトレンチで検出。長軸長約1.6m、短軸長約1.2m、深さ約14cmを測る。埋土は黄灰色シルト質粘土。埋土中より須恵器すり鉢の破片、壺の体部から底部にかけての破片が1点などが出土。遺物（図92-905）は口縁部が大部分欠損したすり鉢で、焼成不良の軟質である。底部に厚みをもち、口縁部から体部にかけては斜め上方に直線的に開く。口縁端部は内側に肥厚する。905はIV-1～2段階のものか。

土坑268（図92、写真図版34・95）は1Cトレンチで検出している。直径約1.6～1.9m、深さ25cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土は下層に褐灰色シルト質粘土、上層に灰黃褐色粘質土がみえ、遺物は北西隅から正位の状況でほぼ完形の平瓶が1点出土している。土坑底面からは数cm浮いた状況である。遺

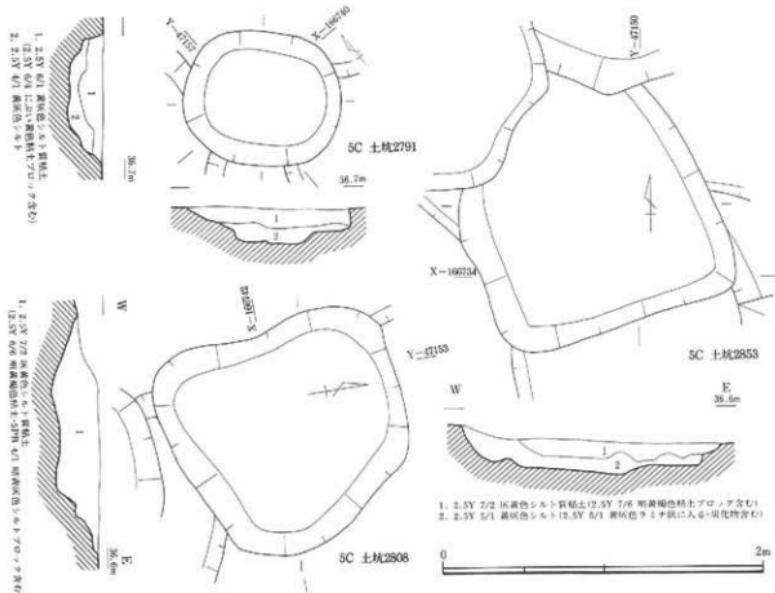


図96 5Cトレンチ脂肪酸分析土坑平・断面図

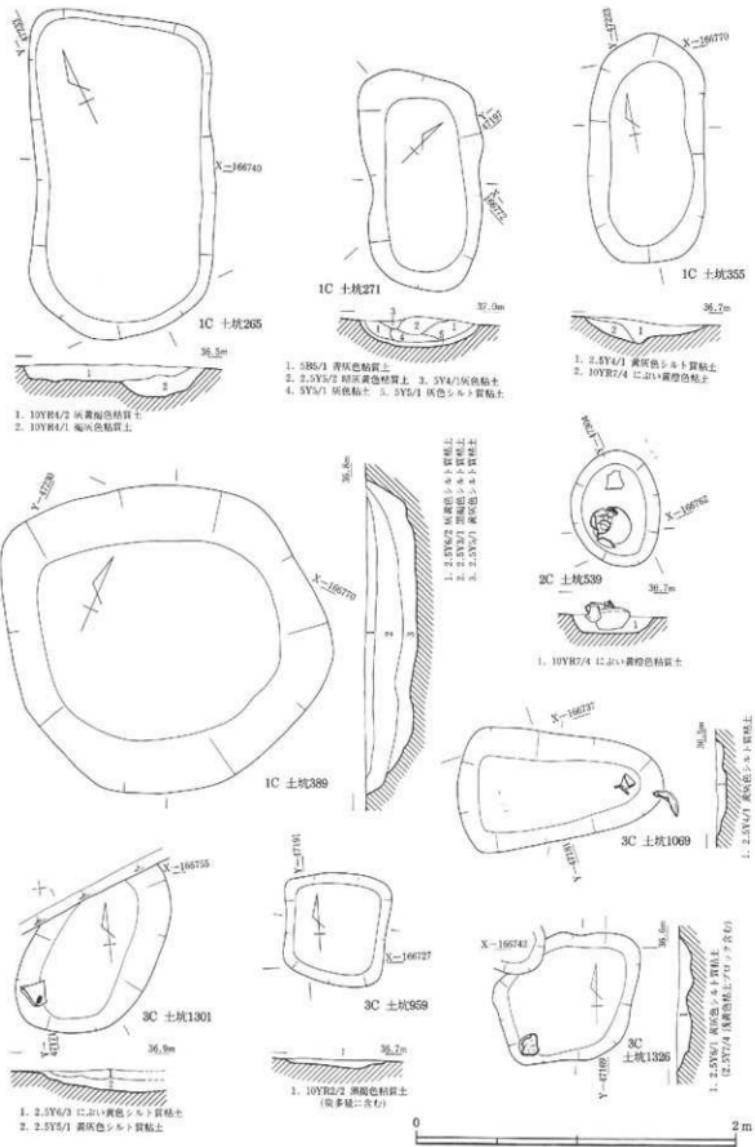


図97 1C・2C・3C トレンチ土坑平・断面図

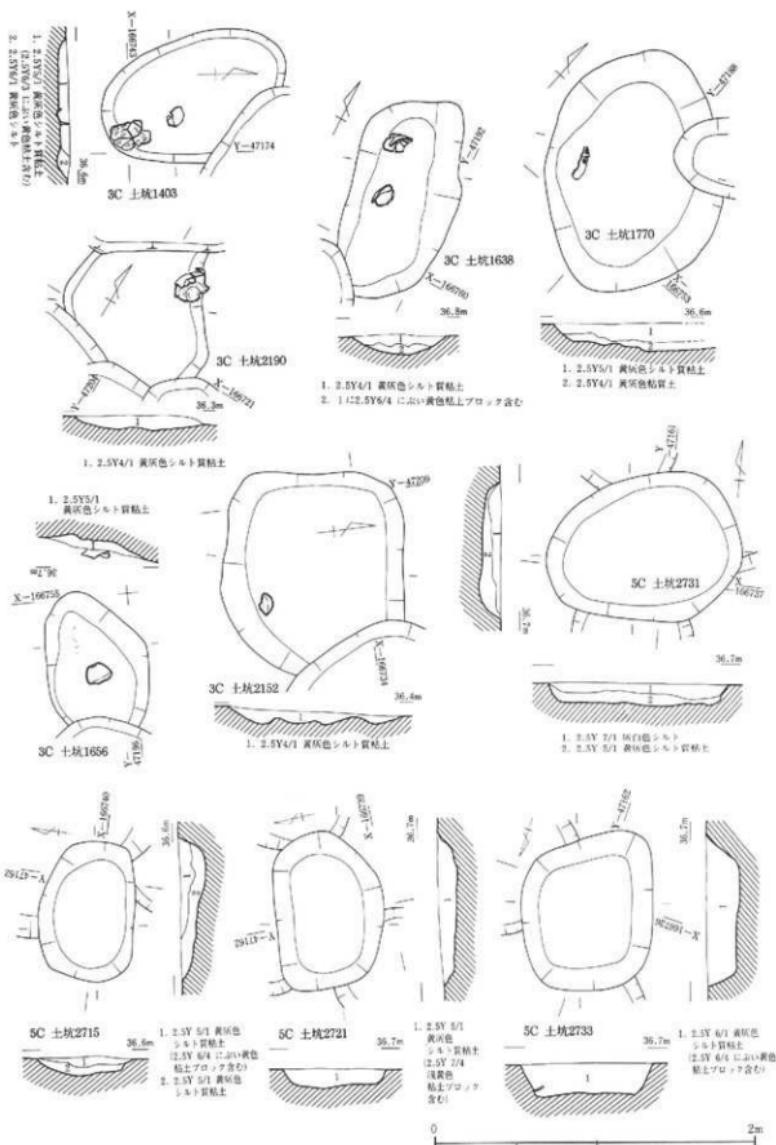


図98 3C・5C トレンチ土坑平・断面図

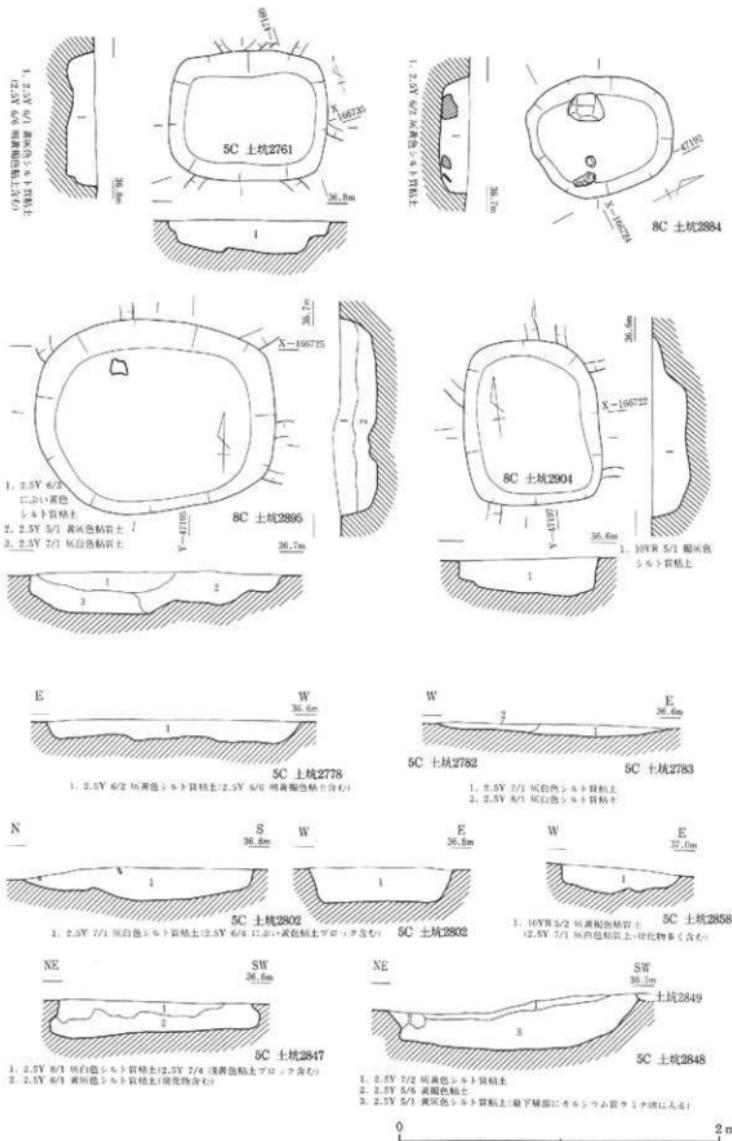


図99 5C・8C トレンチ土坑平・断面図

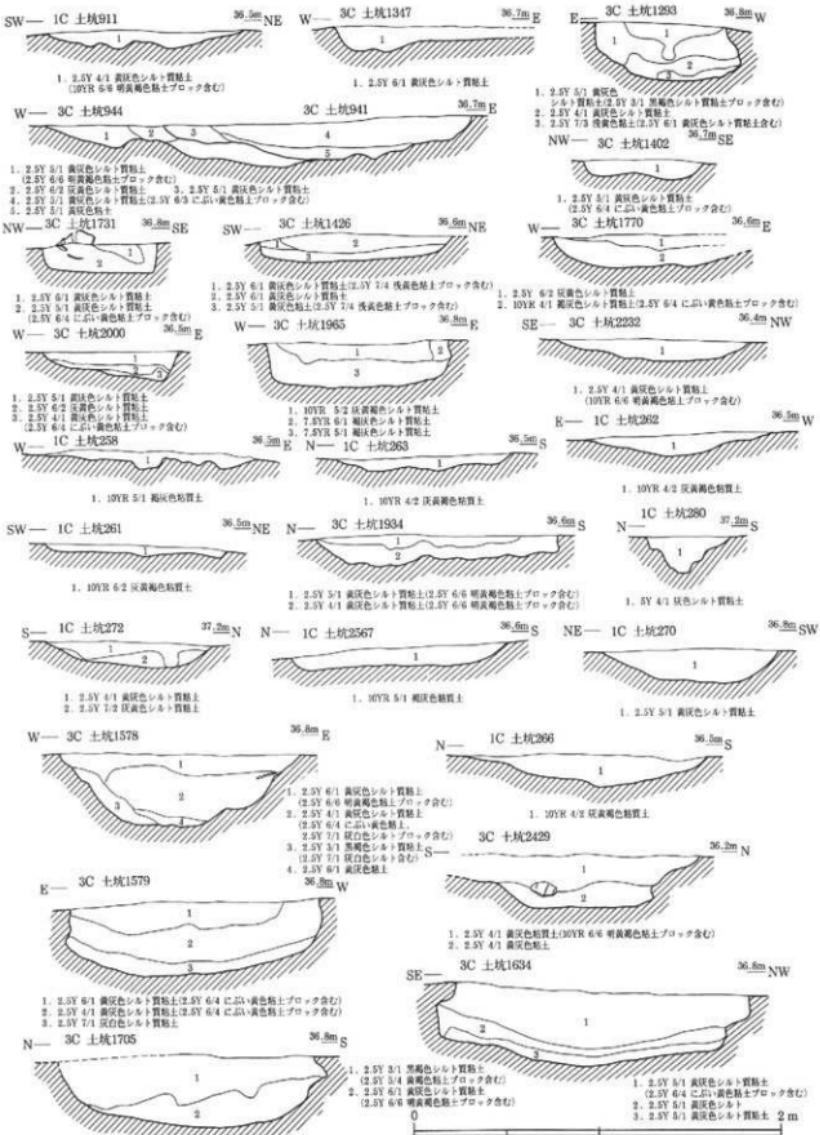


図100 1C・3C トレーンチ土坑断面図

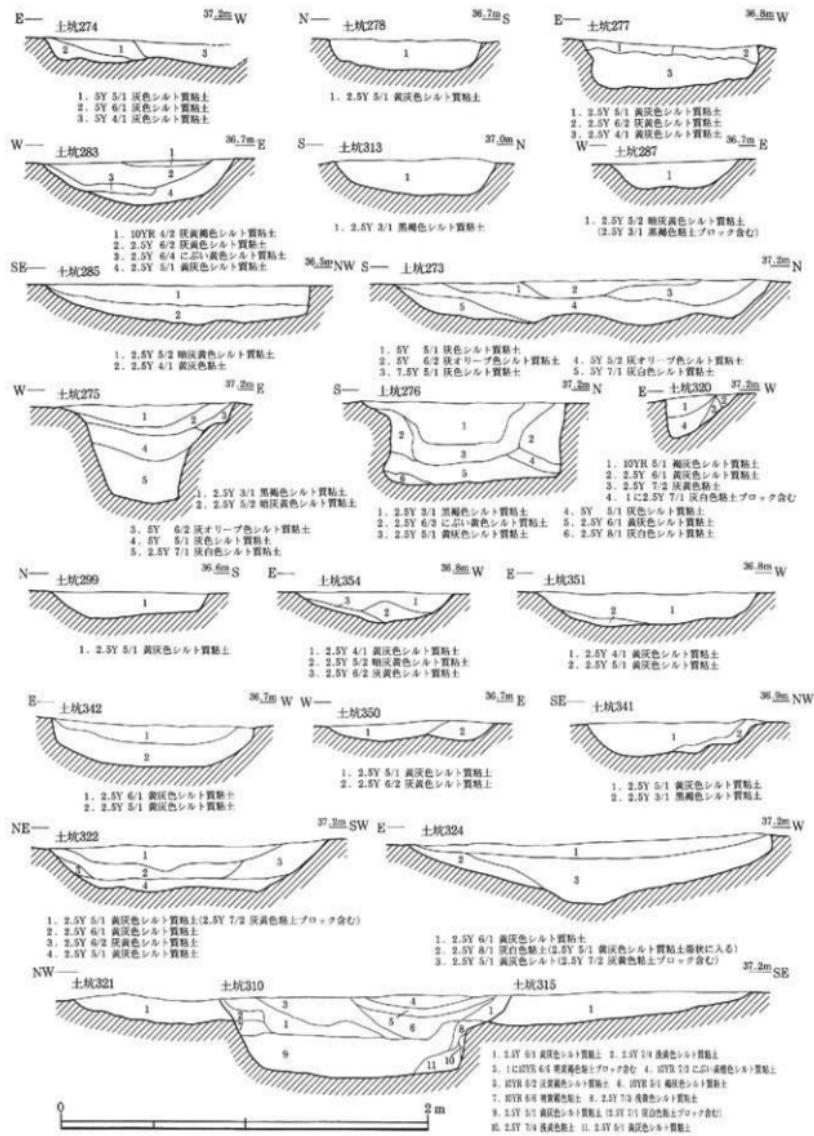


図101 1C トレンチ土坑断面図

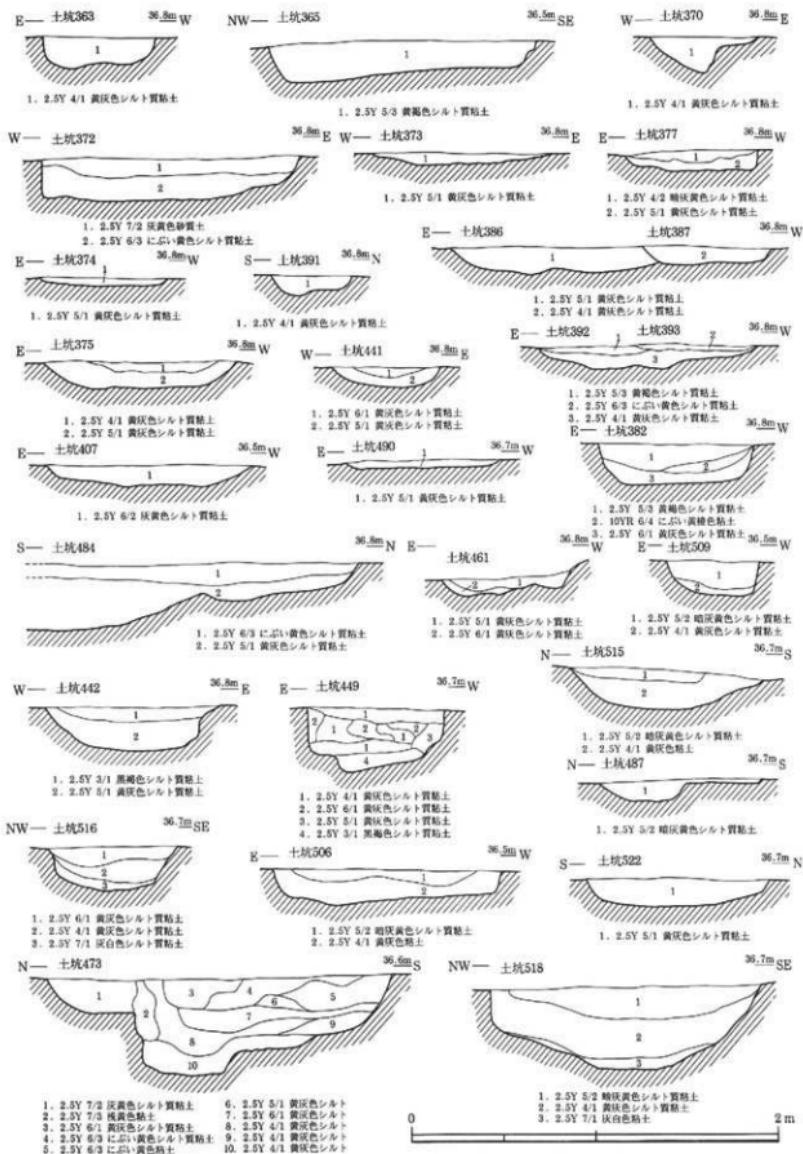


図102 1C トレンチ土坑断面図

物(図92-906)は把手を有し、肩が張る形態をしており、体部径21.4cmを測る。IV-1~2段階に属する。

#### 6. 窯(図104~110、写真図版38~41・96~100・107~111)

須恵器窯跡は前述のTG229の他に、6Aトレンチ西端の斜面において、もう一基の窯跡(TG228)を検出した。東に下る斜面に地山面を掘り込んで築造しており、窯体の残存長約3.2m、最大幅約1.4mを測り、主軸方向はN-53°-Wをとる。

窯跡は燃焼部の舟底形Pitと焼成部が検出され、上部は削平を受けており東壁、煙道部、天井は残存しない。また前部、灰原は調査区外の泉北北線の道路下に続くものと思われ、今回の調査では検出していない。

燃焼部の舟底形Pitは焼成部側ほぼ半分が確認され、横幅約0.7m、深さ0.4mを測る。舟底形Pit内は土器が多く入っており、暗灰色から暗灰黄色を呈した砂疊層と炭層がレンズ状に堆積していた。

焼成部床面残存長は2.4m、最大床幅は1.4mを測り、床面は2面の確認ができる。窯内には炭化物、窯壁等の焼土塊、黄色のシルトブロックを含んだ灰色粘質土が充満しており、上層には更に流れ込んだ

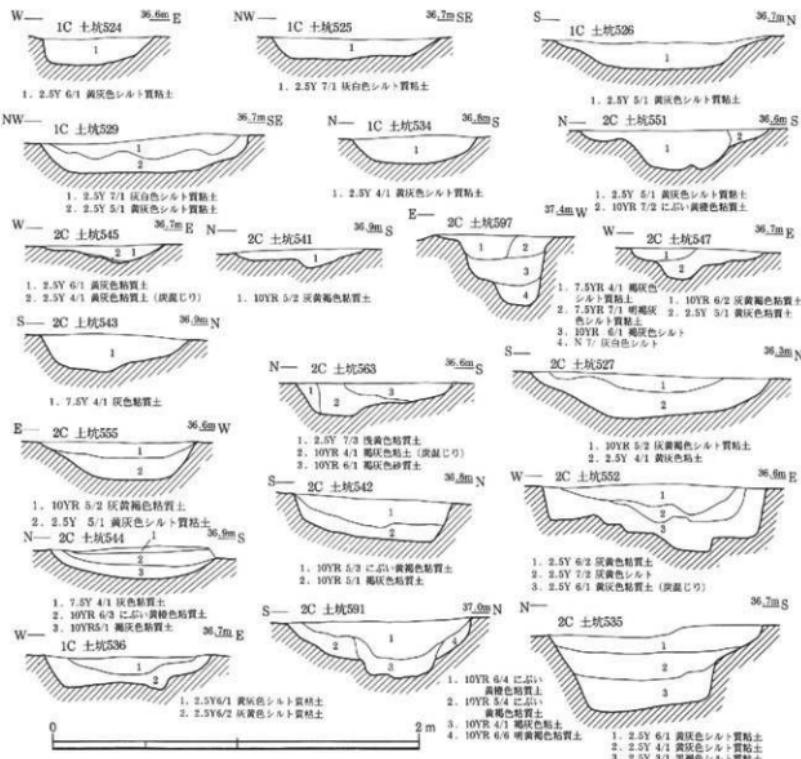


図103 1C・2Cトレンチ土坑断面図

砂礫混じりの黄灰色粘質土がみられる。床面Ⅰは暗灰色のよくしまった砂質土をベースとし、床面Ⅱは地山面であるオリーブ灰色の焼固した砂質土をベースとする。床面は直線的に奥へ伸びるが、途中で上方にやや反り上がっている。中央部の床面傾斜は約23°を測る。

床面Ⅰを精査する過程で床面直上に置かれた遺物が検出された。これらの遺物はいずれも伏せた状態になっており、焼き台としての使用が考えられる。

床面Ⅰのベース層を取り除くことにより、床面Ⅱに伴う遺物が焼成部上方にその一部が残存していた。焼き台と考えられる遺物と共に蓋が出土している。

窯壁の表面は灰色を呈する堅固な壁となっており、内部は窯壁片の混じった黒褐色、褐灰色粘質土を貼り付けている。また、最終段階に大幅に補修が行われているようであり、断面からは複数の壁面を確認することができなかった。壁には写真図版39-2のような遺物が付着し、また、壁内には写真図版39-4のように遺物が含まれているところからもうかがわれる。

出土遺物は図106～110に示した。図105では出土状態に遺物番号を表示した。遺物の時期はⅡ-1～2段階からⅣ-1～2段階までみられ、Ⅲ～Ⅳ型式が中心である。口縁部残存の全個体数1002点中、杯身、杯蓋は合計925点と蓋杯の占める割合が約9割強を占める。他には甕、平瓶、壺、長頸壺、鉢、短頸壺、壺、壺蓋？、横瓶、提瓶、懸、器台、瓶、皿などがみられる。Ⅲ～Ⅳ型式の杯身、杯蓋で高台の有無に関係なく、口径の計測可能なものをみると、杯身では口径10cm前後の小型、14cm前後の中型、18cm前後の大型がある。杯蓋では口径12cm前後の小型、16～17cmの中型、18～20cmの大型がある。無高台の杯身に小型、中型が、高台付きの杯身に中型、大型が多い。また、蓋杯では焼け歪みのある土器が多く認められた。また、ヘラ記号は不確実なものも含めて4点に4種類のものがみられた。それらは、「一」が灰原出土のⅢ型式の杯蓋の天井部破片に、「フ」の字状が図110-1051の甕頸部外面に、平行する縦線3本のヘラ記号が図110-1052の甕頸部内面に、ほぼ平行する縦線4本のヘラ記号が図109-1031の短頸壺肩部外面につけられている。このうち、1031については線が他のヘラ記号と比較して太い点から、偶然ついた可能性も考えられる。また、杯蓋にてもその殆どがヘラ記号を有していないことから、偶然の可能性は否定できない。結局、TG228出土のヘラ記号のある須恵器では、甕のヘラ記号だけが確実なものと考えられる。

図106-907～918はⅡ型式に属すると思われる杯蓋である。907の稜部は小さいが明確に突出しており、Ⅱ-1～2段階に属する。908、911、914、915、917、918は杯身かどうか迷うもので、Ⅱ-6～Ⅲ-1段階としたほうが良いかも知れない。908～918のうち、916のみ天井部外縁が回転ヘラ削りで、それ以外のものは全て回転ヘラ切り未調整である。912、918の天井部内面に一定方向のナデがみられる。910、914は焼け歪みが著しい。911は窯業破片が外縁に付着している。907、908、910、915は外縁に灰が、909、913、916、917は内縁に、911、912、914は外内縁に灰がかぶっている。909は床面Ⅰの焼台である。910、918は床面Ⅰ、912～914、916、917は床面Ⅱから取り上げられたものである。

図106-919～939は杯蓋にかえりのついたⅢ型式に属するもので、939はかえりが殆ど消失した杯蓋である。933、935、938は天井部内面に一定方向のナデがみられる。923～925の杯蓋内面には杯身が逆になつて溶着している。923、924は杯蓋外縁に溶着痕を留める。また、925の杯蓋に溶着した高台付き杯身は底部中央に孔が開き、体部も高台の周縁で割れているが、再加工によるものか。926の内面には杯身か不明の溶着痕が、932には外縁に溶着痕がみられる。921、922、936は歪みの著しい杯蓋である。外内に灰をかぶった3点を除き、Ⅲ型式の杯蓋には内縁に灰をかぶったものが多く、外縁にのみ灰をかぶっ

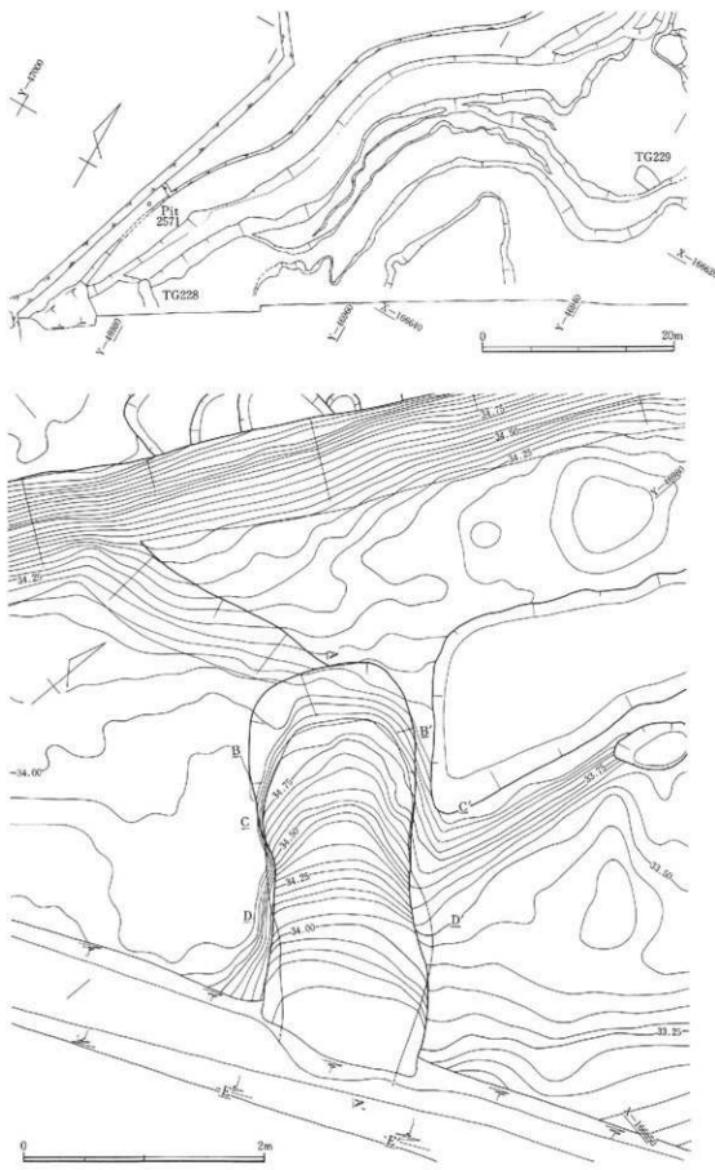


図104 TG228, 229位置図およびTG228平面図

たものは少ない。919、937が床面II出土である。921、927、933は舟底形Pit、928、929、931、932、935、938は床面I出土である。

図106-940~950はかえりの無いIV型式に属する杯蓋である。天井部内面に一定方向になでたものが多い。灰を被ったものは少なく、943、944、950は外面に、949は内面にみとめられた。950は焼け歪みが著しい。941~944、947、950は床面I、945、946、948、949は舟底形Pit出土である。

図106-951~図107-979、981~1008は杯身である。951~954はII型式の杯身破片であり、II-3~4から6段階に属する。2点は外面に灰をかぶっている。957、958、960、966、972、985、995、997、999、1000、1003、1004は舟底形Pit出土である。975、976、987は床面Iの焼き台である。973、979、993は窯壁内より出土している。956、959、961~965、967、971、974、980、984、986、988~992、994、996、998、1001、1002、1005~1008は床面I出土である。

図106-955~図107-979は高台の無い杯身である。955~958、966~970は小型、959~965、971~979は中型である。955~958は前述の杯蓋と同じく、杯蓋か杯身か迷うところのものである。無高台の杯身には口縁部の特徴でいくつかに分けられる。口縁部が内湾気味になるもの(955、956、959、960、963)、ほぼ直立するもの(979)、「逆ハ」の字状に斜め上外方に開くもの(957、958、961、962、964、968、970~975、977、978)「逆ハ」の字状に開いて口縁端部寄りで更に外方へ開くもの(969、976)の4種類がみられる。底部外面は955の回転ヘラ削りを除いて、回転ヘラ切り未調整が殆どであるが、958、971、977~979には回転ヘラ切りの後に一部ナデがみられる。973、978、979の底部外面に幅0.8~1.2cmの粘土紐の接合痕が残る。外内に灰を被ったものを除いて、内面よりも外面に灰を被ったもののほうが少し多くみられる。970、976は焼け歪みが大きい。975、976は床面Iの焼き台で、973、979は窯壁内より出土した。

図107-980は皿である。底部外面に粘土紐の痕跡が残り、回転ナデが施されているが、微かに細かい布目?らしき圧痕が認められる。

図107-981~1008は高台付き杯身である。985が小型、1003~1008が大型、それ以外は中型である。981~984は高台が底部端よりも中央寄り、ハの字状に開いてやや高く、踏ん張った形でつけられている。985~1008は高台が底部端寄りに、直立から少しハの字状に開き、短くつけられている。底部外面はヘラ切りのち一定方向になでたものが多いが、981~983は回転ヘラ削り、986、1003は回転ヘラ削りのちナデを施している。988、990、1000の底部外面に幅0.8~1.0cmの幅の粘土紐の接合痕がみられる。灰を被ったものは少ないが、数点の外面にみられる。982は高台にIII-2~3段階の杯蓋が溶着している。

床面IIからはII-5~6段階からIII-2段階の杯蓋が、床面Iおよびその焼き台と舟底形PitからはII-4~5段階からIV-2段階の蓋杯が出土しており、床面IIに古い段階の須恵器がみられる。ヘラ記号は蓋杯では1点も認められなかった。

図107-1009~図108-1013は高杯脚部である。II-6からIII-2段階に属すると思われるものである。1013は脚据部を打ち欠いており、その後に脚部外面に自然釉が多くかかっているため、焼き台として使用したものか。

1012は焼成不良である。

図108-1014は口縁として図化したが、口縁か脚か不明のものであり、内面に灰を被る。

図108-1015は把手破片であるが、瓶か。把手上面に筋を2条刻んでいる。

図108-1016~1019は鉢と思われるものである。1016は床面I出土で、底部外面には静止ヘラ削りが

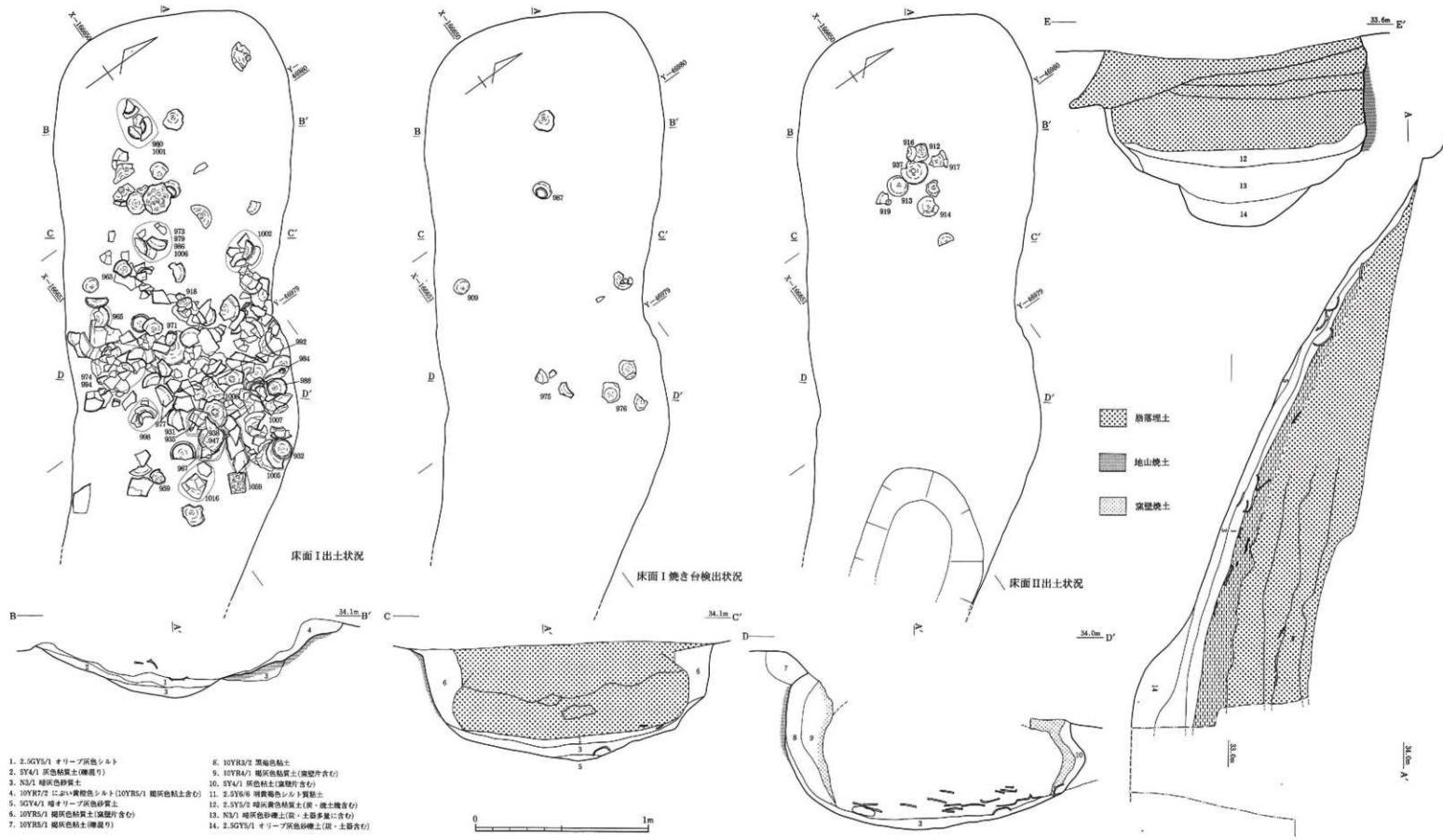


图105 TG228断面図

施されている。1017は灰原出土で、表面が摩耗して詳細は不明だが、瓶の口縁部破片の可能性もある。

1016、1017は生焼けである。1018の体部には一部焼き膨れが見られる。

1018、1019の体部下半には回転ヘラ削りが施されている。

図108～1020、1021は焼成がやや不良のすり鉢である。1020は舟底形Pit出土で、底部外面にハケ目があり、1021の底部外面中央は一定方向のヘラ削りが施されている。1021の上端破損部は磨滅しているが、摩って再加工したものか。

図108～1022～1025は平瓶で、1022が小型、1024が大型である。1023、1025はその中間位の大きさである。1024以外は口縁部の欠損の大小はあるが、残存状況は良好である。1023、1025の底にはひび割れがみられる。1022の円板充填の直径は約3cmである。1024の円板充填の直径は約7cmで、円板でふさいだ内面に細かい布目状の圧痕がみられる。

図108～1026は横瓶の体部破片である。体部の端は直径約7cmの粘土板で円板充填によりふさがれているが、その内面には指紋と細かい布目状の圧痕がみられる。1027は横瓶の口縁部破片か。

図108～1028～図109～1033は短頸壺である。1028～1030は口縁部がやや上外方へ短くのびる。1031～1033は口縁部が短く直立する。1028は灰原出土である。1030、1031、1033の底部外面は静止ヘラ削りが施されている。1033はミニチュアで、その蓋と思われる少し焼け歪んだ1034もみられる。1031は焼成がやや不良である。

図109～1035～1037は壺の体部破片である。1035は焼成がやや不良で、体部に「×」状の刻線と沈線文が2条施されている。1036は脚部に焼け歪みがみられる。1037は脚部に円形状の透かしが3ヶ所ある。

図109～1038～1040は壺の口縁部破片と思われるものである。1038、1039は短く斜め上方へのびる頸部に口縁端部が僅かに内方へ拡張している。口径が大きいが、横瓶の口縁部形態と類似する。これらの焼成は不良およびやや不良である。1040は灰原出土で、短頸壺の大型か不明のものである。

図109～1041～1045は長頸壺である。III-2～IV-1段階に属すると思われるものである。口縁部ないし頸部には沈線文が施されている。1045に少し焼け歪みがみられる。

図109～1046～図110～1059は甕である。口縁部の特徴として、頸部で外反しそのまま口縁端部で丸く仕上げたもの（1046、1050）、口縁端部が丸ないし四角形状に肥厚したもの（1047～1049、1054、1055）、口縁端部を外方へ折曲げたようなもの（1051、1052）、口縁端部が外方に面をなして肥厚したもの（1053）、口縁部の肥厚が薄くなり、端部で上方へ少しつまみだされたもの（1056、1127）、口縁端部で内方へ肥厚したもの（1057）、口縁端部で斜め下方へ拡張したもの（1058、1059）がある。

1046は一見土器器のようだが、焼成不良の須恵器である。外面は磨滅して詳細不明であるが、回転ヘラ削りの後、一部カキ目、のち横ナデを施したものか。1050は胎土が他の甕に比べて少し粗い。1051の頸部外面にはフの字状の、1052の頸部内面には3本線のヘラ記号がみられる。1051、1053は灰原出土である。1055は口頸部に列点文、波状文、沈線文が施され、頸から肩にかけての焼け歪みが大きい。1056は沈線文が3条引かれている。1058は舟底形Pit出土である。1059は頸部下方の外内を粘土で貼り足し補修した痕跡を留め、外面には粘土貼り足しの表面に布の織りが明確に残る（写真図版106）。1059は床面I出土である。図115～1127はTG228出土破片と6Aトレンチ包含層出土破片が接合したものであり、口縁部の肥厚がみられず、上端部を僅かに内方へつまみ出している。口縁部から頸部にかけてはヘラ状の工具で波状文と沈線文を交互に描いている。

図110～1060～1063は器台破片である。1060、1063は櫛状のもので、1061はヘラ状のもので波状文が

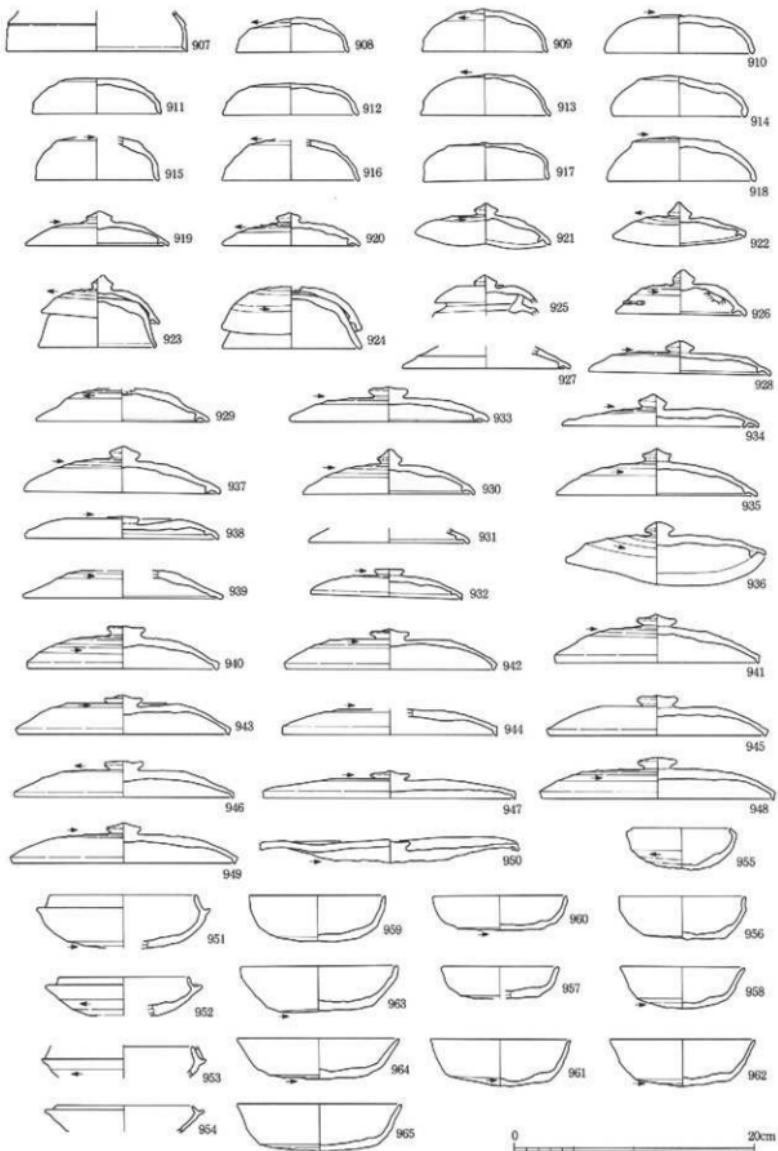


図106 TG228出土遺物

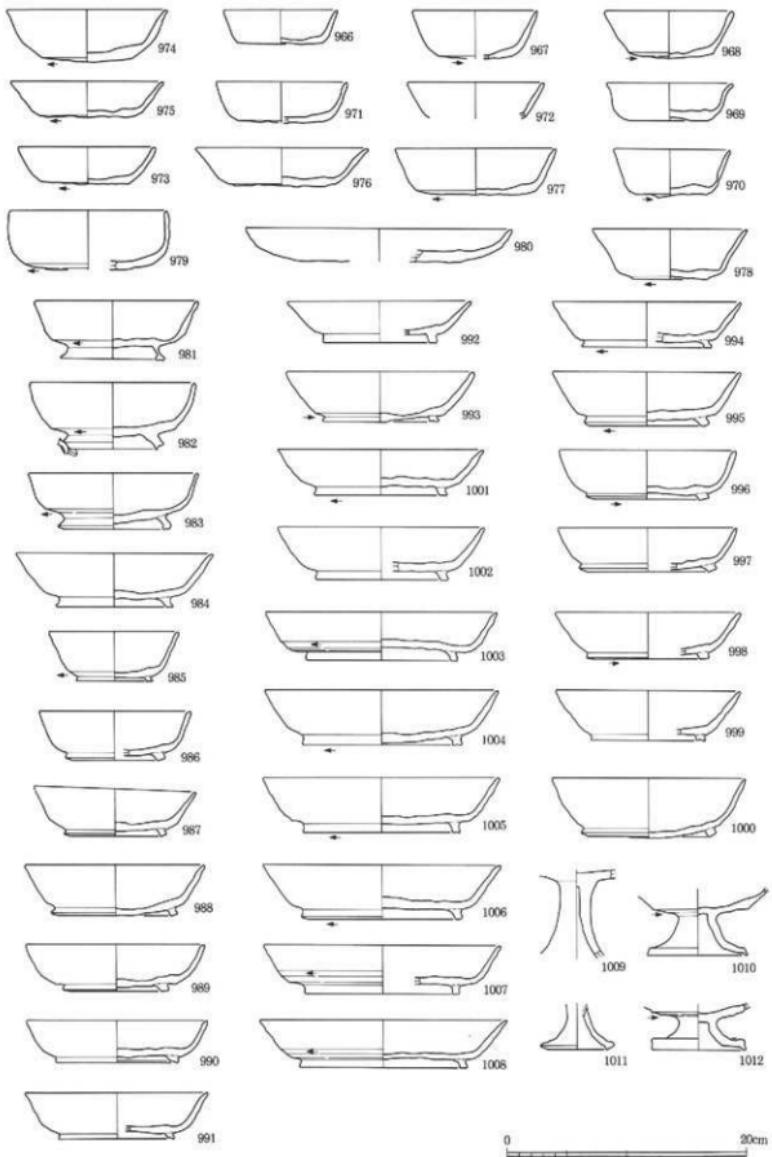


図107 TG228出土遺物

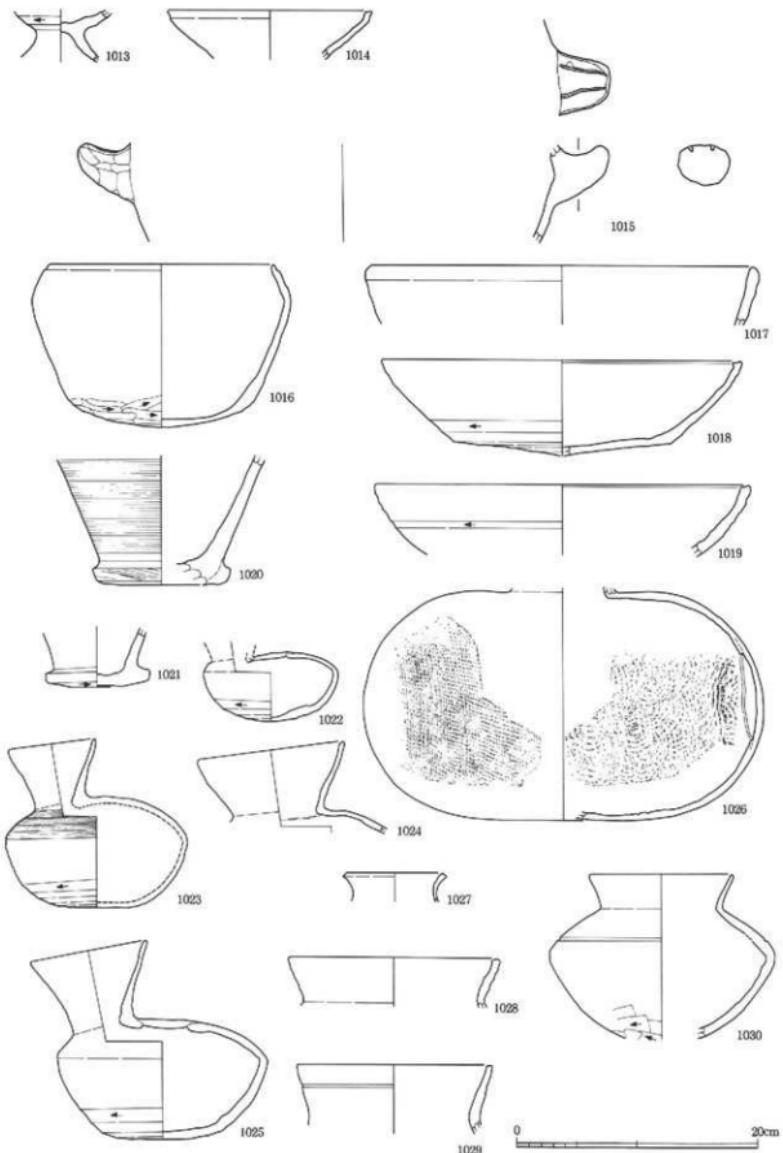


図108 TG228出土遺物

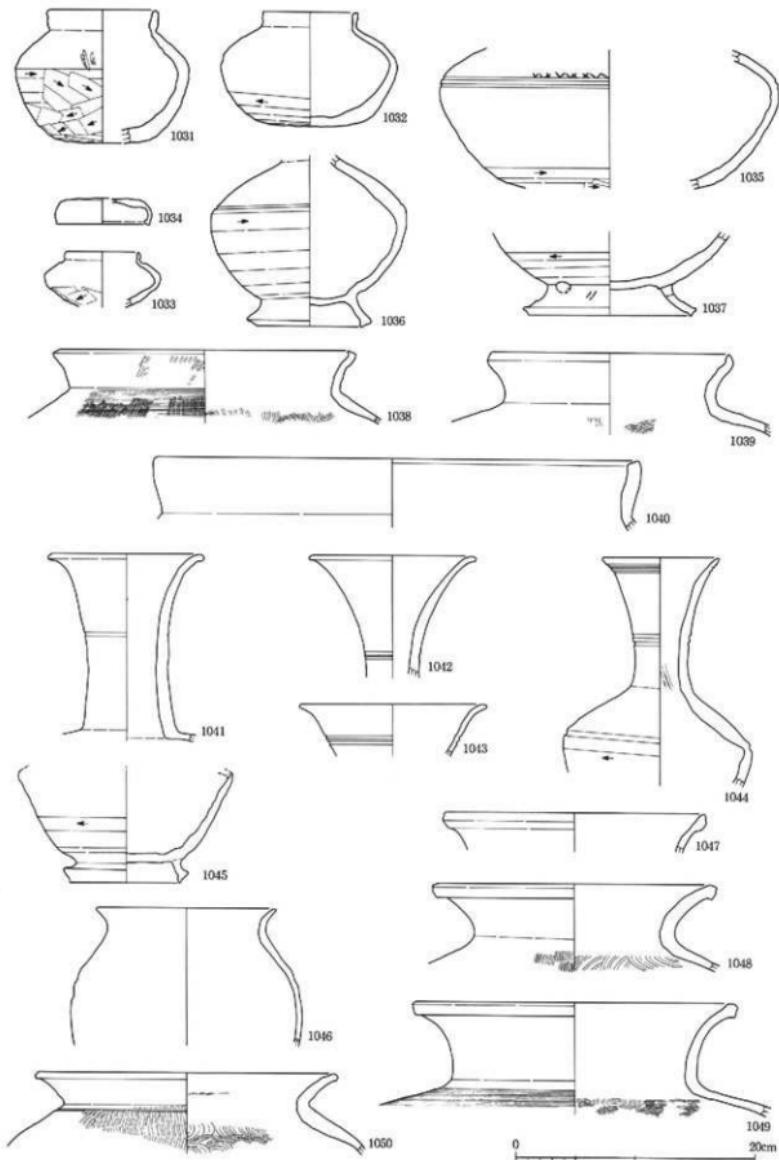


図109 TG228出土遺物

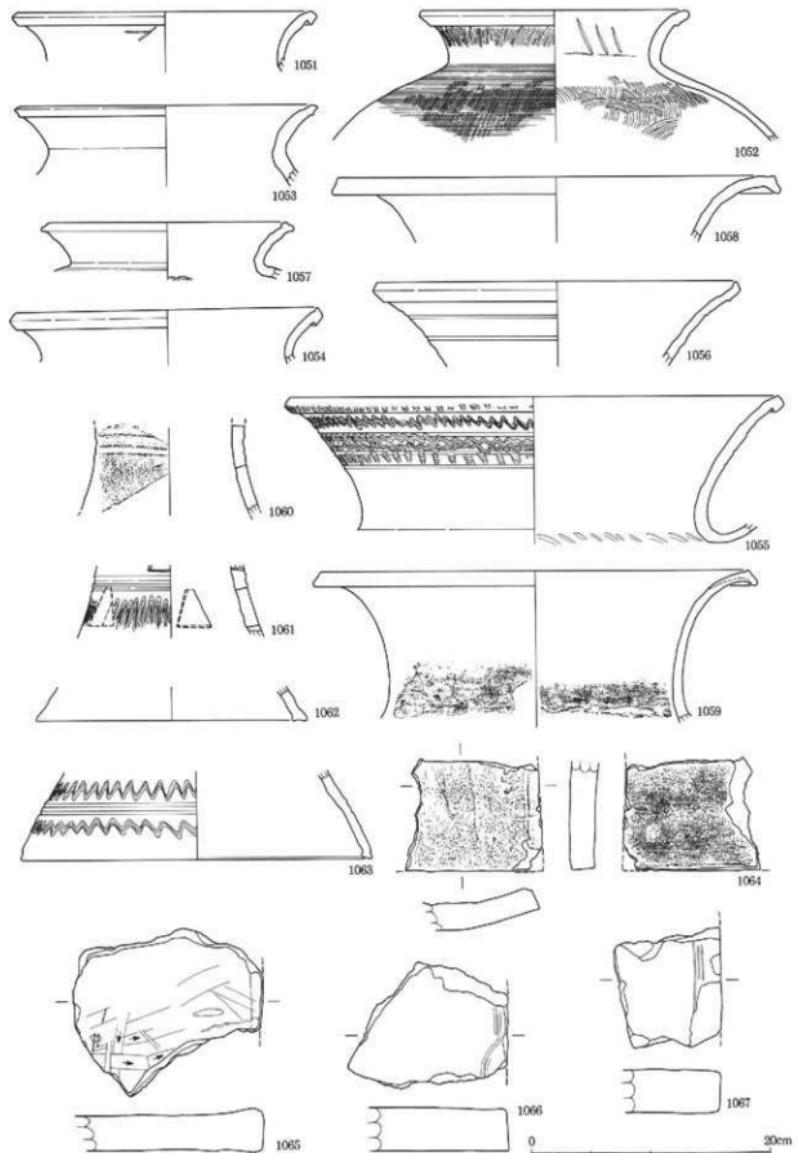


图110 TG228出土遗物

施されている。1060、1061ともに凹線文の上下に透かしがつけられている。1060、1063は外面に、1062は内面に灰が被っている。

図110～1064は須恵器の平瓦である。凹面に模骨の痕跡を留め、下端部は横方向にヘラ削りが施されている。凹面の右側面には面取りがみられる。ひび割れと焼け歪みが少しみられる。

図110～1065～1067はやや軟質の埴である。両面、側面ともにナデ調整が施されているが、3点ともに片面にスサ状の圧痕が少し認められる。1065は若干砂粒の動きがみられる。

#### 7. 河川（図111・112、写真図版41・42・101）

4Bトレンチ西端から5C・7Cトレンチにかけて河川1が検出された。幅4～10m、深さ0.4～0.9mを有する。蛇行して検出されており、4Bトレンチ部分では埋土は上層には炭化物の含んだ褐灰色砂質土、下層には黄灰色のシルト質粘土と砂の堆積がみられる。

5Cトレンチ北側の河川1西肩部分の断面では下層に褐灰色粘土が0.3～0.4m堆積しており（6、7層）、6層には炭化物が含まれている。褐灰色粘土の上層には、にぶい黄橙色粘質土（3層）、浅黄色砂質土（2層）、灰黄色砂質土（1層）の順に堆積している。

河川1西肩には土坑2844が検出されており、断面観察より、河川1の最終堆積の1層以前に掘削が成されていることが確認できた。

5Cトレンチ北隅の河川1西肩では偶蹄目の足跡が5層の黄褐色粘質土を除去することにより検出された。また南東隅で検出された部分は大きく蛇行しており、西肩部分に多量の土器と炭化物が廃棄された状況が検出された。主に遺物は須恵器の甕であり、6世紀後半の時期を中心とするものである。5Cトレンチ南端、河川1の西側に位置する土坑には炭化物が含まれており、4Bトレンチ土坑611・612からも多量の轆羽口、鉄滓が出土している。河川1で検出された土器・炭化物群もこれら一連の鍛冶関連の廃棄物と考えられる。遺物は6世紀後半から8世紀前半のものがみられ、8世紀前半の遺物の出土は1～5層に限られる。

他に4Bトレンチの底部分の花粉・珪藻分析によれば花粉化石群中にはアカガシ亜属、クリ属、シイノキ属、マテバシイ属が優占し、珪藻化石群集中には好止水性種が優占していたことが確認された。この谷の北側で現在の土地区画の様相から河川1の延びる様子がうかがわれる。

出土遺物のうち、図111～1068～図112～1085は1層～5層から出土、図112～1086～1092は6層出土である。1092の土師器を除いて、他は全て須恵器である。今回図化していないが、2または4層から須恵器以外に中世の土器破片も極少量出土している。

図111～1068はIII～2段階の杯蓋細片で、外面に灰を被る。1069は繩文の不明体部細片で、内面は丁寧に摩り消している。1070はやや焼成不良の椀片で、体部に5条の沈線文を施している。1071は焼け歪みの著しい短頸壺である。肩部に灰を被り、底部外面には溶着痕を留める。1072はやや焼成不良の鉢形鉢である。外面には丁寧なミガキ状のナデが施されている。1073は土師器甕で、口縁端部は上方へ僅かにつまみ上げられている。残存状態は不良で、調整は不明である。図112～1074は弥生中期（III～IV様式）の壺底部破片と思われるものである。外面調整は縦方向にヘラミガキが施され、内面は剥落して不明である。1075～1078はII～3～4段階の杯蓋および杯身である。1076～1078は外面に灰を被っている。1077は底部内面に同心円の当て具痕を留める。1078は底部内面に直径約3cmの細い平行線が見られるが、ハケ状工具により、底部内面中央をなでた痕か。1080～1081は甕である。細い頸部に球体よりも若干肩の張る体部で、II～6～III～2段階に属するものか。1082は球体の体部に細い頸部で、外側調

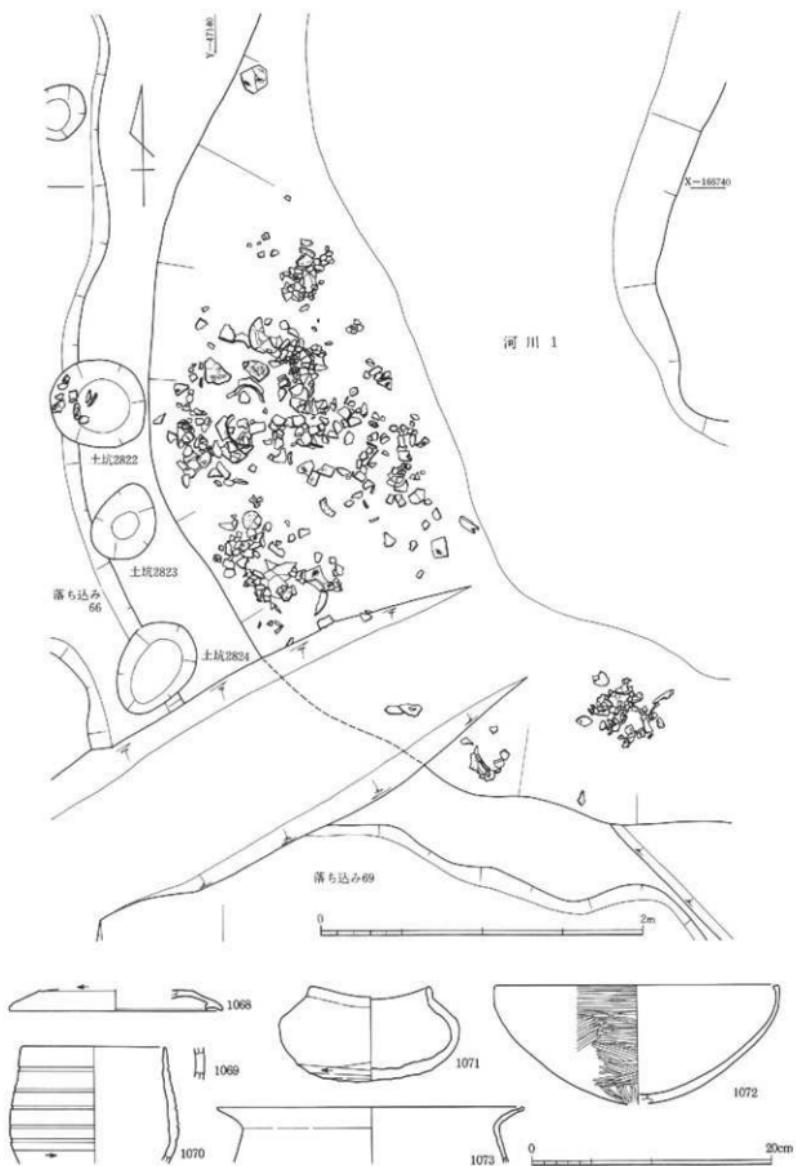


図111 河川1遺物出土状況および出土遺物

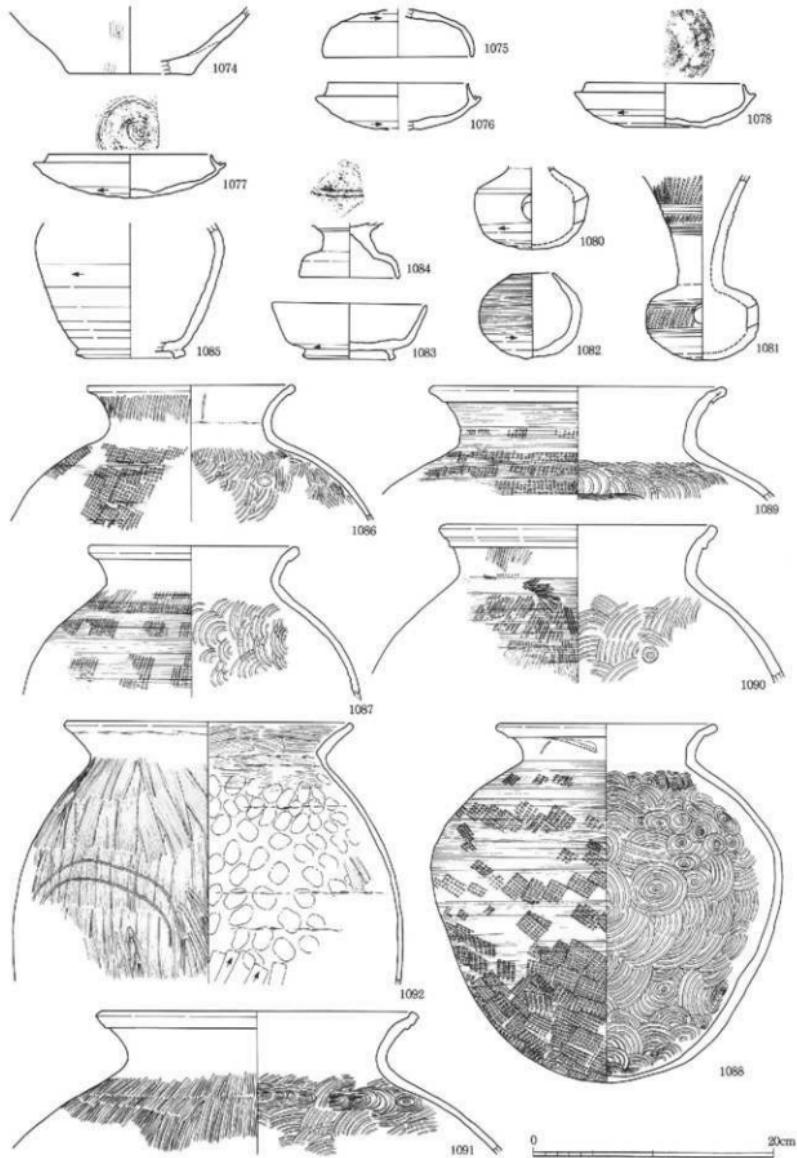


图112 河川1出土遗物

整は底部がヘラ切りの後、平行叩きを施し、体部は下半を回転ヘラ削り、上半から中央までカキ目を施している。体部中央に1ヶ所平行叩きの痕跡が、その反対側にはヘラ記号か、1本の斜めの線がみられる。1083は高台付き杯身である。高台が底部端よりやや中央寄りに「ハ」の字状につけられ、高台内端部で接地することからIII-2~3段階に属する。1084はII型式の高杯脚部か。外下方へ開いた脚は裾でほぼ直角に曲がる。杯部内面には1条のヘラ描き直線がみられる。1085は高台付き壺の体部である。高台は底部端に低くつけられ、肩部は丸みをもち、肩部下から回転ヘラ削りが施されている。これは1072の鉄鉢形鉢と同じくIV-1段階に属すると思われる。

1086~1091は甕である。口縁部はあまり肥厚せず、丸くおさめたもの(1086~1089)、口縁端部を外方へ折曲げ、その下端部をつまみ出し1条の凸帯状としたもの(1090)、長方形状の口縁部の上端を内方へ少し拡張したもの(1091)がある。1089は口縁端部を外面に折曲げたものである。体部は外面が平行叩きで1086と1088は振格子状をなし、カキ目を施したものが多い。内面は同心円ないし円弧叩きである。1086は頸部外面にナデ調整前の叩きの痕跡を残す。1088の内面叩きで観察した体部叩きの順番は、体部下半を上から下へ、体部上半を下から上へ、体部中央を最後に左回りに叩いて仕上げている。1086の頸部内面には縦方向に1条のヘラ記号がみられる。残存状況から、縦方向に2~3条のヘラ記号があったと推測する。1088は頸部外面にハケ状工具により斜めの線が引かれ、それと接するかのようにもう1本の線が引かれ、「へ」の字状を呈するが、ヘラ記号を意識したものか。これらの須恵器甕の時期はII型式の後半段階のものか。

1092は土師器甕で、体部外面を縦方向、口縁から頸部にかけてを横方向のハケ目調整しており、体部外面ハケの原体幅に2種類みられる。体部外面下半は円弧状の線が2本引かれている。体部内面は指押さえと下半がヘラ削りである。

#### 8. 落ち込み(図113)

落ち込み44は6Aトレンチの丘陵斜面に存在し、廃棄土坑の性格をもつ。落ち込み44からは極少量のII型式の須恵器蓋杯とIII~IV型式の須恵器などが若干出土している。器種はIII~IV型式では蓋杯、高杯、鉢、長頸壺、甕などがある。

1093、1094は統一新羅系土器の蓋と推測されているもので、断面は灰赤色を呈する。1093は落ち込み44出土であるが、1094は6Aトレンチの灰黒色粘土礫混合層より出土しており、別々に固化したが、極めて同一個体の可能性が高いものである。1093は口縁部外面に2条、天井部寄り体部外面に1条の沈線文が施され、その上から「C」の字状のスタンプ文が残存で11段に分けて一面に付されている。スタンプ文の方向は10段が左まわりであるが、一番上の段については欠損しており不明である。内面は横ナデ調整され、2ヶ所に火彫れがみられる。1094は天井部寄り体部外面に1条の沈線文が施され、その上から左回りに「C」の字状のスタンプ文が6段つけられている。内面は横ナデ調整である。

落ち込み55は3Aトレンチ中央の6Aトレンチ寄りにあり、落ち込み58を切っている。落ち込み55は北東・南西方向に約22m、北西・南東方向に約10mの拡がりをもち、10~25cmの深さを測る。埋土は上層にぶい黄橙色砂質土、下層に上層よりも明るい黄橙色粘質土がみられた。出土遺物はII~IV型式の須恵器細片が大量に出土している。他にはI-4~5段階の杯身1点がみられる。器種は杯身、杯蓋、短頸壺、壺蓋、平瓶、長頸壺、甕、高杯脚、蛸壺吊手などである。甕にII型式後半と思われるものが多くみられた。その他、中世土釜の細片と思われるもの、近世瓦の細片が各1点混入していた。1095~1104は落ち込み55出土遺物である。1096~1098は高台が底部端より内方へ寄っており、「ハ」の字状に聞く

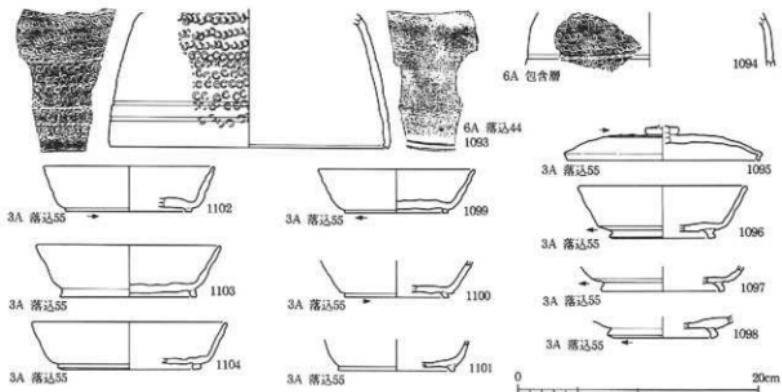


図113 落込み44、55、包含層出土遺物

ことから、III-2～3段階のものと思われる。1095、1099～1104は蓋にかえりが消失し、高台も底部端寄りにつけられている事から、IV-1～2段階に属すると思われる。

#### 9. 包含層、その他出土遺物（図114～119、写真図版102～104・107～111）

図114～1105～図119～1183までが6Aトレンチ、図119～1184、1185、図119～656が2Bトレンチ、図119～1186が3Bトレンチ、図119～1187～1191が4Bトレンチ、図119～1192、1193が3Cトレンチ、図119～1194～1197が1Cトレンチ、図119～1198が5Cトレンチ出土である。6Aトレンチ出土遺物のうち、図114～1105～図118～1178までが古墳から奈良時代の遺物を大量に含み、平安時代の遺物を少量含む谷の埋土からの出土である。

図114～1105～1119は6Aトレンチ灰黒色粘土礫混合層4段目掘からの出土である。

1105は口縁部細片で、口径が少しあ大きいが、IV-2段階の皿かと思われるものである。1106、1108～1110は高台付きの杯、1111は杯である。1110は高台が他の杯よりも高く、底部端よりやや中央寄りに「ハ」の字状に開いている。1106、1108～1110はIII-2～IV-1段階のものか。1106は内面に自然釉を被り、焼け歪みが著しい。1107は高台の内側をつまみ出しており、他の高台とは異質である。飛鳥・奈良時代の包含層として掲載したが、高台かどうかも不明である。1108は外内面を丁寧にヘラ磨きしている。1109は底部にひび割れがみられる。1110は高台接合部にひび割れがみられる。1111は口縁内面に一条の凹線状の窪みが巡る。

1112は甕の口縁端部外面に薄い粘土帯を貼り足し、口縁端部を上内方へつまみ出している。口縁端部外面には列点文の後、下方に沈線が1条施されている。頸部には原体幅4.4cmの広い列点文の後に2条の沈線文が施されている。

1113、1114は平瓦である。1113は凹面側を縦の一方向に削り、凸面側を縦方向になでている。縦方向の側面は凹・凸面とも面取りが成されている。下辺は凹面側に斜め方向の面取りがみられる。1114は凹面側を縦方向に削りの後ナデ、凸面側を横方向になでている。縦方向の側面は凹・凸面とも面取りが成され、下辺は凹面側に横方向の削りがみられる。下辺は2回に分けて削られている。1114は焼成良好で須恵質である。

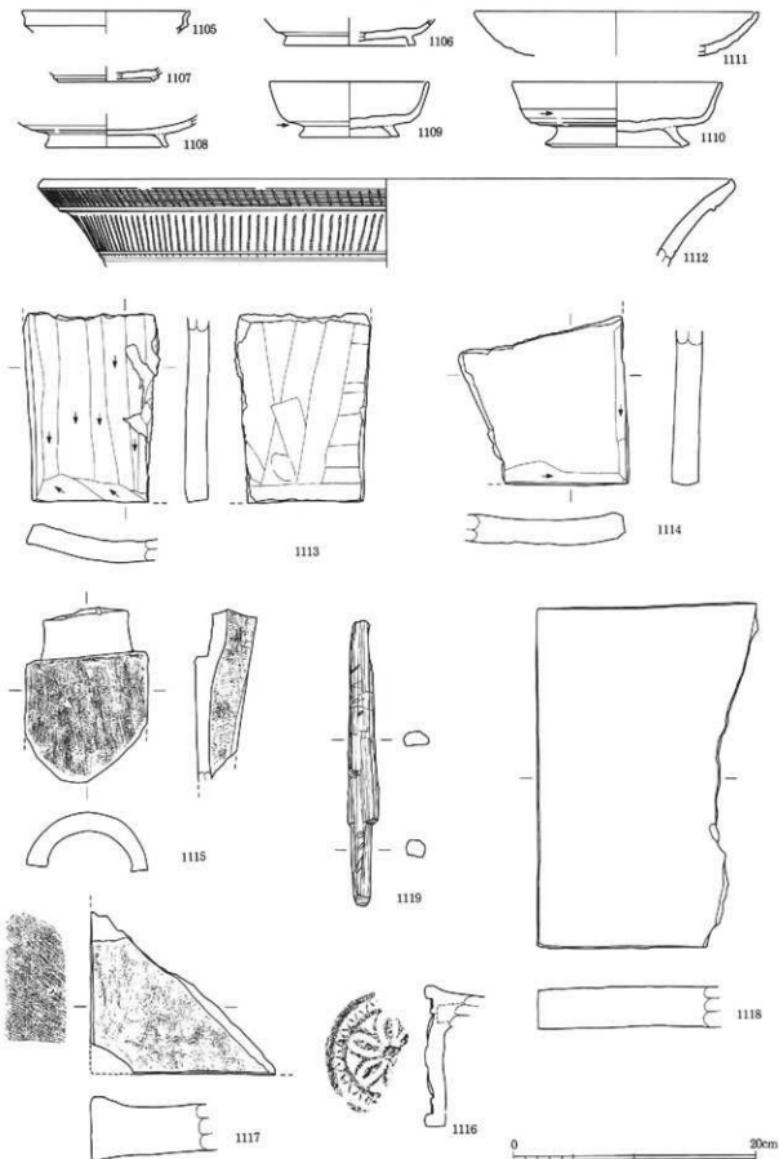


圖114 包含層出土遺物

1115は丸瓦で、玉縁部分の外面は横方向にヘラ削り、丸瓦部外面は縦方向にヘラ削りが施されている。内面は布目が全面に残り、玉縁寄り凹面の縁近くに布目を綴じ合わせたような痕跡を留める。内面の半截部分は縦方向に削って調整している。この丸瓦は須恵質で、若干焼け歪みがみられる。

1116は小ぶりの軒丸瓦で、外区外縁は無文、外区内縁に鋸歯文、内区に六葉の単弁蓮花文を配し、中房は無文である。外区外縁は幅1cm、高さ0.6cmである。瓦当の内区縁あたりに丸瓦を接合し外側に粘土を貼り足している。丸瓦部分の外面は縦方向にヘラ削りおよびナデが施され、瓦当との接合部外面は横方向に雜に、内面の接合部は不特定方向になでられている。この軒丸瓦は焼成良好で須恵質である。

1117は厚手の塙である。表面は布目を残すが一部なでられており、裏面は不特定方向になでられている。側面は5cm、断面中央部は4cmと縁が厚い。側面には平行叩きのちナデがみられる。

1118は1辺28cm、厚さ3cmの塙である。若干反っているが、平瓦ほどではない。表面は中央部を不特定方向、上下辺寄りを横方向になでた後、縦方向になでており、指紋が多く残す。裏面は縦方向のヘラ削り？の後、横方向のナデ、その後に縦方向のナデを施している。周縁は縁に沿った方向のナデで、一部砂粒の動きがみられる。裏面の側辺に沿って幅1cm前後の縦方向のヘラ削りがみられる。

1119は下方を両側面から抉りだして断面円形状に加工した棒状の不明木製品である。この遺物出土の層は古墳から奈良時代主体で平安時代の遺物を僅かに含むため、時代の特定はできない。

図115-1120～1132は6Aトレンチ黒色粘土疊混合層出土遺物である。

1120はIII-2段階の杯蓋である。内面に灰を被り、外面に重ね焼きの溶着痕を僅かに残し、少し焼け歪んでいる。1121はIII型式の杯身と思われるもので、入れ子状に5点の杯身を重ねて焼いて溶着したものである。内底面と口縁部外面に灰を被っている。1122～1125は杯である。1122～1124は体部から口縁部にかけてS字状にカーブをなし、1122と1125はヘラ磨きが外内にみられる。1122～1125は口縁部の形態の特徴およびヘラ磨きから、IV-1～2段階のものか。

1126は不明底部である。体部は外内面ともに回転ナデ、底部内面はナデ、底部外面は一部に砂粒の動きがみられるが、外面全体に自然釉がかかり、詳細不明である。時期も器種も不明である。

1127はTG228出土破片と接合したものである。

1128～1130は把手付き壺と思われるものである。1128は把手破片である。体部外面は平行叩きの後横ナデ、内面は横ナデである。丸みを持った体部に把手を貼り付けている。把手断面は梢円形で、把手上面に1条の線が刻まれている。1129は丸い体部にやや短く直立ぎみに開く口縁部を持つ。把手は平面が三角形状で断面が扁平な梢円形状を呈し、上方へ折れ曲がる。体部外面は平行叩き後丁寧な横ナデ、内面は同心円文叩きの後横ナデを施し半摩り消し状態である。1130の把手破片は平面が梢円形状、断面は扁平な逆台形状を呈し、体部外内面ともにナデ、内面は把手接合の指押さえの痕跡を留める。

1131は凸面に「×」のヘラ記号をもつ平瓦片で、凸面は横方向のナデ、凹面は縦方向のヘラ削り後ナデがみられる。奈良から平安時代の瓦か。

1132は曲げ物の底板と思われるものである。木製品は先述のとおり、時期が不明である。幅1.4～2cmの削り幅が残存する。

図115-1133～図117-1162、図118-1169は灰黒色粘土疊混合層出土の遺物である。

1133、1134は壺蓋と思われるもので、稜部が屈曲し、口縁端部は内端で接地する。1134は小形である。2点ともに外面に灰を被る。IV-2～3段階か。

1135、1136は杯蓋で、1135はIV-1～2段階、1136はIII-2段階である。1136は内面に灰を被る。

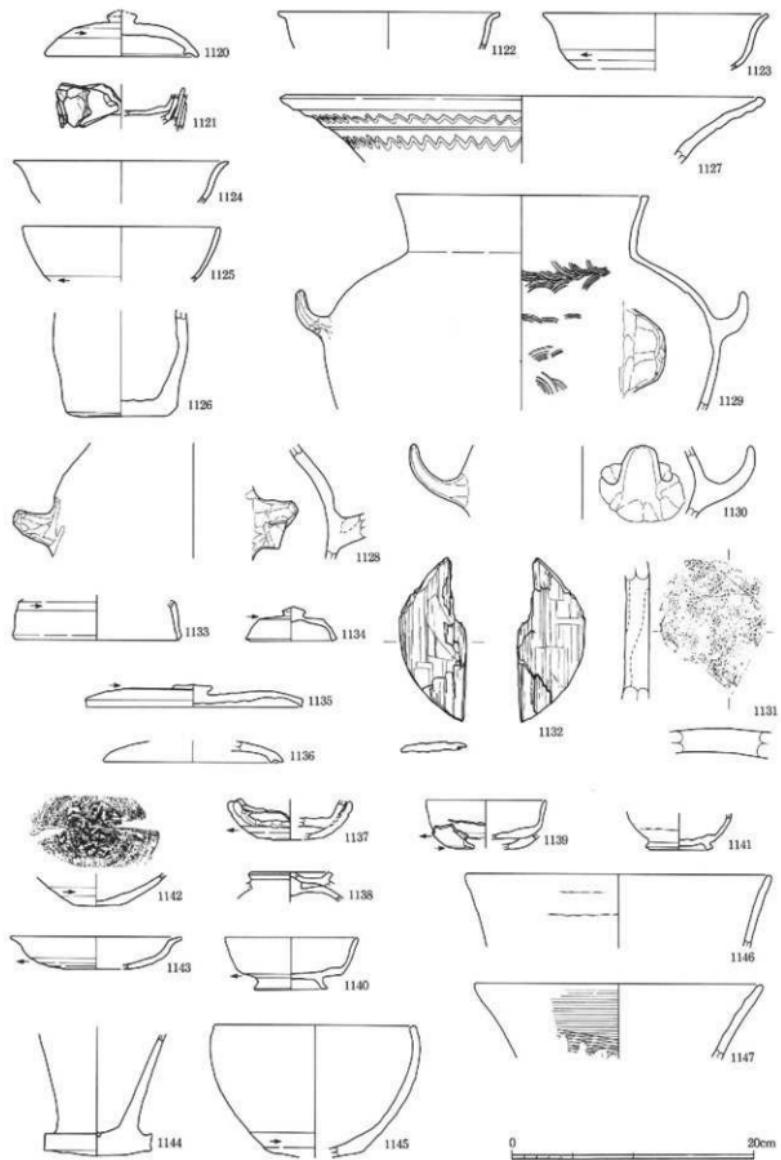


圖115 包含層出土遺物

1137は裏返した杯蓋の上に杯身を重ねて焼いたもので、外面には更に重ね焼きの痕跡を留める。杯身の内面には更に重ねていたものらしく、蓋と身の間に自然釉がかかっている。III-3段階のものである。

1138は高台付き杯身の上に蓋を裏返して重ね焼きしている。蓋内面に溶着痕があることから、更にその上に重ねていたようである。III-2~3段階のものか。

1139は小形の杯身を入れ子状にして重ね焼きしたもので、口縁部外面に灰を被る。III-2~3段階か。

1140は中形の高台付き杯で、高台が高く、底部中央寄りにつけられている。外面に灰を被り、口縁部に歪みがみられる。III-2段階か。

1141は高台付きの小形壺体部破片で、III型式に属すると思われる。

1142は底部内面に布目圧痕を留める不明底部破片である。外面は底部に回転ヘラ削り、体部に横ナデが施されている。内面は体部に横ナデ、底部に指押さえ、ナデの後布目圧痕がみられる。布目圧痕は5mm四方に5×5本の糸の痕跡がみられる。

1143は屈曲して外反する口縁部をもつIII-1段階の無蓋高杯と思われる破片である。口縁部外内に灰を被る。

1144はすり鉢底部である。体部外面にはロクロ目によるものか凹線が2条みられる。底部外面はヘラ切りのちナデ調整である。内底面に直径2mmの未貫通孔が6個みられる。III~IV型式のものか。1145は底部に丸みのある鉢である。外面は体部下半をヘラ削りしているが、底部はヘラ切り未調整か、底部中央が欠損のため不明である。体部最大径部分にロクロ目によるものか一条の凹線が巡る。

1146、1147は鉢の口縁部と思われる破片である。斜め上方に拡がる口縁部の端部は丸く収めている。

1147の外面は口縁部にカキ目、体部には下から上へヘラ削り調整を施している。IV型式のものか。

1148は鉢口縁部である。口縁部は外方へ断面三角形状に拡張している。体部外面には平行叩き後カキ目が、体部最大径部分には沈線が1条施されている。II~III型式のものか、不明である。

1149は皿、1150は鉢で、2点共に体部外面は回転ヘラ削り、内面および口縁部外内は横ナデが施されている。1149は内底面が不特定方向のナデである。III~IV型式のものか。

1151は壺口縁部が不明のものである。ほぼ直立する口頸部をもち、頸部直下の体部内面に同心円状の当具痕が明確に残るため、横瓶の口縁部接合とも類似する。口頸部に粘土紐接合痕を残し、体部と頸部も接合痕を留める雑なつくりである。時期は不明である。

1152は肩にボタン状の粘土を貼りつけた壺か甌の頸から肩にかけての破片である。体部外面にはやや細かい格子叩きの後カキ目が、内面は同心円文叩きが施され、一部僅かになでられている。時期は不明であるが、やや細かい格子叩きと内面の一部摩り消しから古墳時代の可能性が考えられる。

1153は完形の平瓶である。底部外面は回転ヘラ切りの後指押さえ、ナデ、体部外面は横ナデであるが、口縁部を斜めに付け替える前に製作時の口縁部を塞いだあと、不特定方向になでて仕上げている。II~III型式のものか。

1154は長頸壺で、頸部と体部に各1条の沈線文が施されている。体部は沈線文直下まで回転ヘラ削りが施されているが、下方には平行叩きが一部残存する。外面および口縁部内面に灰を被る。III-2~3段階のものか。

1155は不明把手破片である。把手平面は梢円形状、断面は逆台形状を呈し、上面に平行する2本線が引かれている。時期は不明である。

1156は土師器甌である。体部外面に綻ないし斜め方向のハケ目、内面は体部に斜め方向のヘラ削り、

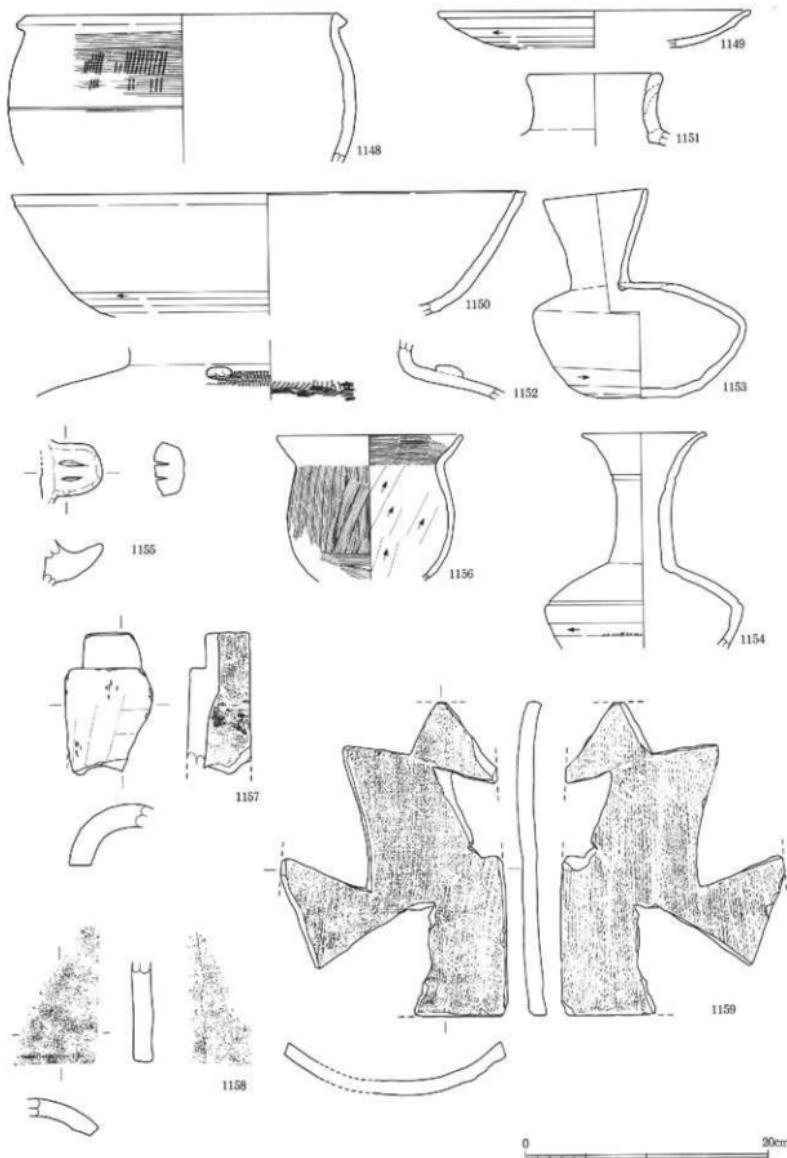


図116 包含層出土遺物

口縁部に横方向のハケ目が施されている。外面に煤の付着と内面下半に焦げ付きがみられる。

1157、1158は丸瓦破片である。1157は短い直線的な玉縁をもつ。内面全面に僅かに目の粗い（1157は5mm四方に4×4本、1158は5mm四方に3×3本）布目が残る。側縁はヘラ削りが施されている。凸面は叩きの後、主に横方向の丁寧なナデが施されている。1158は須恵質で、側縁と下端部の一部に面取りが施されている。2点ともに奈良～平安時代のものか。

1159は須恵質のやや焼き歪みのある平瓦破片である。長さ26.1cm、幅18.4cm、厚さ1.2cmを測る。凸面は繩叩きの後一部ナデ、凹面はやや目の粗い布目（5mm四方に3×3本）と指紋が残る。また、凹面には幅約4cmの模骨の痕跡かと思われる極浅い窪みが認められた。僅かに残存する上端面には布目が、下端面には砂の付着がみられる。側面は辺に沿ってヘラ削りが施されている。奈良時代の瓦である。

1160は平瓦の破片である。凸面に粗い繩叩き、凹面にやや目の粗い布目（5mm四方に4×3本）が残る。凹面の縁に沿ってヘラ削りがみられる。側面、下面は辺に沿ったヘラ削りである。奈良時代のものである。

1161は平瓦である。凸面には主に横方向のナデが、凹面には縦および一部斜め方向のヘラ削りが施されている。残存する周縁は縁に沿ったヘラ削りが施され、側面には凸凹両面側に面取りがみられる。奈良～平安時代の瓦か。

1162は須恵質の平坦な平瓦破片である。片面に平行叩きのち横方向のナデ、裏面には縦方向のヘラ削りのち縦方向のナデがみられる。側面は両面側に面取りが施されている。平坦な為、凹凸の区別がつかないが、熨斗瓦の可能性もある奈良時代の瓦である。

1169は須恵質の平瓦で、厚さ1.5cm前後、焼き歪みが少しみられる。凸面は縦のち横方向のナデで、斜め方向の砂粒の動きが少し残る。凹面は模骨の痕跡か幅4.4cmの窪みを有し、布目の後縦方向のナデを施している。凹面側縁際は縦方向にヘラ削りが施されている。側面はヘラ削り後ナデである。奈良時代の瓦である。

図117～1163～1168、図118～1170は6Aトレンチ灰黒色粘土礫混合層の段状3段目裾出土遺物である。

1163は小形の杯身か蓋か不明のものである。口縁部は端部で内面に肥厚する。口縁端部と内面に一部灰を被る。III～IV型式のものか。

1164は直口壺の頸を短くした様な口縁部破片で、口縁端部外面を少し肥厚させている。IV-2～3段階のものか。

1165は獸足のついた覗破片か。内面にナデ調整が残り、磨滅がみられない。足部分はヘラで削りなしナデにより形作っている。奈良時代のものと思われる。

1166はL字状に曲がった須恵質の瓦で、凸面に平行叩きと、一部指押さえの痕跡が、凹面には横方向のヘラ削りが見られる。凸面には灰を被っている。下辺にはヘラ削りが施されている。飛鳥時代のものか。

1167は凸面に「X」のヘラ記号のついた平瓦破片である。凸面は横方向のナデ、凹面は縦方向の削り、ナデで、縁に沿った方向のヘラ削りがみられる。下辺は縁に沿ったヘラ削りである。奈良～平安時代の瓦か。

1168は厚さ4.0～4.5cmと厚手の平瓦破片である。凸面には主に縦方向のヘラ削り、凹面にはやや目の粗い布目（5mm四方に3×2本）がある。側面際には布目のついた幅6mmの窪みが辺に沿っており、凹面と側面との角には横方向の筋が見られる。この瓦は斜めに裁断されている。奈良～平安前期の瓦であ

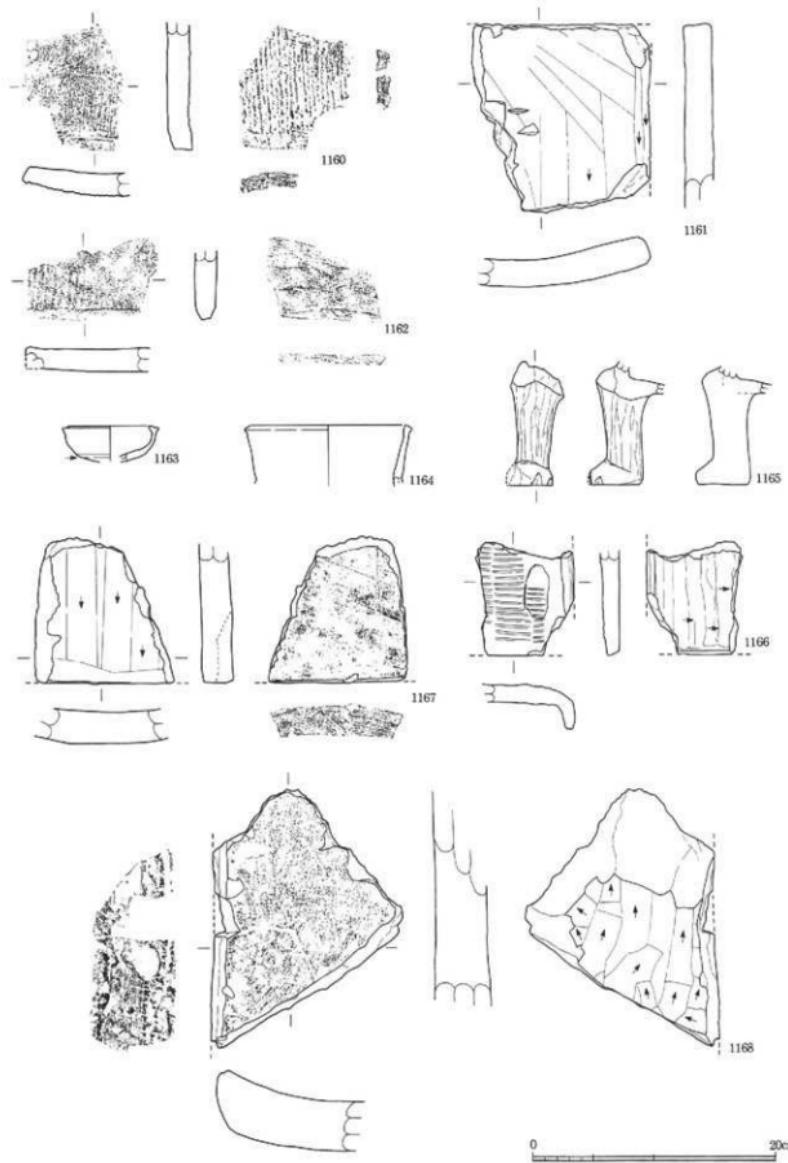


圖117 包含層出土遺物

る。

1170は側縁が厚く、中央寄りが薄めになっている壇である。表面には側縁に沿った方向の砂粒の動きがみられ、ナデが施されている。裏面には若干指紋が多く残り、なでられている。側面は側辺に対して斜め方向に平行叩きの後、ナデが施されている。

図118-1171~1176は6Aトレンチ灰黒色粘土礫混合層段状2段目裾出土である。

1171~1174は丸瓦で、1171、1173が須恵質である。1173、1174は玉縁が欠損している。1172は長さ28cm、幅11cm、玉縁の長さは3cmである。1171、1172は凹面下端が面取りされているが、1171が3mmに対し、1172が4.5mmと幅広である。4点とも凹面に布目（同一物でも場所により粗密があるので、5mm四方におよそ4×3本位）が残り、1172以外の3点には凹面と側面との角に面取りが施されている。1171、1174の凹面には布袋の縫目が残る。1171は凸面と側面との角にも面取りを少し行っており、片側縁の面取り部分には成形後についたと思われる布目が少しみられる。1173の両側面には縦方向の削りの筋が2~3条みられる。凸面は1173が縦方向のヘラ削りのちナデ、1172は縦方向のヘラ削りのち横方向のナデが、1171、1174は横方向のナデが施されている。1172が奈良~平安で、それ以外は奈良時代の瓦である。

1175は軒平瓦で、幅3.2cmの直線彎である。瓦当面は僅かに残存するが、唐草文か。凹面は横方向のヘラ削り後ナデが、凸面は斜め方向のヘラ削り後ナデが施されている。奈良~平安時代のものか。

1176は須恵器の大形壇である。外反する口縁の端部は下方に少し垂下する。頸部に擬格子叩きのち横ナデが施されている。IV型式のものか。

図118-1177、1178は6Aトレンチ段状2段目裾流土出土の土師器杯である。2点ともに表面が剥落しており、詳細は不明である。8世紀のものか。

図118-1179は6Aトレンチ灰色粘土層出土の厚さ約2mmの須恵質の平瓦である。凹面に幅3.5cmの模骨の痕跡を留め、やや粗い布目（5mm四方に4×3本）が残る。凹面の周縁には幅狭の面取りが施されている。凸面には繩叩きがあり、灰を被っており、1ヵ所に溶着痕がみられる。

図119-1180、1181は6Aトレンチ白灰色砂層出土の高台付き杯と肩部に灰を被り焼け歪みのある長頸壺である。1180は外反する口縁部と外面の丁寧なヘラ磨きからIV-2段階、1181は斜め上方へ開く口縁部と頸部の弦線文2条、やや肩の張る器形からIV-1段階に属する。

図119-1182、1183は6Aトレンチで、1182は側溝、1183は表採の遺物である。1182は皿の細片で、外面は回転ヘラ削りのちヘラ磨きで、内面に灰を被る。IV-2段階前後のものと思われる。

1183はほぼ直立して立ち上がる短頸壺のやや頸の長いもので、口縁端部内面に肥厚する。頸部外面には横ナデの前の格子叩きがみられる。IV-2段階前後のものと思われる。

図119-1184、1185は2Bトレンチ灰黄褐色砂質土層出土の須恵器で、1184が皿、1185が不明である。

1184は底部外面を回転ヘラ切りのち軽くなっているものか、調整は少し難である。IV-1~3段階のものか。

1185は不明の脚部透かしの破片か。透かしの角部分は丁寧な面取りが施され、外面に上を向いた魚？と水？か葉を意識した文様が線刻されている。

図119-1186は2BトレンチPit1982出土の製塙土器破片である。色調は外面が灰色、断面と内面が灰色およびぶい橙色で、口縁端部が厚い。調整は指押さえ、ナデによるものか、残存状況が悪く詳細は不明である。奈良時代の製塙土器細片と思われる。

図119-1186は3Bトレンチ出土の軒平瓦の瓦当が剥落したものである。瓦当剥落面に僅かに布目がみ

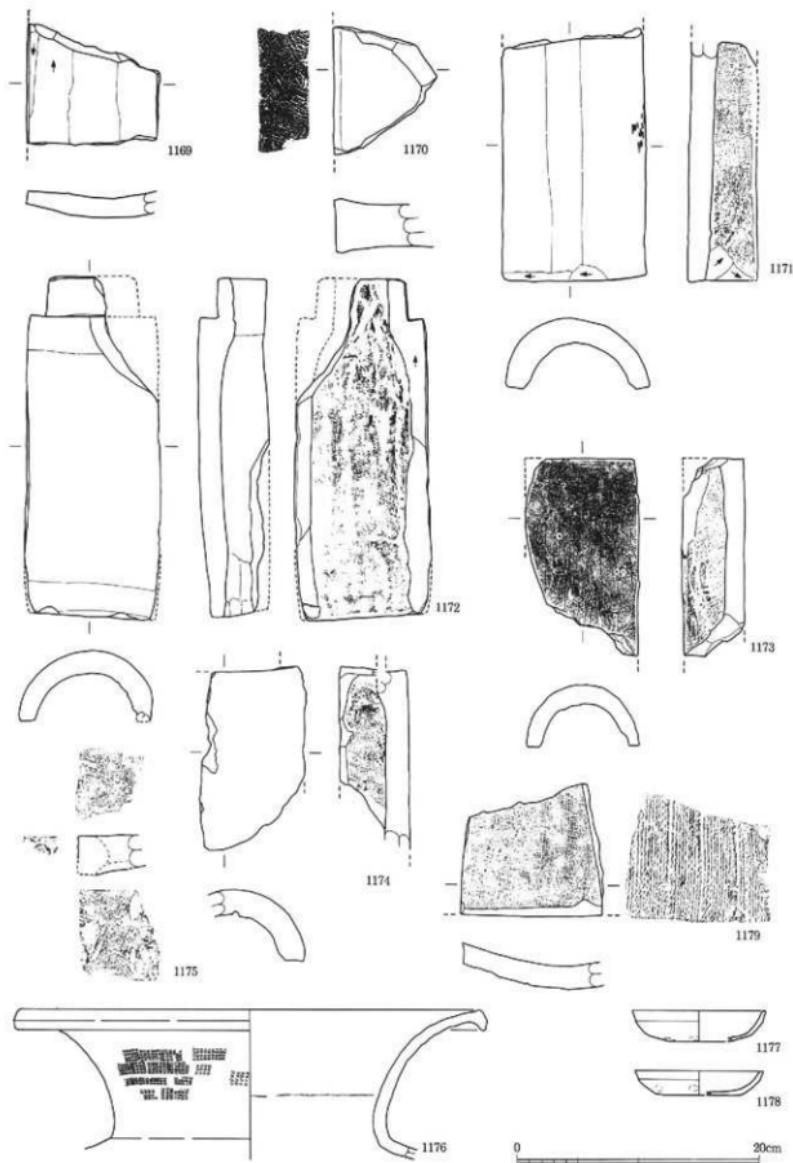


図118 包含層出土遺物

られる。凹凸面側共に横ナデか。この瓦の時期は奈良～平安時代のものか。

図119-1187～1191は4Bトレンチ淡黄灰色砂質土層出土である。1187は短頸壺の蓋と思われるもので、扁平なつまみとやや内方へすぼまる口縁端部が特徴的である。外面に灰を被っている。IV-2段階のものか。

1188は壺の脚台と思われる破片で、脚裾内面の作りがIII-3段階の杯蓋と一見類似するが、III型式のものか。

1189の須恵質蹄脚碗は概報段階で別個体として掲載していたが、同一個体と判断して、図上復元している。陸の欠損した2つの小破片であるが、推定では脚が20本となった。上部径約16cm、下部径約20cmである。脚の透かしはヘラで丁寧に削り出している。上部の丸い飾り部分は1条の細い凸帯があるが、刷毛状工具により押さえて浮き上がらせている。脚部外面に少し灰を被っている。奈良時代のものか。

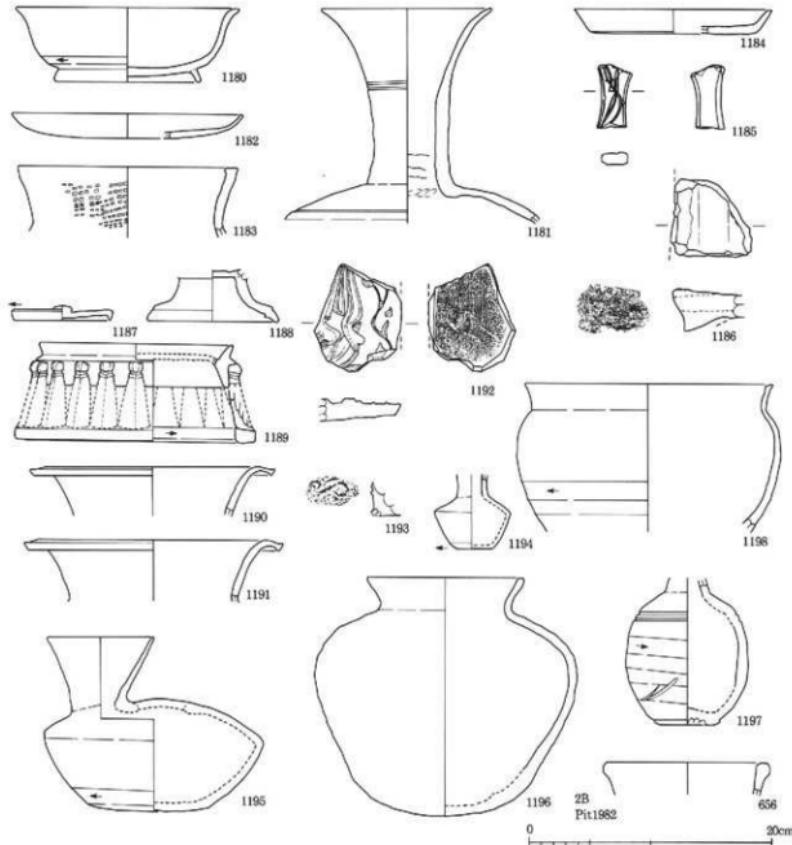


図119 包含層、その他出土遺物

1190、1191は壺口縁部である。外反する口縁部は端部で僅かに上下に肥厚し、口縁部内面には灰を被っている。IV-3～4段階のものか。

図119～1192、1193は3Cトレンチ黄灰色粘質土層出土である。1192は壺の下方の破片であり、蓮の花の上に乗った足と衣の一部が残存する。表面は型押しで、裏面は縱方向にややカーブを描いてヘラ削りが施されている。側面は右のみ一部残存し、裏面側へ傾斜してヘラ削りが施されている。飛鳥～奈良時代のものか。

1193は軒平瓦の細片で、瓦当面に唐草文が一部残る。凸面側の頸部分にヘラ削りがみられる。1175と同じく外区の幅が狭い。奈良～平安時代のものか。

図119～1194～1197は1Cトレンチ黒灰色粘土層出土の壺および平瓶である。1194はミニチュア長頸壺で、肩部の張り、底部に丸みを帯びる点から、III型式のものか。底部は回転ヘラ切り後底部中央を一定方向にヘラ削りしている。外面肩部に灰を被っている。口縁部破損部は打ち欠いて再加工したものか。一定の高さで揃い、外方へ剥離している。

1195はほぼ完形の平瓶で、少し肩が角張り、底部に丸みをもつ。底部外面は回転ヘラ削り後指押さえ、一部ナデである。口縁部内面と肩部に灰を被り、底部にひび割れが1ヵ所みられる。III-3～IV-1段階か。

1196はほぼ完形の短頸壺で、口縁部内面、肩部に自然釉を被り、口縁部と底部に各1ヵ所ひび割れがみられる。体部上半が焼成良好で、下半が不良である。底部から体部にかけて回転ヘラ削りのち体部は横ナデを施していると思われるが、底部外面は軟質のため摩耗し、詳細は不明である。IV型式のものか。

1197は水瓶形をした壺の体部である。高台部分は欠損している。外面は体部中央まで底部から回転ヘラ削りが施され、のち横ナデされている。肩部には沈線が2条みられる。体部下半には「フ」状のヘラ記号?がみられる。肩部に灰を被っている。IV-2段階のものか。

図119～1198は5Cトレンチ黄灰色粘質土層出土の鉢である。短く僅かに外反する口縁部は端部で外方に肥厚する。体部下半は回転ヘラ削り後横ナデされている。IV-2前後の段階のものか。

## 第5節 平安時代

平安時代の遺構としては、A地区において10世紀後半の建物を9棟、柵を5列検出した（図120）。

### 1. 建物・柵（図121・122、表5・6、写真図版43～45）

平安時代の建物には総柱建物は含まれていない。建物の軸はN-0～26°-Eを有する。殆どの柱穴は削平を大きく受けしており、深さが約10cmの残存状態である。奈良時代建物群に比較して柱穴規模が小さい。各建物の規模、柵、その他特徴については表5・6の通りである。

以下、建物のPitから出土した遺物について述べる。

建物16（Pit955）からは黒色土器A碗の高台破片が1点（1199）と、II型式に属すると思われる須恵器の細片が数片出土している。1199の黒色土器碗は表面が摩耗して詳細は不明である。同建物の他のPitからはIIとIV型式に属すると思われる須恵器細片が数片出土している。

建物17のPitからはIIからIII型式の須恵器細片が数片出土しているのみである。

建物18のPitからはII型式と思われる須恵器細片が数片出土しているが、Pit998からは須恵器以外に黒色土器A細片1点、土師器碗?細片1点、焼土塊細片1点が出土している。

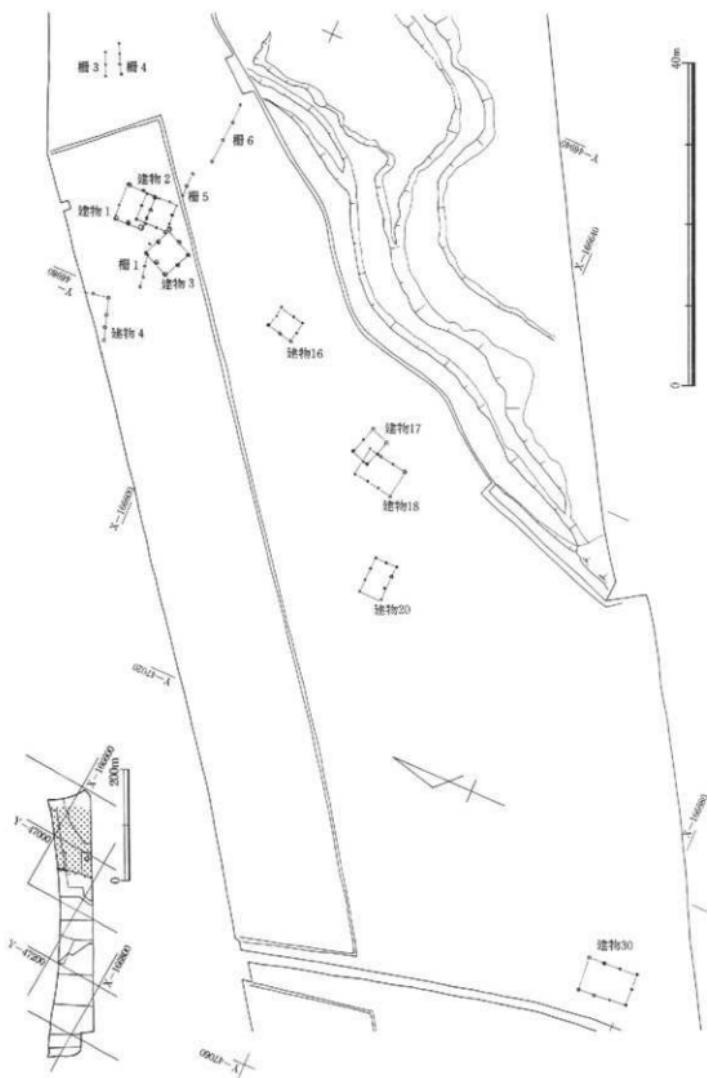


図120 平安時代建物群

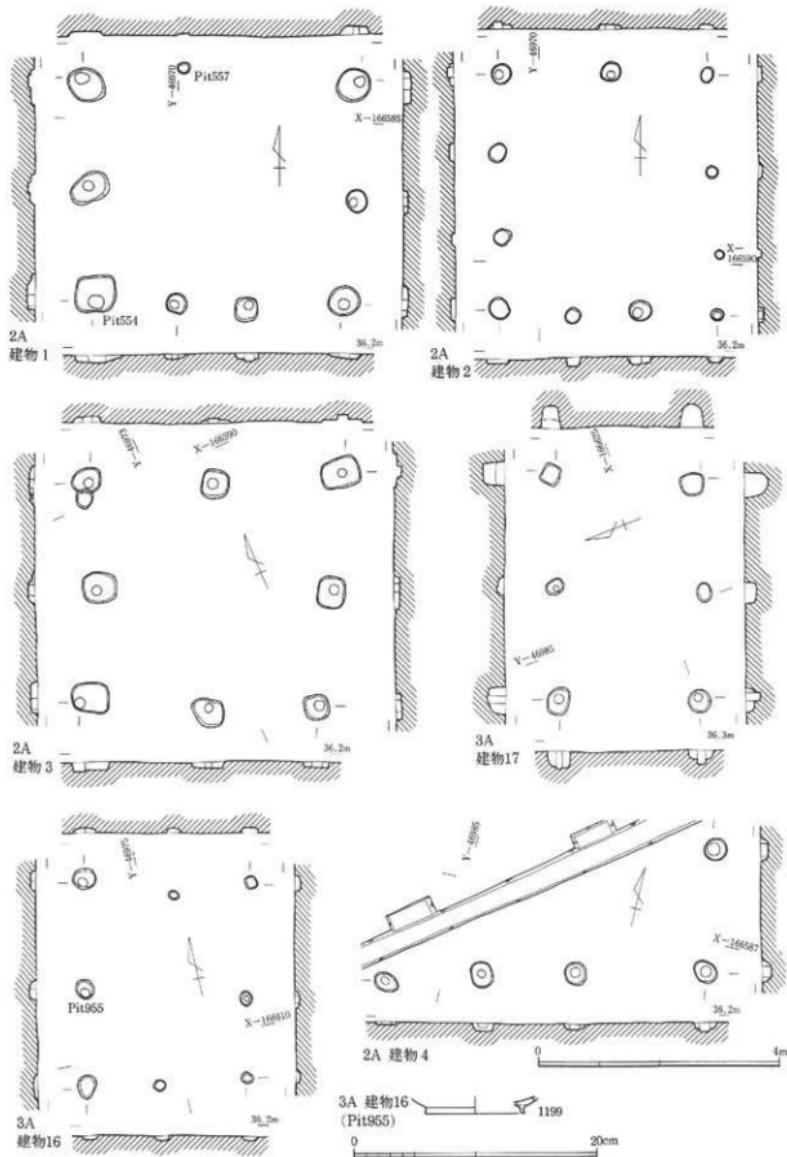


図121 建物1, 2, 3, 4, 16, 17平・断面図および建物16(Pit955)出土遺物

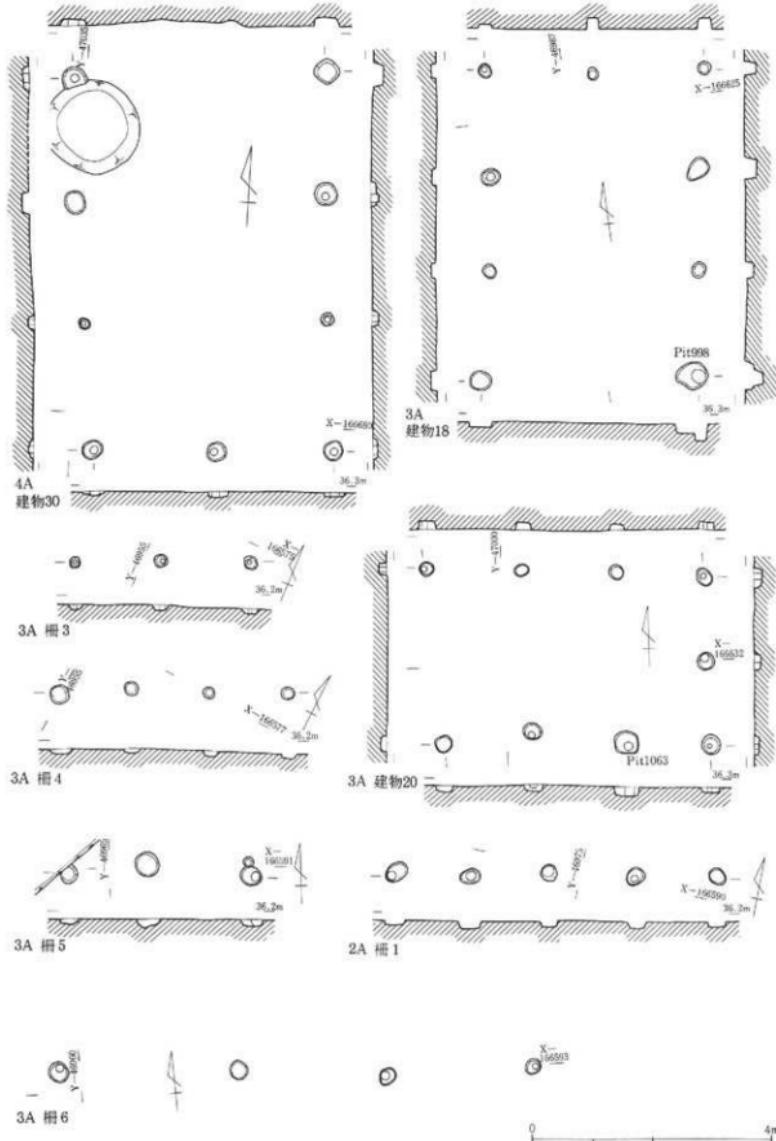


图122 建物18, 20, 30、檻1, 3, 4, 5, 6平・断面図

表5 平安時代建物一覧表

建物No	形状	規模(開間)	方位	柱間(m)	柱穴直徑(cm)	深さ(cm)	柱穴平面形	埴土	備考
1 2A	3×2	N-0°-E	北柱筋西～1.68, 2.9 南柱筋西～1.3, 1.24, 1.56 西柱筋北～1.78, 1.9 東柱筋北～2.0, 1.7	34～70	8～14	円～方形に近い	柱穴：埋灰褐色粘質土に地山の明褐色粘質土が入る 柱底：埋灰褐色粘質土 柱直徑：柱底直徑16～26cm	pit54柱穴60×70cm pit557柱穴直徑20cm	
2 2A	3×3	N-0°-E	北柱筋西～1.84, 1.58 南柱筋西～1.22, 1.08, 1.32 西柱筋北～1.28, 1.4, 1.18 東柱筋北～1.62, 1.36, 1.0	20～40	8～14	円形	柱穴：灰褐色粘質土に地山の明褐色砂礫土が入る 柱底：灰褐色粘質土	柱底直徑約15cm	
3 2A	2×2	N-26°-E	北柱筋西～2.06, 2.14 南柱筋西～2.12, 1.82 西柱筋北～1.78, 1.86 東柱筋北～1.92, 1.92	40～60	8～12	圓円方形	柱穴：埋灰褐色粘質土 柱底：明褐色粘質土	柱底直徑16～20cm	
4 2A	3×1	N-16°-E	北柱筋西～1.58, 1.54, 2.16 南柱筋西～1.52, 1.52 西柱筋北～1.9, 1.3	32～44	4～16	円形～やや方形	柱穴：埋灰褐色粘質土に地山の明褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	・3×2間の東西建物物か ・柱底直徑12～20cm	
16 3A	2×2	N-12°-E	北柱筋西～1.5, 1.3 南柱筋西～1.2, 1.46 西柱筋北～1.8, 1.52 東柱筋北～1.9, 1.3	18～40	6～10	円形	柱穴：灰褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	柱底直徑10～18cm	
17 3A	2×1	N-20°-E	北柱筋西～1.82, 1.92 南柱筋西～1.74, 1.86 西柱筋北～2.32 東柱筋北～2.4	24～44	14～32	円形～やや圓円方形	柱穴：灰褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	柱底直徑10～18cm	
18 3A	3×2	N-8°-E	北柱筋西～1.8, 1.86 南柱筋西～3.62 西柱筋北～1.78, 1.86, 1.5 東柱筋北～1.68, 1.68	16～56	6～30	円形	柱穴：埋灰褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	柱底直徑10～24cm	
20 3A	3×2	N-3°-E	北柱筋西～1.62, 1.56, 1.42 南柱筋西～1.46, 1.62, 1.44 西柱筋北～2.9 東柱筋北～1.36, 1.44	20～36	10～16	円形	柱穴：にぶい黄褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	pit1063のみ属可方形 ・柱底直徑10～16cm	
30 4A	3×2	N-5°-E	北柱筋西～4.16 南柱筋西～1.98, 1.98 西柱筋北～2.04, 2.0, 2.1 東柱筋北～2.06, 2.02, 2.18	20～40	8～16	円形	柱穴：黄褐色～埋灰褐色粘質土 柱底：埋灰褐色粘質土	柱底直徑10～14cm	

表6 平安時代柵一覧表

柵No	形状	方位	柱間(m)	柱穴直徑(cm)	深さ(cm)	柱穴平面形	埴土	柱底直徑(cm)
1 2A	4	W-12°-S	西～1.34, 1.3, 1.4, 1.36	28～40	8～12	円形	褐色砂質土	10～18
3 3A	2	N-67°-E	西～1.44, 1.42	18～22	10	円形	にぶい黄褐色砂質土	6～8
4 3A	3	E-30°-S	西～1.2, 1.3, 1.3	20～30	6～8	円形	にぶい黄褐色砂質土	
5 3A	2	E-3°-S	西～1.32, 1.78	30～40	8～14	円形	灰褐色砂質土	12
6 3A	3	E-4°-S	西～2.94, 2.42, 2.48	24～34		円形		10～16

建物20および30のPitからはII型式と思われる須恵器細片が数片出土しているのみである。

## 2. 包含層、その他出土遺物（図123、写真図版108）

図123-1200はPit1205出土の黒色土器Aの柵である。Pit1205は奈良時代の建物29であるが、混入したものであろう。

図123-1201～1205は包含層出土である。1201、1202は6Aトレンチ出土の黒色土器Aの柵である。1203は6Aトレンチ出土の縁軸陶器である。1204は3Bトレンチ、1205は4Bトレンチ出土の軒丸瓦である。1204は外区と蓮弁の縁が残存し、裏面は粘土剥離面が観察される。1205は複弁蓮華文と蓮子が残る。1204、1205とともに平安時代末の軒丸瓦か。

## 第6節 中世

中世の遺構としてB地区において耕作痕の溝が検出されている。E-10～20°-Nの方向を有しており、幅20～50cm、深さ約5cmを測る。

## 1. 包含層、その他出土遺物（図124）

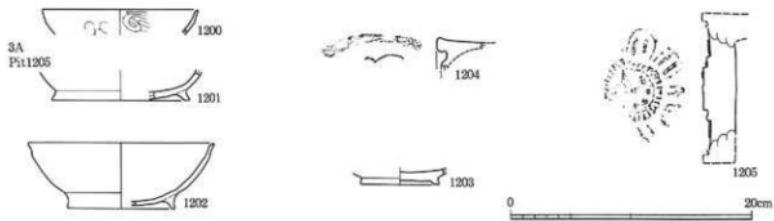


図123 Pit1205、包含層出土遺物

遺物は調査区全体の包含層から瓦器碗、瓦質土器、土師器、瓦、少量の陶磁器が出土している。これらのうち、中国製磁器を主に取り上げ図化した。図124～1206～1212は中国製白磁碗、1213は瓦質羽釜、1214は中国製青花、1215～1219は中国製青磁の碗、皿である。中国製磁器類などについては堺市教育委員会の森村氏に御教示頂いた。

1206、1207は4Bトレンチ出土の白磁碗IV～2類で、12世紀後半～13世紀前半のアモイ窯窯である。1208のみ3Aトレンチ土坑76出土で、1209、1210は2Bトレンチ、1211、1212は4Bトレンチ出土である。1208、1210～1212は白磁碗V～3類である。1209は12世紀の白磁碗I～5類か。1214は3Bトレンチ出土の16世紀後葉の景德鎮窯系の青花で鹿文皿である。1215・1219は4Bトレンチ、1216・1217は3Cトレンチ、1218は3Bトレンチ出土である。1215～1219は龍泉窯系青磁で、1215～1217が碗、1218・1219が皿である。1216はC2類で雷文帯が施され15世紀のものである。1217、1219の内面には櫛描文様が、1215内面と1217の外面にはヘラによる線刻文様が施されている。

上記以外に、6Aトレンチの埋没谷の埋土である黒色粘土質シルトに礫を多く含む層から、木簡が1点出土している（写真図版112）。上下ともに欠損しており、残存長11.6cm、幅2.0cm、厚み3mmを測る。

「・・・□寺木引初稿五本・・・」と記されていると考えられている。

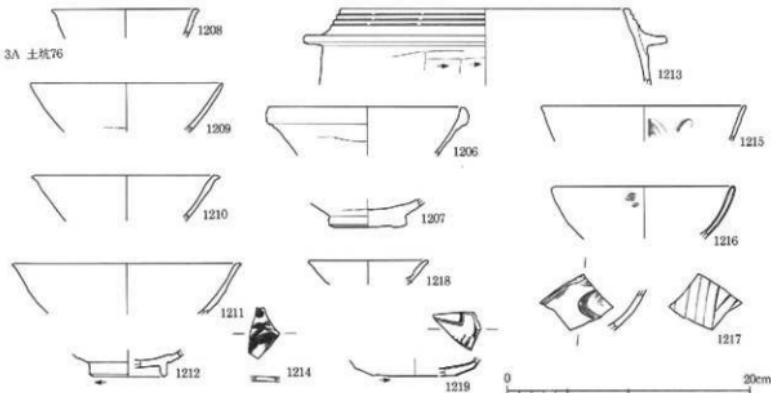


図124 土坑76、包含層出土遺物

## 第7節 近世

近世の遺構としては全調査区にみられる溝、井戸、A・C地区の土坑、池、堤防がある。

### 1. 溝（図125、写真図版46・113）

近世遺物出土の溝が若干あり、それら全てを遺構図に掲載しているわけではないが、特徴的な遺物を抽出し図化した。陶磁器については堺市教育委員会の森村氏の御教示による。以下、トレンチ順に記す。

1B トレンチ中央よりやや南寄りの東側に位置する溝33からは図125-1220の18世紀唐津系ハケ目の鉢が出土している。その他、溝33からは古墳時代須恵器、中世瓦、近世の土師器、瓦、近世から近代にかけての陶磁器などが出土している。

2B トレンチ南東で検出された溝115（写真図版46）は長さ2.7m、幅0.4~0.5m、深さ約0.3mである。内部には須恵器細片、軒丸、軒平、丸・平瓦と礫が充填されており、暗渠としての機能が考えられる。

2B トレンチ東南の溝202からは近世の陶磁器と瓦が出土している（写真図版113）。1221は18世紀波佐見染め付け碗、1222は16世紀末から17世紀初頭のペトナム長胴壺の体部破片、1223は界焼のすり鉢、1224~1228は瓦、1229は瓦質の不明品である。1226、1227は道具瓦、1228は平瓦である。1229は僅かに反りをもつが、ほぼ平坦であり、片面側から回転させて孔をあけている用途不明品である。裏面は不特定方向に削り、表面を平滑にしている。1230は19世紀の伊賀信楽系行平で、外面を飛び鉢で施文している。

1C トレンチ北側中央よりやや東寄りの溝217からは古墳から奈良時代の須恵器、中世瓦、近世陶磁器などが出土している。1231は19世紀波佐見よろけ鍋の広東碗である。1232は波佐見白磁小杯で、網目文が施されている。

1C トレンチ北端東寄りの溝218からは古墳から奈良時代の須恵器、中世瓦、近世陶磁器などが出土している。1233、1234は18世紀肥前系碗である。1235は16世紀末から17世紀初頭の唐津皿である。1236は17世紀波佐見染め付け碗である。

2C トレンチ北側西寄りのほぼ南北にのびる幅0.3~0.4m、長さ約5mの溝236からは須恵器、近世土師器、陶磁器が出土している。1237は18世紀前半の肥前京焼系陶器碗である。

4C トレンチ北端中央より東側にある溝303からは須恵器、近世土師器、陶磁器、瓦が出土している。他に現代タイル破片が1点みられるが、混入と思われる。1238は18世紀波佐見白磁小碗である。1239は18世紀波佐見染め付け碗で、見込みに直径5.5cmの蛇の目釉剥ぎが見られる。1240は伊万里の染め付け皿である。

### 2. 井戸（図126~128、写真図版46・112）

近世井戸は主にC地区から多く検出された。以下、トレンチ順に記す。井戸からも中国および国産陶磁器が少々と堺在地産土人形が出土しているが、これらは堺市教育委員会の森村氏に御教示頂いた。

井戸1（図126、写真図版112）は3A トレンチ北東端に位置する。直径0.8mの平面円形状を呈する素掘り井戸である。井戸1からは古墳から奈良時代の須恵器、中世瓦、近世土師器、陶磁器、瓦が出土しているが、その他に18世紀の堺在地産土人形が1点（1241）ある。1241は頭部の欠損した残存高4cm、幅4.3cm、厚さ3cmの座った状態の人をかたどった人形である。前後から型で押さえてつくっている。

井戸19（図126）は4B トレンチ中央やや東寄りに位置する。直径2.5mの平面円形状を呈する素掘り井戸である。ここからは須恵器、近世土師器、陶磁器、瓦などが出土している。1242は19世紀の丹波焼

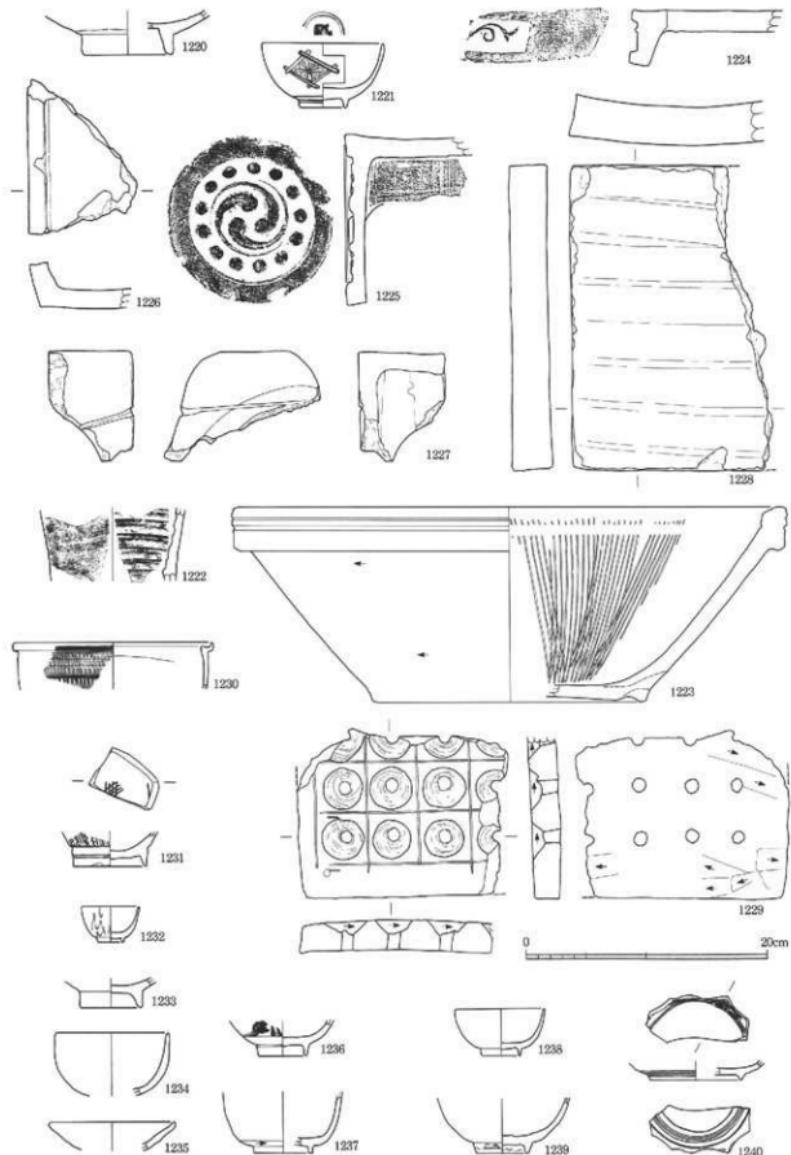


图125 溝出土遗物

甕である。

井戸42（図126、写真図版112）は7Cトレンチ中央北端に位置する。この井戸からは古墳時代須恵器、近世瓦などが出土している。1243は16世紀末～17世紀初頭の中国福建省漳州窯系青花不死段盤（川口分類盤のC折縁型）の高台破片である。黒灰色の胎土に乳濁釉をかけ文様を描いたもので、疊付には粗い砂がついている。

井戸8（図126・127、写真図版112）は2Cトレンチ北西寄りに位置し、近世土師器、陶磁器、瓦などのうち、国産陶磁器が多数出土している。1244～1282は出土遺物である。1244～1267が18世紀波佐見焼、1268・1269・1271が肥前系、1270は肥前京焼系、1272～1274が肥前嬉野内ヶ磯窯系、1275が現川焼、1276が16世紀後半の景德鎮窯系、1277～1279が伊万里焼、1280が撻焼、1281が木製椀である。1276の中國製皿には黒漆を破断面に塗り補修している。1282は平瓦で、凹面はナデ、凹面の縁は辺に沿ったヘラ削りが、凸面は主に長軸方向のヘラ削りが施されている。奈良から平安時代のものか。1289は17世紀後半の備前すり鉢である。

井戸14（図127）は2Cトレンチ北西寄りに位置する。ここからは須恵器、近世土師器、磁器（1283～1285）が出土している。1283は18世紀伊万里焼皿、1284、1285は18世紀波佐見焼碗である。

井戸10（図127）は2Cトレンチ中央やや西寄りに位置する。ここからは近世土師器、陶磁器、平瓦が出土している。1286は18世紀波佐見焼染め付け碗で、見込みに直径4.8cmの蛇の目釉剥ぎと直径4.0cmの重ね焼き痕がある。

井戸11（図127）は2Cトレンチの中央やや西寄りで井戸10のすぐ南側に位置する。ここからは近世土師器、陶磁器が出土している。1287は18世紀の波佐見焼染め付け碗、1288は18世紀の肥前系京焼系陶器碗である。井戸7は1Cトレンチの北西に位置する。ここからはサヌカイト、須恵器、近世陶磁器、瓦が出土している。1290は18世紀波佐見焼一重網目文盤である。

井戸35（図127）は4Cトレンチ南西に位置する。3.3×3.8mの平面橢円形状の素掘り井戸である。ここからは古墳時代の須恵器、近世土師器、陶磁器、瓦が出土している。1291は波佐見焼染め付け皿、1292は19世紀の瀬戸小碗、1293は19世紀の瀬戸火鉢、1294は19世紀の伊賀信楽系鍋蓋、1295は土師器の焙烙鍋、1296は湧焼壺、1297は土師器の火鉢である。

井戸36（図127）は4Cトレンチの南側中央付近に位置する。ここからは須恵器、近世磁器、瓦が出土している。1298は18世紀の波佐見焼皿である。見込みには直径5.4cmの蛇の目釉剥ぎがある。

井戸33（図127）は4Cトレンチの北東に位置する。ここからは須恵器、近世土師器、陶磁器、瓦などが出土地してある。1299は18世紀肥前陶器碗、1300は18世紀肥前嬉野内ヶ磯窯系陶器碗である。

井戸34（図127、写真図版46）は4Cトレンチ南東隅に位置する。ここからは奈良時代の須恵器、近世土師器、陶磁器、瓦が出土している。1301は18世紀波佐見焼染め付け碗で、見込みは蛇の目釉剥ぎをしている。

井戸31（図127・128、写真図版112）は4Cトレンチ北側に位置する。ここからは古墳時代の須恵器、中世の須恵器鉢、近世の土師器、陶磁器、瓦、砥石などが出土している。1302は18世紀波佐見焼染め付け碗、1303～1305は伊万里焼である。1303は染め付け小碗である。1304は17～18世紀の染め付け碗で、鉛ガラスによる焼き雜ざが3ヶ所ある。1305は17世紀の伊万里焼五彩鉢である。1305の五彩は赤、黄、緑、水色、金色で、少女の斜め後ろ姿が描かれている。1306は18世紀の波佐見焼二重網目文碗である。1307は18世紀の波佐見焼五弁花文碗で、周縁を打ち欠いてメンコに再加工している。1308は肥前陶器碗

で、高台周縁を打ち欠いて再加工している。1309は19世紀の伊賀信楽系行平鍋の蓋である。

井戸32（図128）は4Cトレンチ中央よりや東寄りに位置する。ここからは須恵質の円筒埴輪の細片が1点と、近世土師器、陶磁器、瓦が出土している。1310は18世紀伊万里焼染め付け碗である。1311、1312は18世紀の波佐見焼碗である。1313は青磁の波佐見焼瓶子である。1314は18世紀肥前系山水文陶器碗である。1315は19世紀の伊賀信楽系皿である。1315は外内が浅黄色、断面が灰白色を呈する。1316は18世紀唐津系ハケ目片口鉢である。

### 3. 土坑・Pit（図129・130、写真図版46・114）

3Aトレンチ中央部において近世の土坑が7基検出された（図129）。隅円長方形から椭円の形状を呈しており、深さは30～60cmを測る。断面はU字型を呈し、埋土は上層にいぶい黄橙色粘質土、最下層に灰白色粘質土がみられる。土坑88の埋土には炭化物が含まれていた。遺物は須恵器、土師器、瓦、陶磁器の出土がみられるが、いずれも破片である。これら土坑の性格としては墓の可能性が考えられる。土坑86からは図130～1317の唐津碗底部破片が出土している。

1Cトレンチ北東に位置する土坑267からは近世遺物とともに砥石（1319）が出土している。両面ともに使い込まれて片側へ薄くなっている。砂岩製である。

2Cトレンチ西端寄りに直径約0.8mの平面が円形状を呈した土坑561からは18世紀の波佐見焼染め付け碗（1320）が1点出土している。

2Cトレンチ土坑561より北へ約10mの位置にある土坑564からは17世紀後半の備前すり鉢（1321）が出土している。土坑564では他に土師器焙烙鍋、湊焼壺、皿、18世紀肥前系陶器碗、瓦などがみられる。

4Cトレンチ中央東端において土坑2602（図130、写真図版46・114）が検出されている。直径約0.6m、深さ約0.3mを測る円形の土坑であり、中に湊焼の甕を据えている。土坑と湊焼甕の間にはほとんど隙間がなく据えられているが、検出面では甕の周囲に約5cmの隙間が見られる。甕は下部約30cmが残り、その上部約10cmの部分は内部に落ち込んでいた。なお、口縁部の破片は出土していない。1323は底部直径38cmを測り、高さ40cm残存する。内外面ともに明赤褐色を呈しており、器壁厚は底部で1.8cm、側面で0.9cmを測る。外面調整は平行叩きを行い、据部の屈曲部はヘラ削りを施す。底部外面には離れ砂が付着する。内面は粗いハケ目調整、底部はナデ調整を行う。1322は土坑2602出土の波佐見焼染め付け碗である。この土坑からは他に土師器焙烙鍋、甕、瓦の破片がみられる。

4Cトレンチ南側の溝319を切るPit2817からは18世紀肥前系ハケ目片口鉢（図130～1318）が1点出土している。

### 4. 池（図131・132、写真図版46・114）

池は6Aトレンチと1C・2Cトレンチにかけての2ヶ所にある。

6Aトレンチの松池は南側の尾美濃池、北側の濃登ノ池と連なる開析谷を利用した溜池であり、近世に堤防が築かれたことが確認された。

3Aトレンチとの境界の西側堤防（堤防1）は地山面に幅約3mにかけて黄褐色から鈍い黄橙色の粘質土を版築状に高さ約1.2m積み上げている。また、最下層の3Aトレンチ寄りには旧耕土が観察された。

6Aトレンチ北側の堤防2（図131）は最底部に弥生時代から中世の堆積層があり、その上面に版築状に黄褐色系の砂礫混じり砂質土が積まれている。また、堤防内には木樋が北東一南北方向に約8m検出された。幅約7cmの板材を組み合わせており、一部に墨書きが残存していた（写真図版114）。1359は幅28cm、厚さ7.5cmを測り、4ヶ所に残存状態の良いもので2.4×1.7cmの角釘の頭が残る。写真的右側は柵

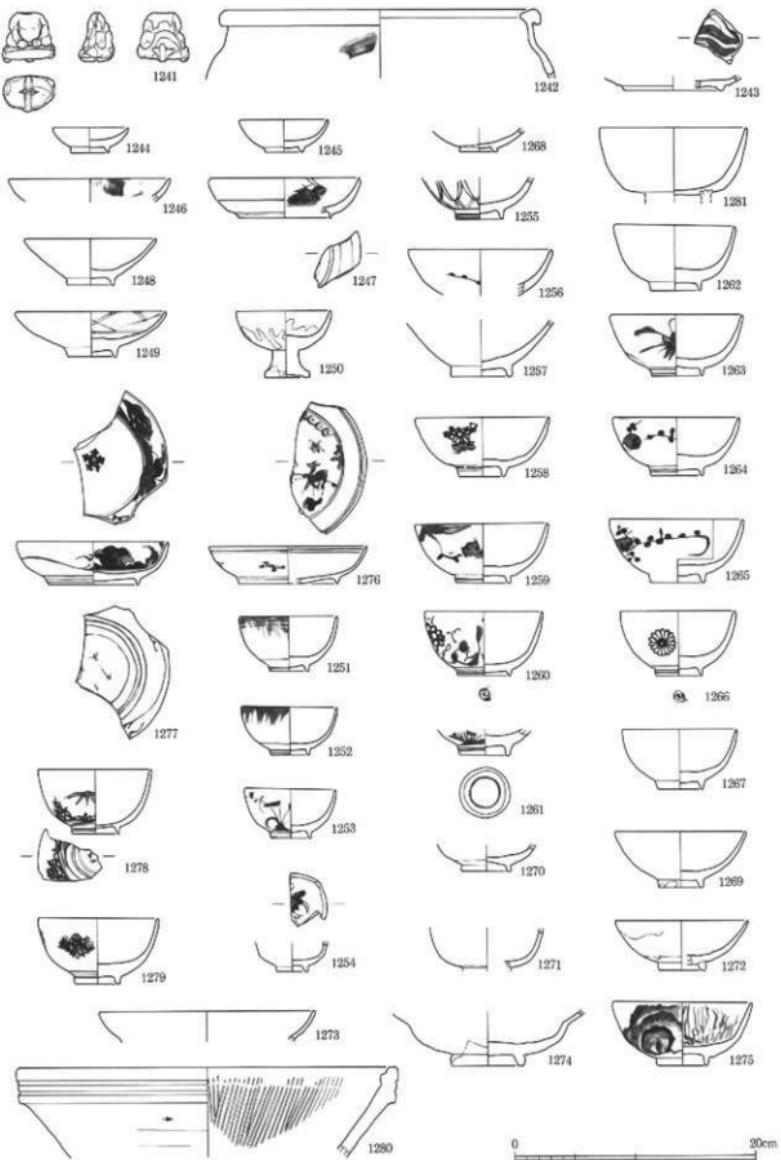


図126 井戸出土遺物

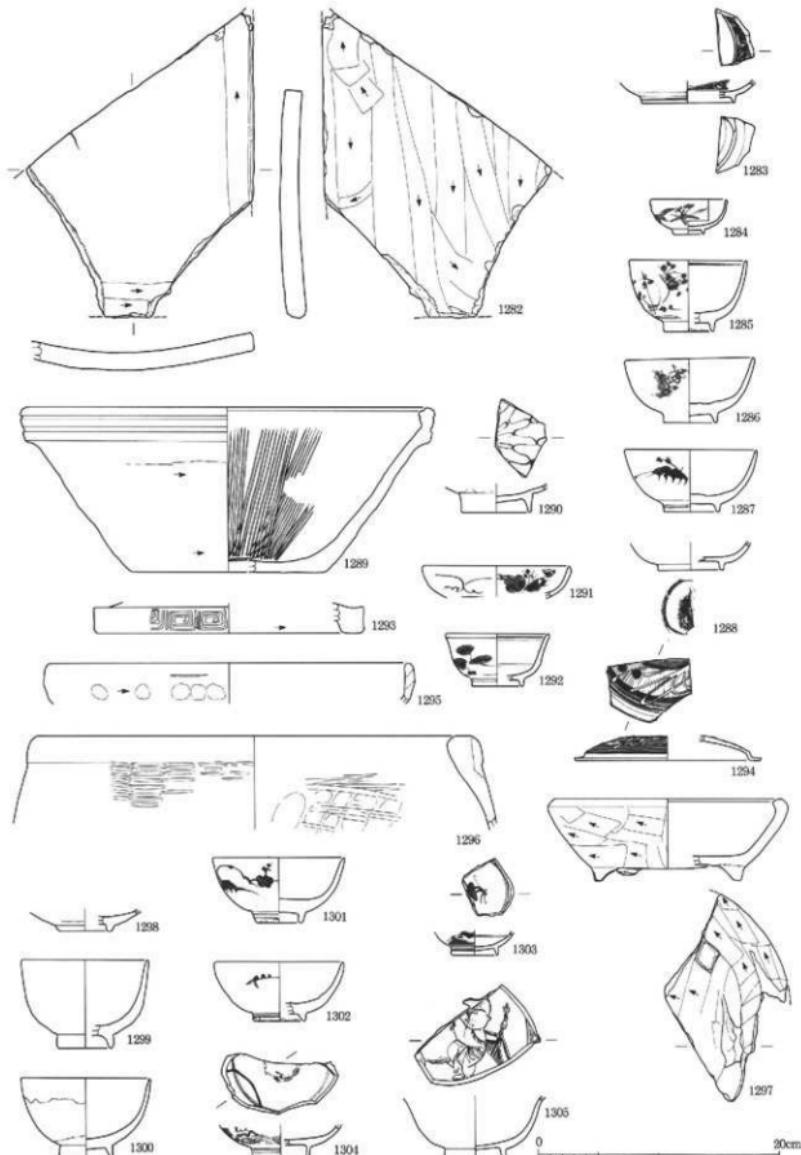


図127 井戸出土遺物

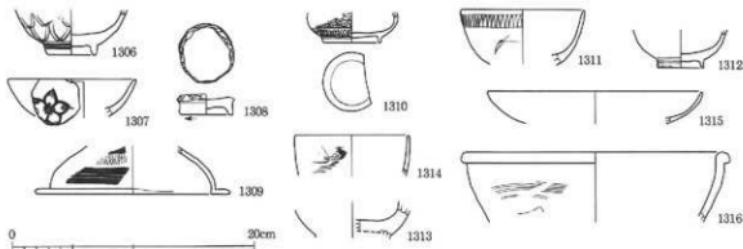


図128 井戸出土遺物

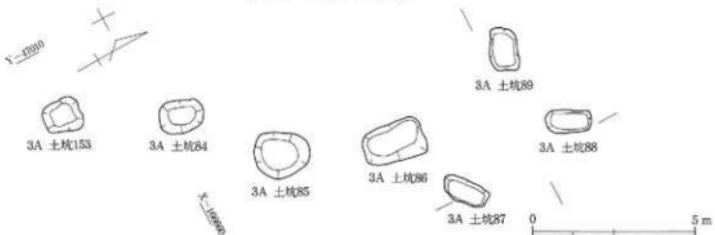


図129 3A トレンチ近世土坑群平面図

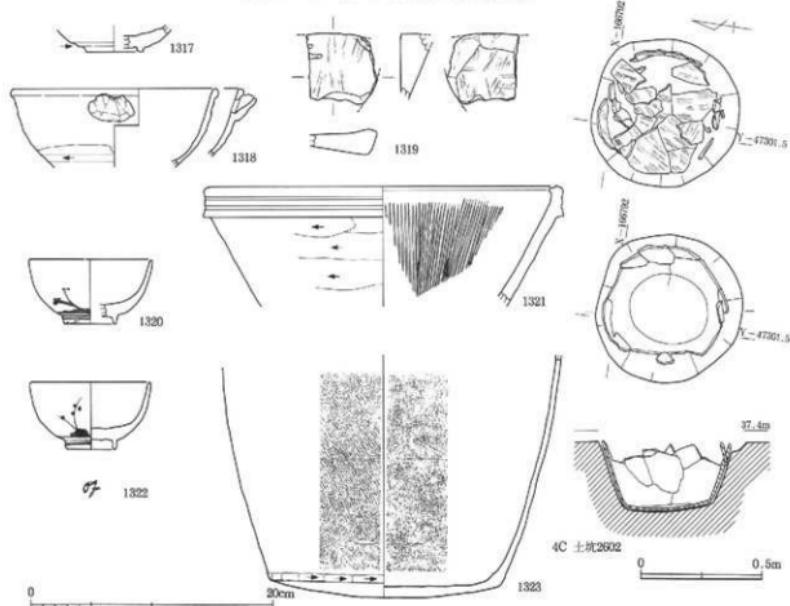


図130 土坑2602平・断面図およびPit、土坑出土遺物 (1323はS=1/8)

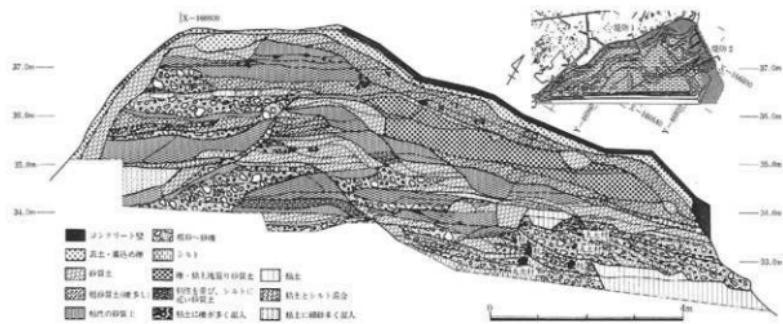


図131 松池堤防2 土層断面

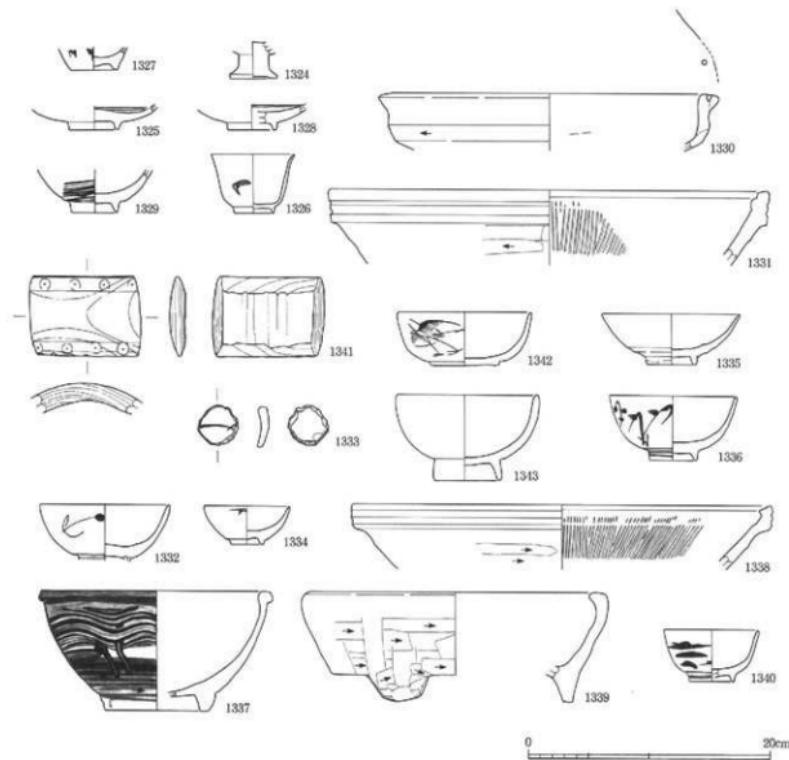


図132 池および包含層出土遺物

の維ぎ手のように加工してある。

堤防1が段丘上に築かれているのに対し、堤防2は谷を埋めて築かれている。規模は基底部で約14m以上、高さ5m以上を測る。本堤防の特徴は、何回かに分けて土が盛られ、特に池側に厚く盛られていることである。堤防1の土層は水平であったが、本堤防の土層は複雑である。T.P.+32mに存在する粘土を掘削しているので、上層の褐色の砂質土には粘土塊が多く混入している。堤防1と共に通していることは、池側と反対の面に、砂礫や砂質土で盛土していることである。なお、基底部は、池側に杭が打たれ、丸太材が横たわっており、強固に補強されている。

1C・2Cトレンチにかけて池が検出されている。深さ約1mを測り、調査区北側にさらに延びる。池の底には近世以前の遺物の堆積はみられず、また南東隅には井戸15が池底部において検出された。溜池として使用するにあたり、近世に底部の掘削を行っているようである。

池からは図132-1324～1331の遺物が出土している。1324～1326は池の堤防からの出土である。1324は波佐見焼仏飯具、1325は波佐見焼皿で、見込みに直径3cmの蛇の目釉剥ぎがある。1326は波佐見焼染め付け碗である。1327～1329は池内出土である。1327は波佐見焼瓶子、1328は波佐見焼皿、1329は肥前焼ハケ目碗である。1330、1331は池底より出土している。1330は土師器焙烙鍋、1331は界焼すり鉢である。

## 5. 包含層、その他出土遺物（図132）

調査区全域から近世遺物が出土している。

1341は6Aトレンチ出土の不明木製品である。半径8cmの湾曲した外面には円形の釘状のものが上下に縁に沿った状態で並ぶ。外面の削りは滑らかである。内面は粗く削り抜き、面取りを上下に施している。丸い釘を使用しているようなので近代以降のものか。

1332～1334はB地区出土の波佐見焼染め付け碗である。1333は周縁を打ち欠いてメンコに再加工している。1335～1340、1342、1343はC地区出土である。1335は18世紀の肥前嬉野内ヶ磯窯系碗、1336は18世紀の波佐見焼碗、1337は18世紀唐津焼ハケ目片口鉢、1338は18世紀の界焼すり鉢、1339は17世紀前半の土師器火鉢、1340は18世紀の波佐見焼染め付け碗である。1342、1343は木製の漆塗り椀で、1342は外面に黒色の上から金色の鳥が描かれており、内面に朱色の漆が塗られている。1343は外内に朱色の漆が部分的に残る。

## 第8節 遺構・遺物の検討

概要報告書において密集型土坑群および建物群が既に検討されている。ここでは概要報告書に記載された密集型土坑群を転載し、建物群については、今回改めて市本の執筆原稿を掲載している。それら以外では、遺物整理のなかで少し目についた事柄について以下に述べる。

### 1. 出土須恵器のヘラ記号について

大庭寺遺跡からはヘラ記号のついた須恵器片が出土している。

ヘラ記号の出土点数の割合はA地区がほぼ半分を占め、B地区が約4割、C地区が約1割を占める。これをトレンチ別に出土点数の割合をみると、図133-1に表示したとおり、6Aトレンチが一番多く、次いで1Bトレンチ、2Bトレンチであるが、これらの出土割合は遺物出土量の割合とはほぼ同じ傾向にある。

ヘラ記号は全部で68種類720点あり、1点ずつしか見られない特殊な例を除き、特に多くみられるの

は直線を組み合わせたものである。ヘラ記号の種類別にその割合を出したのが、図133-3である。それらは多い順に、「-」、「×」、「二」、「フ」、「三」、「キ」、「ハ」等である。ヘラ記号によっては、回転させると違った印象の記号に写るが、それらは出来る限り同じ記号として扱った。例えば、「キ」と「サ」のように、1本の直線に2本の交わる直線がある場合や、「T」と「入」のように、1本の直線の真ん中あたりに接してほぼ直角にのびる1本の線をもつものなど、これらは同じ記号として集計している。

ヘラ記号のある須恵器の器種別割合を出したのが、図133-2の円グラフで、蓋杯が8割近くを占め、次いで甕が2割弱を占め、残りはその他の器種である。その他の器種には壺類、鉢、提瓶、高杯、瓶、横瓶、碗、器台などが極少量みられる。

図133-4の折れ線グラフは、器種別に特定のヘラ記号が多用されていないか、出土点数の多いヘラ記号を対象にその特徴を表現してみた。このグラフでみると「三」、「フ」、「二」は甕に多用されているのが分かる。特に、「三」は蓋杯よりも多くあり、また、他の器種に殆ど見られないのが目を引く。

次に、窯出土のヘラ記号をみる。TG229からは計13点のヘラ記号を出土しており、それらは多い順から、「-」が蓋杯類8点、「×」が蓋杯類3点、「三」が甕1点、「×」が杯蓋1点である。

TG228では計4点のヘラ記号が出土している。「-」が杯蓋で1点、「三」と「フ」が甕各1点、他に「二」がダブったようなヘラ記号が短頸壺で1点みられる。しかし、杯蓋と短頸壺は偶然ついた可能性も残るために、甕のヘラ記号だけが確実なものとしてあげられる。これら窯出土のヘラ記号には、大庭寺遺跡出土ヘラ記号のうち、最も多いタイプのものが含まれている。

## 2. 密集型土坑群について（図134・135、表7～10）

密集型土坑群については概要報告書で小野、市本が土坑群の様相について見解を述べているので、以下にそれを転載し、次いで遺物の観察から土坑群の性格について触ることにする。

### （1）密集型土坑の様相

C地区において2661基の土坑が検出された。深さ約30cmを測る浅い谷筋内とその周辺に分布しており、土坑間のほとんどには切り合い関係をもち、完形の平面を有する土坑は少ない。平面形態は隅円の長方形を代表とするが、長梢円、隅円方形、Pit状のものも存在し、多様である。面積計測可能な土坑1264基のうち、面積0.2m<sup>2</sup>以下のPit状のものは25%の317基を数える。断面形態は基本的にはU字型を呈するが、中には袋状になるものも存在する。残存状況の不良なものは深さ約10cmを測り、皿状を呈する。埋土は黄灰色系のシルト質粘土であるが、黄褐色の粘土ブロックがはいるものが多々見受けられ、その明暗の違いより1層から3層に分層できる。多層に分層できるものは個々の土がブロック状にはいったもので一度に埋め戻されたことが考えられる。断面の観察によれば木棺等の内部施設の使用は考えられない。炭化物のはいった土坑も若干みられる。

分布状況は空白地が若干みられるものの小群の分割は考えにくい。しかし、3Cトレーニングの南端で検出された溝252は土坑群と同時期のものと考えられ、土坑群を区画する溝と推定できる。また、東側には河川1が存在し、同じく区画するものと思われるが、未調査区にあたっており、現段階では推定できない。なお、土坑群の調査にあたっては、1Cトレーニングから開始したのであるが、調査時の不手際により、谷地形の検出に入ってしまったため、3Cトレーニングと比較して密集度が低い検出となってしまった。本来は1Cトレーニングも3Cトレーニングと同様の密集度で土坑が存在したものと推定される。

遺物が出土した土坑は563基で全体の21%である。図134は出土遺物の時期別分布状況を表わしたものである。概報では西暦で表現していたが、今回は中村編年のII型式、III型式、IV型式の須恵器を出土し

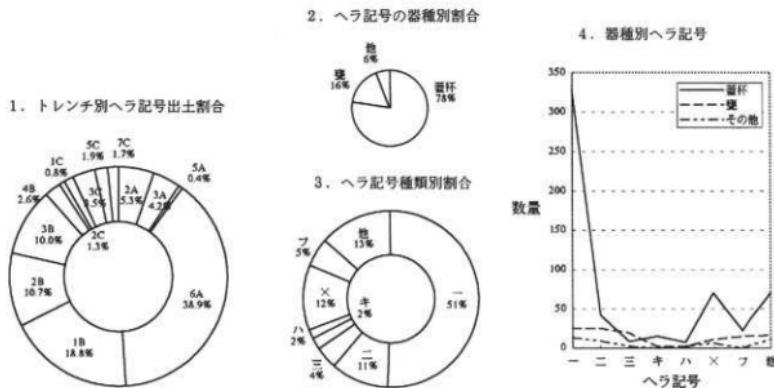


図133 ヘラ記号各種グラフ

た土坑としている。なお、時期の確定出来ない体部破片などの場合は除いている。

時期別土坑の分布状況は概報と同じく、東側から西側へ移行する傾向がみられる。但し、古墳時代の遺物の出土については周辺に同時期の遺構が拡がっているので、混入として考える必要のある土坑も存在することが危惧される。

いずれの土坑群からも全く骨の出土は見られないが、遺物をみると特異な器種が完形に近い状態で出土しているところに特徴をみることができる。

このような土坑群は『密集型土坑群』として検出例が増加しており、これらを扱った論考も発表されている。これら論考を参考にしながら他遺跡の土坑群の様相を紹介しておきたい。

まず土坑内の埋土であるが、ブロック状で意図的に埋め戻された状態を見るものが多い。分布状況は空白地を有しながら群を構成する様相が窺われるものと、切り合ひ関係が著しく密集するものがみられる。立地は浅い谷中に形成するものと小河川に沿った場所に形成するものがみられる。土坑形態は不定形なものは少なく、円形、橢円形、方形、長方形といった意識した形状が認められる。出土遺物に関しては出土数は少なく全体の1～2割程度である。時期は弥生時代後期後半から奈良時代にかけてのもののが殆どであり、鎌倉時代のものが僅かに含まれる。

このように大庭寺遺跡土坑群の状況も近似しているが、これらの中でも規模、密集度は最も大きなものの部類にはいる。

以上のように大庭寺遺跡の密集型土坑群の性格については詳細な検討が必要であるが、現段階としては「墓」としての可能性が高い遺構と考えておきたい。

大庭寺遺跡5Cトレンチの15基の土坑で残存脂肪酸分析を行ったところ（付章第5節）、すべてにバルミチン酸が主要な脂肪酸に含まれており、高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤にみられる高級脂肪酸（アラキシン酸・ベヘン酸・リグノセリン酸）が1点を除いて確認されている。高級脂肪酸の検出によって頭部の位置も想定される。高級脂肪酸の組成を数理解析し、採集地点の含量をみると東側に高い値を示す土坑も存在するが、大半の土坑は南側か西側で高い値を示していた。今後採集の仕方によっ

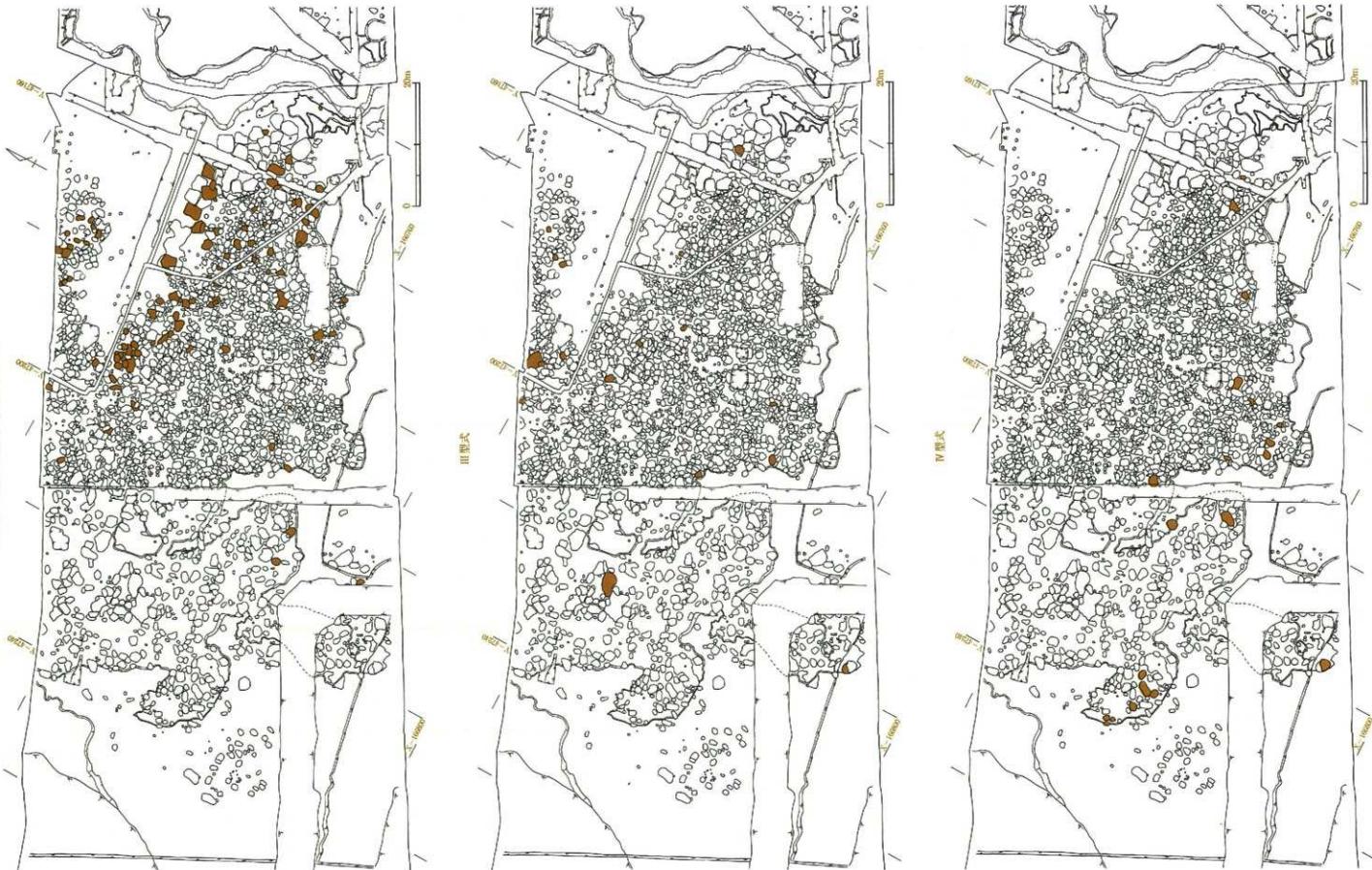


図134 時期別遺物出土土坑分布図

表7 大庭寺遺跡土坑面積基數表（A・B地区）

面積(m <sup>2</sup> )	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.4	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.7	3.5	4.0	4.2	4.8	計
0.1m <sup>2</sup>	2	2	3	2	1	1																											11	
0.2m <sup>2</sup>		1	3	2	2																												6	
0.3m <sup>2</sup>			1	2	3	2	3																										16	
0.4m <sup>2</sup>				1	4	2	3	2	1																							13		
0.5m <sup>2</sup>					2	3	3	1	1																							8		
0.6m <sup>2</sup>						2	3	6																								11		
0.7m <sup>2</sup>						3	4	1	2																							10		
0.8m <sup>2</sup>							1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										6					
0.9m <sup>2</sup>								1	2	2	1	3	1	1																7				
1.0m <sup>2</sup>								1	2	1	2	1	3																		8			
1.1m <sup>2</sup>									1	1																						3		
1.2m <sup>2</sup>									1	1	1																				3			
1.3m <sup>2</sup>									1	1	2	1	1	1																8				
1.4m <sup>2</sup>										1																					1			
1.5m <sup>2</sup>											1																				2			
1.6m <sup>2</sup>												1																			1			
1.7m <sup>2</sup>													1																		1			
1.8m <sup>2</sup>													1																		2			
1.9m <sup>2</sup>														1																	1			
2.0m <sup>2</sup>														1																	1			
2.1m <sup>2</sup>															1																1			
2.2m <sup>2</sup>																1															2			
2.3m <sup>2</sup>																	1														2			
2.4m <sup>2</sup>																		1													1			
2.5m <sup>2</sup>																			1												1			
2.6m <sup>2</sup>																				1											1			
2.7m <sup>2</sup>																					1										1			
2.8m <sup>2</sup>																						1									1			
2.9m <sup>2</sup>																							1								1			
3.0m <sup>2</sup>																								1							1			
3.1m <sup>2</sup>																									1						1			
3.2m <sup>2</sup>																										1					1			
3.3m <sup>2</sup>																											1				1			
3.7m <sup>2</sup>																																1		
3.5m <sup>2</sup>																																1		
4.0m <sup>2</sup>																																1		
4.2m <sup>2</sup>																																1		
4.8m <sup>2</sup>																																1		
計	2	3	7	6	7	12	13	14	16	9	6	4	5	6	3	4	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	138				

ては遺体の位置が限定され、さらに頭位も明確になると思われる所以、今後留意する必要があろう。そして出土する土器も注意しなければならない。土器内に動植物のものが納められていなかったかどうか、確認してみる事も提言しておきたい。周辺遺跡では万崎池遺跡の土壤SKT118と土壤SKT88の妻の土壤をリン分析された例があり、含有量が高い数値を示していた。なお万崎池遺跡の土壤は大庭寺遺跡とはほぼ同時期の遺構である。

#### (2) 密集型土坑の性格

古墳から奈良時代にかけての土坑が多く検出されているが、それらのうち、面積測定可能なものについて、縮尺1/100の遺構平面図をもとに、面積測定器（TAMAYA DIGITAL PLANIMETERのPLANIX6）を使用し、測定した。この測定器において、縮尺1/100の面図では0.1m<sup>2</sup>未満は測定不能であったので、データの集計に際して、0.1m<sup>2</sup>以下は一括している。

C地区の土坑計2661基のなかで、面積測定可能であったのは1264基である。最小面積0.1m<sup>2</sup>（0.1m<sup>2</sup>以下も含む）から最大面積8.7m<sup>2</sup>までみられる。これらのうち、1m<sup>2</sup>以下が1039基で8割強を占める。面積を0.1m<sup>2</sup>単位で区切り、棒グラフにしたのが、図135である。面積0.5m<sup>2</sup>以下の土坑が678基と最も多く、なかでも0.1～0.2m<sup>2</sup>以下の面積の土坑が317基と、極めて面積の狭い土坑が多い。

長軸と面積の関係は表8に示した。長軸は最短0.1mから最長4.2mまでみられ、長軸1m前後のものが多く、そのうち長軸1mの土坑が最も多い。

表 8 大庭寺遺跡土坑面積基數表 (C 地区)

面積(m <sup>2</sup> )	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.8	1.0	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	P
0.1m <sup>2</sup> 以下	1	35																																		35		
0.1mf		1	16	46	66	17	6	1																										130				
0.2mf			15	26	51	34	9	2	1																										161			
0.3mf			4	26	36	43	18	1	2																									137				
0.4mf				2	11	43	40	21	7	1	1																						128					
0.5mf					14	47	29	14	9	2	1																						216					
0.6mf						15	39	22	19	6	1																						96					
0.7mf							18	30	25	7	4	1	1																			91						
0.8mf								7	21	27	16	7	8																			81						
0.9mf									11	35	10	14	8	4	1																	43						
1.0mf										12	33	18	7	1	2																	32						
1.1mf											9	11	16	6	3	1	1															43						
1.2mf											6	3	7	3	3																	28						
1.3mf												6	13	8	6	1	2														35							
1.4mf												6	1	3	2																13							
1.5mf												1	3	2	2	1	1															11						
1.6mf													2	2	1	3	1	1	1												17							
1.7mf													1	2	4	1	1	1													1							
1.8mf													2	1	2																	9						
1.9mf													2	2	1	2																7						
2.0mf														1	1																	3						
2.1mf															1																		8					
2.2mf																1																	2					
2.3mf																	1																1					
2.4mf																	1																2					
2.5mf																		1															2					
2.6mf																			1														2					
2.7mf																				1													2					
2.8mf																				1													2					
2.9mf																					1												4					
3.0mf																					1												3					
3.1mf																						1											1					
3.2mf																							1										1					
3.3mf																								1									1					
3.4mf																									1									1				
3.5mf																										1								1				
3.6mf																											1								1			
3.7mf																												1								1		
P	1	31	14	41	93	96	87	109	115	117	109	97	75	57	53	29	27	26	23	16	7	7	6	3	3	2	1	3	2	1	1	1	1	154				

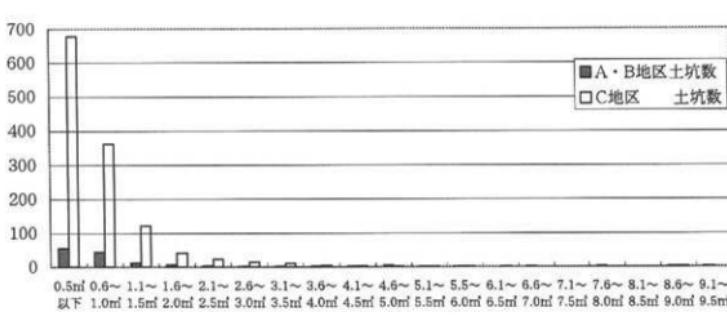


図135 土坑面積グラフ

各土坑は密集しており、お互いに切り合い関係をもつものが多く、しかも深さ20cm未満が大半を占める状態であることから、上面が削平を受け、本来の土坑の大きさを留めていない可能性も考えられる。

付図8は密集型土坑の検出された1~3C、5C、7C、8Cトレントの土坑出土遺物の接合関係を図化したものである。隣り合う土坑間や、極めて離れた距離にある土坑間においても接合例がみられた。また、表にも記したが、土坑と溝においても接合例がみられた。これら、1Cと3C、1Cと2Cトレント間での接合例にみると、直線距離にして70~80mも離れた土器片が接合した原因として、表面が削平・整地され、埋土の一部が移動した可能性を考えた。しかし、調査担当者によると、大規模な整地層が観察されなかっただので、証明はできないが、供献土器を破壊し、その一部を別の場所に捨てる行為があつたのではないかと推測されている。このような調査担当者の考え方以外に、離れた位置出土の土器破片接合は、一つの個体を複数の破片にして、異なる土坑に各々埋納した可能性も考えられる。

各土坑出土遺物については、表10の土坑一覧に土坑の寸法等と共に表示した。密集型土坑とされるC地区の土坑数2661基のうち、遺物を伴うものは481基で2割弱である。これら土坑の中には、必ずしも完形に近い土器が出土している訳ではなく、攪乱を受けた包含層中の古い時期の遺物と共に、廃棄されたかのような細片が多数見られるものもある。付図8に掲載した接合例とそれ以外の接合例も全て含むと、異なる土坑間接合例は19点みられる。その他、中・近世遺物等が共存するものもみられ、混入かどうか検討をする部分もある。

遺物整理をした感触では、密集型土坑を構成する個々の土坑は、a：単独遺物の出土する土坑、b：数点の遺物を出土する土坑、c：破片が多く混じり、出土遺物の器種が豊富な土坑、d：全く遺物を伴わない土坑に分けられる。これら4種類の土坑については、dの全く遺物を伴わない土坑が最も多く、ついでcが少々で、a・bは数少ない。aの出土遺物には極めて完形に近いものから破片までみられる。a・bともに完形に近いものは数少ない。bは土坑が近接して掘られた事により、古い土坑に含まれていた遺物を壊してできた破片遺物が若干混じったものか、或いは土坑掘削時に包含層遺物を巻き込んだものかと思われるものである。単独ないしは2~3点の出土遺物を供献土器として捉えると、a・bは墓の可能性のある土坑である。また、器種が豊富で破片の多く混じった遺物が出土しているcは、ごみ穴のような廃棄土坑の可能性が考えられる。dは出土遺物が無いため、残存脂肪酸分析結果を取り上げると、墓としての可能性が高い。

### 3. 奈良時代建物群について

A・B地区において29棟の掘立柱建物が検出された。

これらの建物群は大きくは建物15(Ⅰ群)、建物35・41・43(Ⅲ群)、他の建物・柵(Ⅱ群)の3群にわけることができ、Ⅰ群は調査区外北側に、Ⅲ群は調査区外南側に展開するものと考えられる。

また、Ⅱ群も調査区外北側へ若干広がるものと考えられる。

また、建物群は8世紀中頃を中心として数時期にわたって展開したものと考えられるが、建物柱穴内からの出土遺物は少量であり、遺物からの建物群内の構成復元は困難である。

ここでは、Ⅱ群内の建物の方向、建物間の重複関係を検討することにより、建物群内の構成を考えていきたい(図136)。

A群：方位N-16°-Eを有し、建物10・37の総柱建物2棟の他、建物10の北側に位置する落ち込み8・東側に位置する溝55・87・88・90がこれにあたる。総柱建物の建物10は柱痕直径約0.3m、柱穴掘り方一边0.7~1.1mを測る重厚なものである。北柱筋のPit412の柱痕は柱筋が通るところに位置してお

り、この柱跡を建物10の一部と認めるならば、北柱筋のみ3間となる特異な建物となるが、その確証はない。

建物37は桁行長、梁間長ともに同規模のところから総柱建物の可能性が高い。落ち込み8は浅い「コ」の字型を呈しており、南側の建物10に付随するものと考えられるが、その性格は不明である。溝55・87・88・90は平行に伸びる溝であり、建物10・37に伴う通路の機能が考えられる。

B群：方位N-22°-Eを有し、建物21・22の2棟がこれにあたる。いずれも2×2間の総柱建物であり、後述する建物28との重複関係よりB群→C群の先後関係が認められる。

C群：方位N-20°-Eを有し、建物9・24・28・29がこれにあたる。建物28と29（C1群）は約3.3mの間隔を有して存在しており、総柱建物、掘立柱建物各1棟の2棟一組の組み合わせが想定される。また、もう一組として建物9と24の組み合わせ（C2群）を考えておきたい。建物9の総柱建物は柱痕直径約25cm、柱穴掘り方一辺60~105cmを測る特に重厚なものである。建物28は3×3間の総柱建物であるが、南柱筋の東西に通る柱穴が検出されている。さらに西側には建物に平行した3基の柱穴、東側には2基の柱穴が検出されている。これらの柱穴は建物28に付属するものであると考えられるが、どのような構造の建物か不明である。建物29は南北それぞれの梁間中央柱穴が外へ張り出している特徴を有する。重複関係よりA群→C群、C群→D群の先後関係が認められる。

D群：方位N-1°-Eを有し、建物5・19・25、柵7の掘立柱建物1棟、総柱建物2棟、柵1基がこれにあたる。建物19は桁行3間、梁間2間の規模を有するが、桁行は中央柱間が約2.3m、両側が約1.6mを測る変則的な柱間をもつ。また、南柱筋の中央柱穴は存在しない。

E群：方位N-12°-Eを有し、建物6・7・8・23・31・40の掘立柱建物4棟、総柱建物2棟がこれにあたる。建物7の南柱筋の中央柱穴は前述の建物19と同様に存在しない。建物8は調査区北側へ伸びる建物であるが、Pit468のみ柱筋がずれる。2×3間の建物になる可能性が高い。

F群：方位N-15°-Eを有し、建物34・38がこれにあたる。建物34は擾乱のため南東側が検出されていないが、総柱建物である可能性が高い。建物38の北柱筋中央柱穴は検出されていない。

G群：方位N-32°-Eを有し、建物39・26、柵2がこれにあたる。建物39と柵2は北端、南端をそれぞれ合わせており、平行して検出されている。

その他、建物11・14・33・35・36・41・43はA～G群とは建物方位が異なるが、各1棟のみの存在形態は考えにくく、A～G群との同時存在や調査区外の未検出の建物と組み合う可能性があろう。

以上のように、7群の群構造を想定することができ、2棟或いは3棟が一組となって存在していたことが推定できよう。また、先後関係をここでまとめると重複関係よりA群→C群、B群→C群、C群→D群が認められる。更に、C群建物24とE群建物23、E群建物7とG群柵2、E群建物40とF群建物38、F群建物34と建物33、建物41と43のそれぞれは位置関係から同時存在は考えにくい。

建物の平面形はそのほとんどが歪みをもっている。また、柱間間隔は1.0~2.3mを測り、個々の建物においても、等間隔には設定されていない。柱間はおよそ1.2~1.8mの数値におさまるものがほとんどである。尺単位に直せば、4~6尺前後の間隔が想定されるのであるが、建物の柱間の決め方として桁行き、梁間の全長を決定したのちに4~6尺前後の間隔でそれぞれを柱割しているという考え方もある（広瀬1989）。

また、センター調査区の東側の協会調査区では、43棟の奈良時代の掘立柱建物が検出されている。発掘調査報告書によれば、A～D群の4群の様相が明らかにされている（図137）。

A群は掘立柱建物13棟あり、そのうち総柱建物が2棟検出されている。4×2間、或いは5×2間の建物が4棟検出されているが、重複関係がみられ、同時存在は最大2棟である。そしてその北側に3×2間の総柱建物（倉）2棟が配置されている。そして周辺には3×2間、或いは2×2間の建物が数棟ずつ、併存していたと考えられている。建物群南側には井戸が検出されている。

B群では18棟の建物が検出されている。そのうち、4×2間の282-OB、3×2間の354-OB・17-OB、2×2間の47-OBの4棟とその北側にある3×2間の総柱建物（倉）の630-OB、393-OB、389-OB、387-OBの4棟が出土遺物、建物の規則的な配置・方位などから一時期に存在していたと考えられている。他の建物は切り合い関係がなく、前後関係は明らかにされていない。

C群では10棟の建物が検出されている。散在的な分布状況がみられ、その範囲は調査区外へ展開する

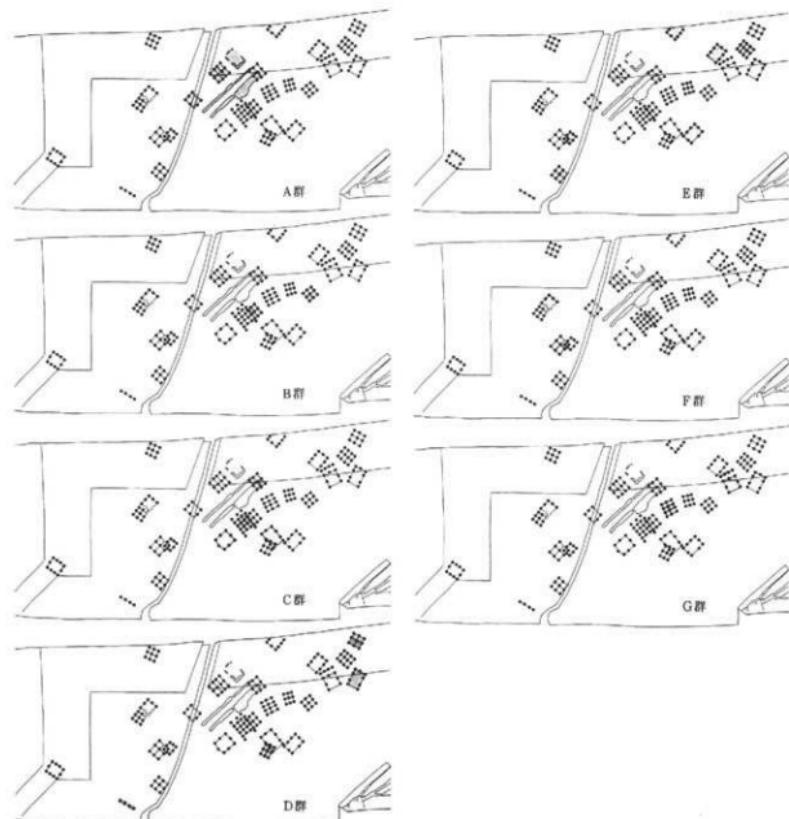
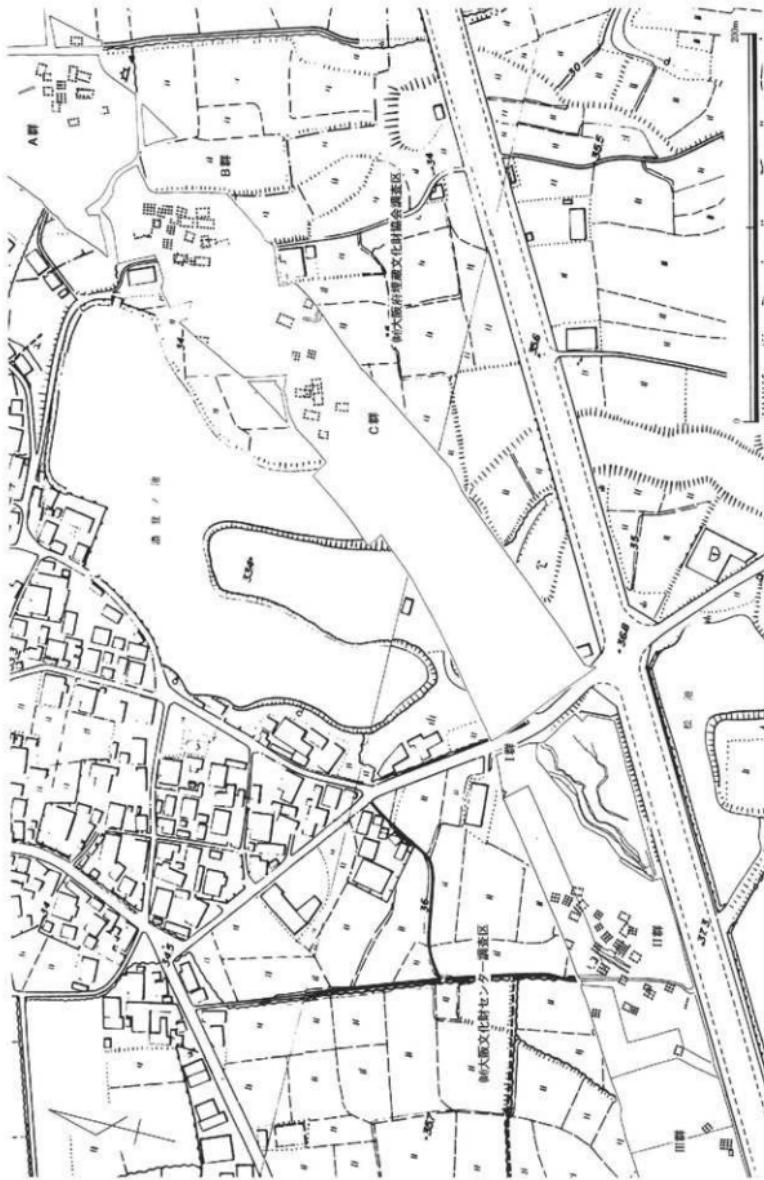


図136 建物群の構成

図137 センターと協会の奈良時代建物群配置図



可能性がある。建物は重複関係より数段階の設定が考えられている。141-OB1は5×1間の卓越した広さを有している。

D群はA群のさらに北側に位置しており、2棟の建物が検出され、調査区外への展開も考えられている。

このようにセンター調査区と同様に掘立柱建物と総柱建物（倉）の組み合わせにより、構成されていたことがわかる。

さて、この集落の集団を考える上で、地名にも残っている「大庭」が注目される。『新撰姓氏録』の和泉国神別の項には「大庭院神魂命八世孫天津麻良命之後也。」と記されており、また、奈良時代の僧侶である行基の活動を記した『行基年譜』の中に「大庭院在和泉國大鳥郡上神郷大庭村孝謙天皇二年天平勝宝二年庚寅三月十五日追為報恩起立云云如今者号行基院」とあり、行基追善のために大庭院が建立されたことが記されている。

考古資料においてセンター調査区からは瓦類の他に埴仏が出土している。協会調査区からは瓦塼の他、埴仏、硯が出土している。埴仏は左膝及びその足下の台座部分であり、須恵質である。硯には風字硯があり、裏面に「大…」の文字がヘラ書きされている。大庭寺遺跡から南方に約4km離れた光明池38-II号窯跡からは「大庭造国□」とヘラ書きされた平瓦が、南東へ約3kmの岡田寺跡からは「大庭寺瓦也仁安四年□年廿五日修理タウライカウ」と瓦当面に陽刻された軒平瓦が出土している。

このようなことから堺市大庭寺に大庭造の本貫地があり、大庭寺遺跡調査区のごく近辺に「大庭院」に関連した遺構が存在することが推定できる。センター調査区・協会調査区において検出された建物群は文献による大庭院の時期と前後する時期も含まれるが、大型の総柱建物も存在し、大庭造、大庭院に関係した有力豪族の生活域であった可能性が推定されよう。

周辺地域での、この時期の遺跡には深井清水町遺跡、池田寺遺跡、万町北遺跡がある。池田寺遺跡は南西方向に約4km離れたところに位置しており、古代寺院と共に7~9世紀の建物跡が81棟検出されている。大庭寺遺跡の建物群の時期である8世紀の建物群も明らかにされており、集落間の関係も注目されるところである。

(以上の第3項は『大庭寺遺跡I-調査の概要- 1991.3 助大阪文化財センター』の「VI.まとめ5.奈良時代」の項目に追加、変更したものである。)

## 第9節 まとめ

大庭寺遺跡については市本と小野が、既往の概報でまとめているので、ここでは遺構等の説明と同様に概報の内容を転載し、遺物の整理結果と合わせて掲載する。

大庭寺遺跡では6世紀から8世紀にかけての土坑（墳）群が、脂肪酸分析により墓としての可能性が高くなった。

大庭寺遺跡の主要な遺構を簡単に纏めると以下の様になる。

### 1. 繩紋時代

石器（石鎌、抉入石器、石匙）

### 2. 弓生時代中期

落ち込み（大型石庖丁、石庖丁未成品、柱状片刃石斧、サヌカイトの一括出土）

### 3. 古墳～飛鳥時代

溝、Pit、土坑群、掘立柱建物3棟

### 4. 古墳～奈良時代

1. 須恵器窯2基 (TG229: 6世紀後半、TG228: 7~8世紀)

2. C地区密集型土坑(墓)群、

### 5. 奈良時代

掘立柱建物29棟、柵2列、道路状遺構

### 6. 平安時代

掘立柱建物9棟、柵5列

### 7. 中・近世

溜池堤防、井戸、耕作痕、土坑墓

以下、それぞれについてまとめを行う。

### 1. 繩紋時代

石鏃、抉入石器、石匙が後世の遺構および包含層から出土している。近くの伏尾遺跡、小阪遺跡から繩紋時代の遺構が検出、或いは遺物が出土している事から、大庭寺遺跡においても調査区以外の地点で遺構の検出される可能性がある。

### 2. 弥生時代—落ち込み

中期の遺構として6Aトレンチの東側松池の堤防下で検出された落ち込み42から柱状片刃石斧1点、大型石庖丁1点、大型石庖丁未成品2点、不定形刃器4点、剝片1点、叩き石1点が一括で出土した。梅丘陵の反対側にあたる西斜面に位置する野々井西遺跡では当時期の遺構、遺物が甚がっており、その関連も注目される。

### 3. 古墳時代～飛鳥時代—溝、Pit、土坑群、掘立柱建物3棟

A～B地区にかけて検出された6世紀から7世紀前半の遺構群である。2Aトレンチ西端において東西方向に延びる溝(溝56～58・60等)があり、また2B・3Bトレンチにかけては南北方向に延びる溝(溝1・6・7・110・148等)が数条、重複しながら検出された。B地区の南北方向の溝の西側には当時期の遺構が疎らとなり、区画溝としての機能が考えられる。A地区の東西方向の溝も同様な機能を有した溝と考えられ、北側は遺構が疎らとなることが推定できよう。出土遺物の接合より溝57と溝1の同時存在が考えられ、L字型に囲まれた空間が想定される。

これらの溝、Pit群は須恵器窯TG229の時期と一部、併行しており、また出土遺物に須恵質の当て具が見られるところから陶邑窯跡群を背景とした須恵器生産に関与した遺構群としての性格も考えておかなければならない。東側の御大阪府埋蔵文化財協会(以下、協会と呼称)調査区では6世紀中頃を中心とする掘立柱建物が15棟検出されており、梅丘陵東側での遺構の拡がりが注目される。周辺遺跡をみれば、この時期の集落は少なく、石津川流域では菱木下遺跡において、6世紀後半から7世紀初頭までの集落が検出されている。

前述したB地区の南北方向の区画溝の西方から土坑611・612が検出された。鍛冶関連の土坑であり、

廃棄土坑の可能性が高いが、周辺からは鍛冶工房そのものの遺構は検出されていない。轔羽口、鉄滓が多く出土しており、鉄滓は分析結果より、 $Fe_2O_3$ の成分が70%以上のものが多くみられ、鉄塊そのものに近いものであるとの結果がでている。鉄滓は東へ約120m離れた溝57からも出土しており、更に東側の井戸22からも轔羽口がみられる。また石津川流域では太平寺遺跡、深田遺跡、さらに下流には土師遺跡、陵南北遺跡、東上野芝遺跡、四ツ池遺跡において鍛冶関連の遺構、遺物が検出、出土している。これらの遺跡はいずれも5世紀後半を中心とした時期であり、大庭寺遺跡はより新しく6世紀中葉頃にあたる。

土坑610は須恵器壺と須恵器壺の口縁を組み合わせ状態で検出した土坑である。墓としての可能性が非常に高い土坑と考えられるが、周辺に同様な土坑はなく、単独で存在していたようである。6世紀後半の時期が考えられる。後述する密集型土坑群とは谷を挟んだところに位置しており、両者の関連も考えていかなければならない。

当時の出土遺物は溝、土坑等の遺構の他に包含層からも多量にみられる。その内容は須恵器が大半であり、土師器は非常に少なく十数点程度である。今回の整理において、繩文の細片が極少量認められた。その出土地点に偏りがみられ、4Bトレンチの谷、5Bトレンチの土坑、3Cトレンチの包含層などから出土している。この繩文土器出土については、自然河川で流されてきたものが、谷状部分に残り、土坑の掘削の際に巻上げられて、土坑出土の他の遺物と共に検出されたものかと考えられる。

また、特筆すべき出土遺物として統一新羅系土器（1093、1094）をあげることができる。

統一新羅系土器は朝鮮半島の慶州を中心とした地域でみられるものであり、器壁の外面に細かいスタンプ文が施されている土器である。日本においては各地で少量ながらもこのような統一新羅系土器がみられ、様々な検討が行われている（江浦1987）。今回大庭寺遺跡より出土した土器は大型容器の蓋と考えられるものであり、破片は2点の出土であるが、同一個体と思われる。管見するところでは日本でのこの器種の出土はみられない。なお、年代に関しては1093は6Aトレンチ落ち込み44から出土しており、この遺構からは6世紀代から8世紀前半までの遺物がみられる。1094は6Aトレンチ包含層からの出土であり、6世紀代から10世紀後半の時間幅を持つ。

#### 4-1. 古墳時代～奈良時代～須恵器窯2基

未確認であった須恵器窯が2基検出された。いずれも6Aトレンチの松池の西斜面を利用して構築している。

TG229は6世紀中葉から後葉の窯であり、中村編年のII-1～4段階にあたるものと考えられる。西斜面の突出した部分の先端部分に構築している。焼成部の長さ2.8mのみの検出であり、残存状態は不良である。出土遺物の杯身、杯蓋には若干の時間幅が観察でき、また両器種の内側には複数の同心円文スタンプの押圧が観察される。また、ヘラ記号を有するものが13点あり、4種類みられる。

TG228は7世紀後葉から8世紀初頭頃の窯であり、中村編年のII-1～2からIV-1～2段階までの出土遺物のうち、その殆どはIII-2からIV-1～2段階にあたるものと考えられる。焼成部の長さ2.4mのみの検出であり、天井、煙出しは残存せず、燃焼部、灰原は調査区外へ伸びる。

出土遺物の杯蓋は天井部につまみを有し、口縁部内側にかえりを有した形態から、かえりが消滅する時期にあたるものであり、つまみは内側にかえりを有する蓋が宝珠形を呈し、かえりのない蓋が扁平な形態をとる。

杯身は無高台のものと高台を有するものがある。無高台のものは口径10cm前後と14cm前後のものが多く、底部から体部は屈曲してまっすぐ外上方へ伸びる。高台を有するものは口径14cm前後、18cm前後のものが多く、高台の位置が底部のやや内側に位置する。また、天井部と体部の境がなく、天井部がヘラ切り未調整の杯蓋が若干みられる。これらは前述してきた遺物の前段階のものであり、これらと組み合う杯身が若干出土しているが、このTG228にて焼成されたものと考えにくく、置き台として他から撤入されたものと考えたい。

ヘラ記号のついたものは4種類で4点みられたが、確実にヘラ記号と考えられるのは裏頭部外、内に付けられた2種類の2点だけである。

これらの須恵器窯は陶邑古窯址群（図138）と呼ばれる須恵器一大生産地内に位置している。この窯跡群は泉北丘陵に拡がっており、前田川、石津川、妙見川、和田川、甲斐田川、横尾川の水系が丘陵内を北流し、谷を構成している。この谷により、窯跡群を6地区に区分を行っている。大庭寺遺跡は石津川と和田川に挟まれた南北に長い桟地区に位置しており、この桟丘陵の北部には平坦な中位段丘が拡がっている。中位段丘上には6Aトレンチの松池から北東の濃登ノ池と連なる開析谷がみられ、この西斜面を利用して窯は構築されている。TG228・229はこの桟丘陵の窯跡の分布において最も北部に位置している。TG229は中村編年のII型式にあたり、近辺ではII型式の窯は東へ約100mの協会調査区においてその存在が推定されている。TG228はIII-2～IV-1～2型式にあたり、III型式の窯は南西へ約500m離れた今池谷において数基が検出されている。

#### 4-2. 古墳時代～奈良時代-C地区密集型土坑（墓）群

密集した土坑群の立地は、中位段丘上の深い谷筋に位置しており、調査区内においても特に低い所に土坑が密集している。同様なことは万崎池遺跡、菱木下遺跡でも言えそうである。本遺跡と同じ中位段丘上に立地しており、小さな深い谷状の地形を選んでいる。

深い谷を選んでいる大庭寺遺跡の土坑群の付近には幅4～10m、深さ0.4～0.6mの河川が存在しており、この土坑群の性格を示唆している。時期としては土坑群と同時期で、6世紀後半を中心として8世紀前半に亘るものである。

土坑群を構成する個々の土坑の大半は切り合い関係を以て群集しており、土坑は平面の形状や断面の形状から分類ができ、また大きさ、深さ、主軸の方向によっての分類も可能であり、本節において記述した。

土坑は一見単に密集しているかの様に見えるが、よく観察すると空白域（地）が存在する事である。勿論、調査区を全体的に見たときにも空白域（地）が存在している事は言うまでもない。例えば2Cトレンチと1Cトレンチの境の谷付近と2C・4Cトレンチの南側である。密集している1C・3C・5Cトレンチをみると調査区の南端や、1Cトレンチの谷側、5Cトレンチの建物の南側に空白域（地）が存在する。5Cトレンチの例を除いてはこの部分はやや高い所である。5Cトレンチの所は民家が建てられていたので削平された可能性もある。

密集している所も、1Cトレンチと3Cトレンチとでは大きく異なり、1Cトレンチでは土坑が掘削されずに低く帯状に削り出され、あたかも掘り残された様な箇所があり、土坑が掘削されていった状況が看取できる。また3Cトレンチでは、1Cトレンチ以上に密集しているが、子細に観察すると狭いけれど空白地が存在している。しかし、この土坑も河川に隣接しているものの、河川とは一定の空間をおいて

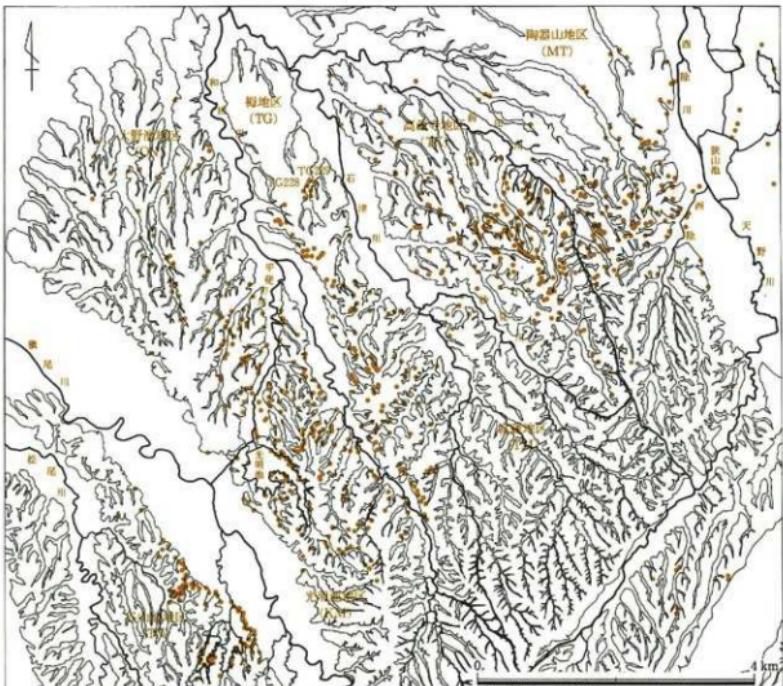


図138 陶邑古窯址群分布図

掘削されている事が分かる（註1）。

では、このような空白域（地）は一体なんであろうか。1つは墓道として考えられないかと言うことである。もう1つは墓道とも関連するが、空白域（地）と空白域（地）で囲まれた土坑群は1つの単位として捉えられないかと言うことである。3Cトレンチの南側の例を挙げると、6世紀後半から8世紀前半にかけて遺物が出土した土坑が空白域（地）を中心にして取り囲む様に存在している。また大型方形土坑もこれで1つのグループであろうし、また1C・2Cトレンチの離れて存在する土坑群もこれで1つのグループであろう。そのように見ると、このような空白域（地）は狭義の小さな墓域として考えられないであろうか。この様に小さなまとまりとまとまりが繋がりながら大きなグループを構成する。先の帯状に削り残された空白域（地）も墓道としての可能性が推測されよう。

土坑は一見無造作に存在するかの様に見えるが、ある計画性に基づいて一定の区画割が行われているものと推測される。遺物が出土する土坑ですべてにわたって語れないが、6世紀後半では河川1の西側に多くの方形の大型土坑が位置し、1C・3Cトレンチの南側に位置する。7世紀では1Cトレンチと3Cトレンチの北側にやや大きい不整な円形土坑が等間隔に位置するが、さらにそれに連なる様にして小土坑が位置しており、そして南側にも多く存在する。8世紀前半の遺物が出土している土坑は、6世紀後

半の土坑よりも少ないが3Cトレーナーの南西側より1Cトレーナーにかけて検出される。1Cトレーナーの南半部に目立つ。1Cトレーナーと3Cトレーナーの接する所の削り出した空白域（地）の箇所に、6世紀後半から8世紀前半の遺物が出土するグループがある。これら土坑に取りついで遺物が出土しない土坑もこのグループに属するものであろう。土坑の多くは切り合いか、または接して数基でまとまりを成しているのが特徴である。このまとまりを世帯共同体とし、このまとまりが他のまとまりに接して血縁者集団、ないしは同族者集団として構成されているのではなかろうか。

この種の土坑には、他の遺跡においても遺物があまり見られないのが特徴であるが、本遺跡では21%の出土率であった。ちなみに万崎池遺跡では19.1%、菱木下遺跡は10.8%の出土率である。土坑は切り合っているので遺物が2次的に動いている可能性もある。遺物は必ずしも完形品で出土することはないが、本遺跡では完形品が多い（註2）。離れた土坑と土坑の遺物が接合する場合もある。7世紀後半から8世紀前半の遺物に鉄鉢形土器や、鉢、壺、平瓶が出土しており、中には壺の破片が出土している土坑もある。万崎池遺跡や菱木下遺跡では壺の出土が目立つのに対して、本遺跡では壺の出土が非常に少ない。また1点のみ土師器の把手付き壺が出土しているが、先の2遺跡でも土師器は非常に少ない。これら出土する遺物を副葬品とみるかどうかは今後の課題であるが、菱木下遺跡では壺の破片は遺体を覆うか、遺体の下に敷かれたものとして想定されており、この点も今後検討されなければならない。なお万崎池遺跡では生焼けの須恵器も幾つか出土している。また菱木下遺跡の土坑墓STK343では壺の胴部片62片、3個体が浮いた状態で出土している。さらに菱木下遺跡の土坑群に近接して、遺物が多量に出土する土坑や、炭が多量に検出される土坑・溝が確認されている。この点についても要検討である。

遺物は土坑に沢山は入れられず、1点から数点入れられている。そういう意味合いでは3Cトレーナーの土坑1582と土坑343は特殊であると言わざるを得ない。前者は大型方形土坑群の北西に隣接して位置し、大量の遺物が出土しており杯身38点・杯蓋39点とその他の器種が、また後者は杯蓋7点、杯身2点が出土している。これらの土坑は時期的な差があるが、遺物の少ない土坑群にあっては、この様な状況が特殊であると言っても過言ではなく、葬送儀礼において供献されたものと推測されるのである。同様な遺構は菱木下遺跡でも存在し、土坑墓STK111で7点の完形品と石が出土している。

本遺跡では出土遺物の須恵器の他に石が1点出土している。土坑群では、その中と周辺で墓標となるものは見当たらないが、土坑2884では壺の破片と共に人頭大の石が出土している。同様な例は先の菱木下遺跡土坑墓STK111・109が挙げられ、墓標としての石の存在も考えられる。今後この様な点にも注意して遺構の周辺や遺跡の周辺も調査を行うべきであろう。

大庭寺遺跡の密集した土坑のすべてが土墳墓であったかどうかは今後より多くの残存脂肪酸分析やリン分析を行わなければならぬが、今回分析を行った結果、墓としての可能性をより一層高めたものと思う。6世紀後半から8世紀前半の本遺跡では、土坑群の立地より河川1の西側の浅い谷状の地形を墓域としていたと考えられる。密集した土坑群は、最近の調査では26遺跡あり、19遺跡は大阪府である。そのうち17遺跡は大和川より以南に所在しており、堺市とりわけ陶邑とその周辺に多いのが指摘されよう。6世紀後半から8世紀前半の陶邑では、群集墓に横穴式石室のものや塙室のもの（主体部が四柱式陶棺も含む）、カマド塙（木芯粘土室）、土墳墓（無遺物、遺物有、藏骨器、敷石）、土墳墓（木棺直葬）、土墳墓（火葬墓？）など多種多様な葬法が見られる。また他地域では墳墓（高塙）・横穴墓・火葬墓も存在するのである。この様な中にあって本遺跡の土坑群は、どのように位置付けられるであろうか。従来の考えでは、例えば横穴式石室に葬られる人と、土墳墓に葬られた人とは、これを階級的な身分差と

して捉えられ、おのずと土壙墓は一般庶民と考えられていた。このように身分差として考えられるのか、あるいは集団の葬法による違いとみなすのか。また遺物から見ても、遺物を含む土坑と含まない土坑が存在する事から、これも身分的な差として考えるのであろうか。または葬送儀礼における違いなのであろうか。現在、この種の土坑（墳）の捉えかたには大きく2説ある。1つは粘土採掘坑で、もう1つは土壙墓説である。本遺跡では分析によって後者の説に大きく近づけたと言えよう。後者の説では(1)先の階層を表し、庶民層の共同墓地を想定する（註－3）。(2)被葬者の職業を表し、陶邑では須恵器工人の墓とする（註－4）。(3)社会的な要因から文献に見える疫病とする考え方（註－5）があり、他には火葬墓や、両墓制を想定している人もいる。(1)は福永伸哉氏、(2)は『松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書1』、(3)は西口陽一氏等である。いずれにせよ土壙墓は庶民層が想定されている。しかし、それを裏付ける考古学的資料は乏しい。また(3)に関しても1つの要因として考えられるが、土壙墓群全てに対して説明できる資料は確認されていない。北野俊明氏の両墓制説（註－6）に対してもしかりである。氏が根拠とした土坑の形状と法量から果たして小児用か胞衣が埋納されたかどうか説明できるのであろうか。また葬地である第一次埋葬が想起される所以は何であろうか、民俗学あるいは考古学的に説明されるべきである（註－7）。また樋口氏の火葬墓説（註－8）もそうである。どの場所で火葬されたのであろうか。疑問は多く残る。しかし、この時代は仏教とも関わってくるので、この点にも留意しつつ今後の課題としておきたい。

密集した土坑群は、当然のことであるが先ず地形的（地質も含む）・位置的（立地）な環境と、周辺の歴史的な環境を抜きにしては語れず、さらに土坑群が存在する箇所の微地形にも及んで調査をしなければならない。また周辺遺構も現地で検討しなければならない。また土坑内の埋土の科学的分析（残存脂肪酸分析・リン分析等。土採集の仕方に注意）、層序の検討（人為的に埋め戻したものかどうか）もされなければならない。また、土坑の壁面・底面を丹念に観察しなければならない。以上の事柄を調査の際に注意し、墓地内の土坑の群構成等の細かな分析がされなければならないと考える。

## 5. 奈良時代—掘立柱建物29棟、櫛2列、道路状遺構

A・B地区から検出された建物群は8世紀前半を中心とした数時期にわたって展開されたものと考えられており、既に第8節3.において、市本が記述している。それらは大きく3群にまとめられている。I群は建物15、III群は建物35・41・43、II群はその他の建物・櫛である。

II群は建物の方向、建物間の重複関係により、更にA～G群に細分されている。A群には建物10・37、落ち込み8、道路状遺構、B群には建物21・22、C群には建物9・24・28・29、D群には建物5・19・25、櫛7、E群には建物6・7・8・23・31・40、F群には建物34・38、G群には建物39・26、櫛2があてられている。これらは2棟あるいは3棟が1組となって存在し、重複関係よりA群→C群、B群→C群、C群→D群の先後関係が推定されている。

I・II群は調査区外北側に、III群は調査区外南側に展開したものと想定されている。

## 6. 平安時代—掘立柱建物9棟、櫛5列

A・B地区において10世紀後半の9棟の掘立柱建物が検出されており、その軸方向はN-0～20°-Eを有し、個々の方位はすべて異なっている。そのため前述した奈良時代建物群のような群構造を推定することはできない。但し重複関係より、建物1と建物2、建物2と建物3、建物17と建物18、建物3

と柵1はそれぞれ同時存在はしないことが確認でき、数時期の建て替えが行われたことが考えられる。またこの建物群には総柱建物は検出されていない。

協会調査区においても当時期の建物跡が検出されており、奈良時代建物群と同様に松池、濃登ノ池の開析谷を挟んで両側に展開していたことが想定される。

## 7. 中・近世—溜池堤防、井戸、耕作痕、土坑墓

中世になると耕作域としての開発が行われるようである。

近世も引き続き、耕作地として使用され、井戸の掘削も各所で行われた。開析谷にはこの時期に堤防が築かれ、溜池としての利用が行われた。また、3Aトレンチでは楕円形の土坑が7基検出されており、「墓」としての性格が考えられる。

以上、大庭寺遺跡では弥生時代以来の営みが明らかにされたのであるが、諸般の事情により同一遺跡を道路を挟んで異なる組織が調査することになった。そのため資料の制約等により、(財)大阪府埋蔵文化財協会の成果を十分に取り組むことができなかった点もあり、今後、より一層詳細な検討を加えていく必要がある。

註－1. これを書いた小野の見解とは別に、もう一人の調査担当者である市本は、以下のように考えている。

「C地区の最初の調査トレンチであった1Cトレンチ掘削時では、土坑群を単なる谷地形と認識していた。調査途中において、『土坑群』であることが確認できたため、すべての土坑を検出することができなかった。このような事情により、1Cトレンチと2C・3Cトレンチに密集度の差がみられるだけであり、本来は、3Cトレンチのように密集していたと考えている。」この見解の相違をこの報告書にてまとめるべきであったが、できなかった。

註－2. 密集型土坑群から出土した遺物は調査担当者の表現では完形品が多いとされているが、遺物整理の結果では完形に近い遺物の出土もみられたという表現にしたい。

註－3. 福永伸哉「古墳時代の共同墓地—密集型土壙群の評価についてー」『待兼山論叢』第23号 1989 大阪大学文学部

註－4. 『松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1984 (財)大阪文化財センター

註－5. 西口陽一「畿内の群集土壙墓」『考古学研究』第37巻第1号 1990 考古学研究会

註－6. 北野俊明「中百舌鳥遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第14集 1983 堀市教育委員会

註－7. 北野氏は「三昧」と書かれているが、「三昧」であろう。祭地である齒で墓はどの様に考えておられるのであろうか。両墓制の時期的な問題として重要である。

註－8. 繩口吉文「榆尾第3地点」『陶邑Ⅵ』第37号 1990 大阪府教育委員会

## 参考文献

『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30号 1980 大阪府教育委員会

李本隆裕「北鳥池遺跡出土の再整理」『東大阪市調査会年報1970年度』

江浦 洋 「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌』第74巻第2号 1988

(財)大阪府埋蔵文化財協会『大庭寺遺跡発掘調査』現地説明会資料13・15・19・24・28

(財)大阪文化財センター『池上遺跡第三分冊の二 石器編』1979

- 亀田修一・亀田菜穂子「塑像と埴仏」『季刊考古学』34号 1991
- 倉吉博物館『特別展 塩仏』1990
- 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』80号 1974
- 西口陽一「畿内の群集土壙墓」『考古学研究』145号 1990
- 福永伸哉「古墳時代の共同墓地—密集型土壙群の評価について—」『待兼山論叢』第23号 1989
- 広瀬和雄「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告第22号』1989

表 9 大庭寺遺跡土坑一覧表(1)

面積の+は存値、( ) は推定値

土坑No.	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積(m <sup>2</sup> )	埋土	出土遺物	時期
1 1B	1.9	0.6	0.05	0.9			II-7 磁器片2点(外灰1点)。土器鉢片1点。	II-?
2 1B	2.5	1.2	0.11	2.5			II-6~7 磁口1ヶ体分(生焼)。甕座・体部1ヶ体分点(生焼)。	II-?
							II-1 瓦片4点(外灰1点)。磚瓦片1点)。II-2 磁頸壺底1点。甕体部底4点。甕1(底部鉢片)1点。瓦蓋・瓦基杯口1点(1/4周)。瓦蓋13点(外灰2点)。生焼6点)。II-4 瓦片4点(外灰1点)。内当具底1点。瓦みかけ1点)。II-4~6 瓦片1点。	
3 1B	6.4+	2.5+		0.15	9.2+	10YRS1/4薄灰色砂質土	II-7 磁器片10点(外灰1点)。内当具1点。生焼1点)。甕口2点。II-4~7 瓦片受器5点(外灰)。甕体底。甕or 瓦少し(生焼含む)。土器鉢片。	II-4~5
							II-2 磁口1ヶ体分(生焼)。II-7 磁颈壺片1点(外灰)。甕口1点。甕少し。甕?or 瓦口1ヶ体分(生焼)。ハゲナガ?。土器鉢片。	
4 1B	3.7	2.0+		0.15	5.8+(8.6)	10YRS1/4薄灰色砂質土	II-1 瓦片1ヶ体分(外灰)。II-17 瓦片受器5点(瓦かしあらし)。II-2~4 瓦片6点(外灰3点)。圓錐15点(外灰1点)。磚瓦片1点(外灰2点)。舟身1点)。II-2~3 小口1点。II-3~4 瓦身1点。II-7 瓦片受器5点(生焼1点)。外灰1点)。瓦底1点(瓦1点)。瓦蓋1点(瓦1点)。瓦基杯口2点(生焼1点)。甕口1点。瓦蓋・瓦少し。甕?or 瓦口1ヶ体分(生焼)。ハゲナガ?。土器鉢片。	II-2
5 1B	2.4+	1.9+		0.15	2.5+		II-2 瓦片5点(形態1点)。甕形1点。底部1点。外灰2点)。II-7 (瓦口1ヶ体分片1点)。瓦身1点)。II-2~3 瓦片1点。II-3~4 瓦身1点。II-7 瓦片受器5点(生焼1点)。外灰1点)。瓦底1点(瓦1点)。瓦蓋1点(瓦1点)。瓦基杯口1点(瓦1点)。甕口1点。瓦蓋少し。甕?or 瓦口1ヶ体分(生焼)。ハゲナガ?。土器鉢片。	II-3~4
6 1B	2.5	1.9+		0.09	3.3		II-2 瓦片5点(瓦1点)。瓦身1点)。II-2 瓦片1点。II-3~4 瓦片受器5点(生焼1点)。瓦身1点)。II-2~3 瓦片1点。II-3~4 瓦片少し。II-7 瓦片受器5点(生焼)。甕体部2点(生焼1点)。	II-2
7 1B	2.8+	1.4		0.12	3.0+(3.4)		II-3 瓦片5点(外灰)。甕体部鉢片1点。	II-3
							II-2 瓦片5点(外灰)。II-4~6 瓦片4点(外灰1点)。II-7 (瓦身(受器2点)。立上2点)。口縁1点)。瓦口1ヶ体分片1点(瓦1点)。瓦身1点)。II-2~3 瓦片1点(外灰1点)。瓦底1点(瓦1点)。瓦蓋1点(瓦1点)。瓦基杯口1点(瓦1点)。II-5~6 瓦片受器5点(生焼)。瓦身1点)。瓦底1点(瓦1点)。瓦蓋1点(瓦1点)。瓦基杯口1点(瓦1点)。II-6~7 瓦片4点(外灰1点)。瓦底1点(瓦1点)。II-7 瓦片1点。II-8 瓦片舟身1点。	
8 1B	1.2+	2.1		0.02	2.1+		II-2 瓦片5点(瓦1点)。II-4~6 瓦片4点(外灰1点)。II-7 (瓦身(受器2点)。立上2点)。口縁1点)。瓦口1ヶ体分片1点(瓦1点)。瓦身1点)。II-2~3 瓦片1点(外灰1点)。瓦底1点(瓦1点)。瓦蓋1点(瓦1点)。瓦基杯口1点(瓦1点)。II-4~5 瓦片舟身1点。	II-4~5
9 1B3B	5.6+	2.3+		0.14	9.2+		II-1 瓦片1点。II-2 瓦片4点。瓦底4点(相手2点)。II-1~2 瓦片1点。II-3~4 (瓦身2点)。瓦底3点)。II-4~6 瓦片6点(外灰1点)。瓦底1点。II-3~4 (瓦身2点)。瓦底3点)。II-5~6 瓦片1点。II-7 瓦片受器5点(生焼)。瓦身1点)。瓦底1点少し。瓦蓋1片少し。瓦2~3 台形竹筒1点。II-8 瓦片1点。	II-5~6?
10 1B2B	4.0	3.3		0.16	8.9+		II-1~5 瓦片5点(瓦1点)。II-2 瓦片5点。II-3~7 瓦片舟身1点(生焼)。甕口1ヶ体分少し。不明細片1点)。	II-2~3
11 1B2B	3.7	2.6		0.17	6.7		II-4~5 瓦片1点(1/4周)。	II-4
12 1B	1.0	0.5		0.04	0.6		II-4~5 瓦片1点(1/4周)。	
13 1B	1.1+	0.5+		0.04	0.3+(1.1)		II-7 瓦片舟身1点。	II-7
14 1B	1.1	0.9		0.07	0.7		II-6~7 瓦片舟身1点。	II-2
15 1B	1.1+	0.6		0.09	0.4+		II-6~7 瓦片舟身1点。	
16 1B	0.9+	0.6		0.04	0.3+(0.5)		II-3~5 瓦片5点(瓦1点)。II-2~4 瓦片2点。II-5~6 瓦片6点(外灰1点)。瓦底1点。II-3~4 (瓦身2点)。瓦底3点)。II-4~6 瓦片舟身1点。	
17 3A	0.4	0.3		0.03	0.1		II-2 瓦片1点(外灰)。甕体部鉢片1点。甕口1ヶ体分片1点。	II-2
							II-3~5 瓦片5点(瓦1点)。II-2~4 瓦片2点。II-5~6 瓦片6点(外灰1点)。瓦底1点。II-3~4 (瓦身2点)。瓦底3点)。II-4~6 瓦片舟身1点。	
18 1B	0.9	0.6		0.04	0.3		II-1~4 瓦片4点(瓦1点)。II-2 瓦片1点。II-3~4 6 瓦片1点(外灰)。瓦身1点(瓦1点)。甕体部1点)。	II-4
19 1B	2.9+	0.9+		0.05	1.2+		II-1~5 瓦片5点(瓦1点)。II-2~4 瓦片2点。II-5~6 瓦片6点(瓦1点)。瓦底1点。II-3~4 6 瓦片舟身1点(外灰1点)。瓦身1点(瓦1点)。甕体部1点)。	II-3~4
							II-6~7 瓦片5点(瓦1点)。II-2~4 瓦片2点。II-5~6 瓦片6点(瓦1点)。瓦底1点。II-3~4 6 瓦片舟身1点(外灰1点)。瓦身1点(瓦1点)。甕体部1点)。	
20 1B	3.5+	2.4+		0.34	5.1+		II-2 瓦片1点(外灰)。II-2 瓦片舟身1点(生焼)。甕底1点(外灰)。II-3~4 瓦片5点(外灰)。II-2~3 瓦片2点(外灰)。II-4~5 瓦片舟身2点(1/3個体)。瓦底2点(1/3個体)。II-5~6 瓦片舟身2点(1/3個体)。瓦底2点(1/3個体)。	
21 1B	1.9	1.5		0.15	1.6		II-2~2 瓦片1点(外灰)。II-3~4 瓦片舟身2点(瓦1点)。II-4~5 瓦片舟身2点(瓦1点)。瓦底1点。II-3~4 6 瓦片舟身2点(瓦1点)。瓦底1点)。	
22 1B	1.1	0.8		0.12	0.6		II-3~4 瓦片舟身2点(瓦1点)。瓦底1点)。	
23 1B	1.7	0.8		0.11	1.1			
24 1B	1.1+	0.6+		0.05	0.5+			
							II-1 瓦片1点(外灰)。II-2 瓦片舟身1点(生焼)。甕底1点(外灰)。II-3~4 瓦片5点(外灰)。II-2~3 瓦片2点(外灰)。II-4~5 瓦片舟身2点(瓦1点)。瓦底1点)。	
25 1B3B	2.7	1.1		0.13	2.5+(2.6)		II-1~3~4 瓦片4点(外灰)。II-2 瓦片舟身1点(生焼)。甕底1点(外灰)。II-3~4 6 瓦片舟身2点(瓦1点)。瓦底1点)。	II-2
26 1B								

表9 大庭寺遺跡土坑一覧表(2)

面積の+は残存値、( )は推定値

土坑No	径幅(m)	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	面積(m <sup>2</sup> )	埋土	出土遺物	時期
26 1B	3.2+	2.6		0.15	5.7+	10YR6/1褐色灰色砂質土、 10YR6/1褐色灰色砂質土(炭 化)、10YR7/1褐色灰色砂質 土(炭化)、2.5Y7/1褐色灰色	II-2? 壁身1点。II-1~2杯身1点(外灰)。II-? (杯身[立上部 1点]、受底部片1点(外灰4点、生灰5点))。杯蓋細片4点 (外灰)、杯蓋蓋1片(1点)、杯口蓋少し)。蓋底部細片1点 (生灰)。器1点。要体細片多い(器子と合計)。土師縫繩 縫1点。	II-2
27 1B	2.7	0.9+	0.14	2.1+			1-3杯身1点。II-2(杯蓋細片1点(生灰)、杯蓋細片1点(外 灰))。II-3~4(杯身1点(1/3周)、蓋細片1点(略充て))。 II-4~5(杯身細片1点(内灰)。器口蓋片1点(生灰)、蓋 中央部1点(生灰)。要体細片1点。中堅底細片1点(生灰)。	II-4~5
28 1B	1.1	0.6	0.09	0.4			II-2(杯蓋細片1点)。II-? 壁身1点(外灰)。	II-2
29 1B	3.1	2.1	0.32	4.8		7.5YR6/1褐色灰色砂質土、 7.5YR4/1褐色灰色砂質土(炭 化)	II-1~5(壁身2点)。III-1(杯身2点(外灰 1点)、杯蓋細片1点)。II-2(杯身1点(生灰)、 杯蓋1点(略充て)、杯蓋縫1点)。II-2~7(杯身立上 部1点)。	II-3~4
30 1B	2.4+	0.9+	0.06	1.5+			II-4(器口縫1点)。III-7(杯口縫細片1点。杯身受部1点(外灰)。 器口杯2点。要体細片。蓋口縫少々(生灰含む))。	II-4
31 1B	1.0	0.9	0.08	0.7				
32 1B	0.9	0.3+	0.14	0.3+(0.4)			II-1(杯蓋1点)。II-2(杯身1点(生灰)。杯蓋7点(外灰6点、 生灰1点)、杯蓋縫1点、高杯脚1点)。II-2~3(杯身2点(1/3 周、内当柱1点))。II-3~4(杯蓋2点(略充て内灰1点、生灰 1点))。II-4(器口縫1点)。	II-4
34 1B3B	4.6	2.2	0.19	8.0+(8.7)			II-7(杯身受部9点(生灰1点)、杯蓋2点(略片1点)、杯 口縫少々(生灰含む)、平底?1点、不明1点、蓋縫片2点(縫片1 点)、要体細片少々(生灰含む))。	II-4
35 1B3B	3.4+	0.8+	0.08	2.7+(4.2)				
36 1B	2.4	0.9	0.09	1.1			II-7(器口杯1点)。	II-?
37 1B	1.2	0.6	0.07	0.4				
38 1B	0.7	0.6	0.03	0.2		2.5Y5/1褐色灰色灰質土、 6Y7/6黄色沙質土、6Y7/3灰 色灰質土、10YR3/3暗 褐色灰土(健巣が焼付)		
39 1B	1.5+	1.1	0.13	0.9+			要体細片少し。蓋口縫少し。數把1点。II-7(杯身立上 部細片1点、土師縫繩縫片1点)。	
40 2A	1.2	0.4	0.07	0.3				II-?
41 2A	0.9	0.6	0.06	0.3+(0.4)			II-7(杯身受部細片1点(生灰))。	II-?
42 2A	1.2+	0.6+	0.04	0.5+			II-4杯身1点。II-7(高杯蓋天部2点。杯身受部細片3点(生 灰1点)。蓋口縫片1点)、杯口縫細片1点、土師縫繩片1点)。	II-4
43 2A	0.8+	0.5+	0.03	0.2+			要体細片少々。土師縫繩片1点。	?
44 2A	1.1+	0.4	0.05	0.3+(0.6)			II-2杯蓋細片1点(生灰)。要体細片1点(生灰)。	II-2
45 2A	1.2+	0.4+	0.11	0.4+(0.9)				
46 2A	2.0	1.1	0.38	1.9			II-7(器口縫細片1点)。II-7(器口縫細片2点、要体細片1点)。	II-6
47 2A	2.0+	1.3	0.26	2.1+		10YR6/2灰褐色沙質土、 10YR6/3C灰褐色沙質土、 SYRA/1褐色沙質土(10YR7/4にぶ い褐色)ブロック含む)	II-1杯身2点(外灰)。杯蓋細片1点。II-2~7杯身1点(外 灰1点)。蓋口縫片2点。II-2~7(高杯蓋細片1点(生灰2点、 生灰2点)。II-3?杯身1点)。器1点。蓋口縫片2点(生灰2点、 外灰1点)。II-4~5杯身1点。II-5~6(杯蓋細片1点(生 灰)。II-6~7(杯身1点)。要体細片4点。要體13点(生灰3点、 外灰1点)。器蓋細片1点。器口縫細片1点。要体細片多量)。	後世
48 2A	0.7+	0.2+	0.06	0.1+(0.5)				
49 2A	0.7+	0.3+	0.05	0.1+(0.3)				
50 2A	2.1	1.1	0.48	2.2		7.5YR5/4にぶい褐色沙質土 7.5YR6/1褐色沙質土	要体細片。蓋口縫少々。	?
51 2A	1.6+	0.6+	0.06	0.8+				
52 2A	1.5+	0.6+	0.04	0.8+				
53 2A	3.4+	1.4	0.08	3.6+(3.8)				
54 1B	3.7+	1.6+	0.12	6.0+(8.5)			II-1杯身2点(外灰)。II-2杯身1点。II-3~4杯身2点(外 灰1点)。杯蓋1点(外灰)。II-7(杯蓋細片3点(生灰1点、外 灰2点)。器蓋少々)。蓋蓋少1点。蓋口縫1点。要体細片少 々。	II-3~4
55 1B	0.6	0.5+	0.10	0.4+(0.6)			II-3~4杯身1点。II-7(器口縫1点(内灰))。	II-3~4
56 1B	2.1+	0.7	0.10	1.2+(1.3)			II-1杯身1点(外灰)。II-2~5杯身1点(1/3周、ハラ記号)。 II-2杯縫繩縫片1点。底盆~底縫繩縫片1点。	II-2~3